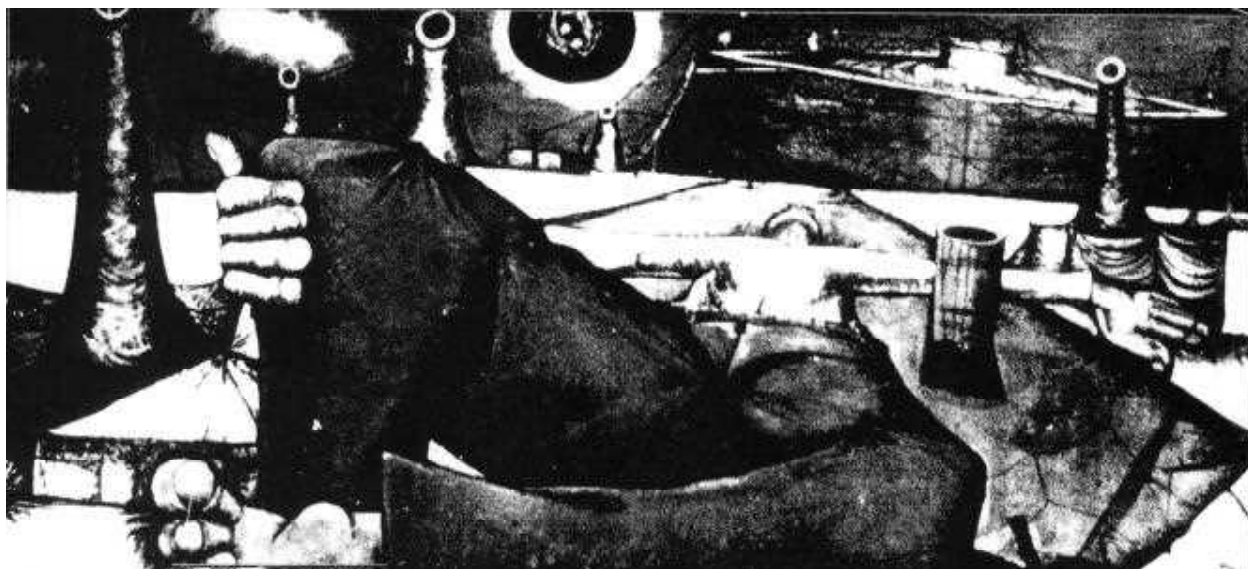


---

# 「拒否」の〈前〉線情報 No.1

---



(尾藤 豊作品集「失われた土地」から)

**FOCUS** 課題の所在：「拒否」が拓く地平に「日本の『構成』的解体」へのベクトルを描く  
.....2

**IN/OUT** 平井玄：「敵対線を引き直す」 .....33

## 「拒否」の〈前〉線情報

フリーター全般労組・反原発企画：  
「3・11 北へ西へ。…」をめぐって .....41

## 遠方からの風信

ある青年からの風信 .....131

生・労働・運動ネット富山

“The crying swallow flies at dawn.  
The sun’s radiance is also very sad.  
Even the sound of the wind...  
Pierces a stony heart.  
Ideal for a burning cheek,  
There’s a frozen asphalt bed.  
I don’t need a silver needle  
To mend a shredded flag.  
I will file my nails in the dark.  
This is our battle ground.  
A silent battle front.  
A crying swallow flies at dawn.  
In the streets at daybreak,  
Leaves flutter in the wind.  
I throw a tiny flame  
Towards burning crimson blood  
In any barren field.  
Burn the dawn  
Burn the street dawn!  
This is a fire.  
Oh fire, this is...  
Our battle ground.  
This is a fire,  
Oh fire, this is...  
Our silent battle front. ”

From “*Ecstasy of the Angles*”  
(directed by Koji Wakamatsu )

# 目 次

<b>FOCUS</b>	課題の所在：「拒否」が拓く地平に「日本の『構成』的解体」へのベクトルを描く・・・2
--------------	---

<b>IN/OUT</b>	平井玄：「敵対線を引き直す」・・・33
---------------	---------------------

## **「拒否」の「前」線情報**

### フリーター全般労組：反原発企画

「3・11 北へ西へ。語るべきだが語られてこなかったこと」をめぐって・・・41
---

はじめに・・・41
-----------

I. フリーター全般労組・反原発企画・・・42
-------------------------

II. 矢部史郎さん／北島教行さんの軌跡・・・45
---------------------------

II—a. 矢部史郎さん——その軌跡・・・45
-------------------------

II—a. 〈補註〉・・・81
-----------------

II—b. 北島教行さん——その軌跡・・・89
-------------------------

II—b. 〈補註〉(1)・・・111
---------------------

II—b. 〈補註〉(2)・・・116
---------------------

III. 矢部さんの動線〈と〉北島さんの動線 —〈と〉：交錯／出会い／出会いそこね・・・121
--

IV. そして・・・129
---------------

終わりに・・・130
------------

<b>遠方からの風信</b> ：ある青年からの風信・・・131
---------------------------------

---

# FOCUS

「3・11／12」から2年余。この列島で展開されている多なる「拒否」の〈前〉線のありかを探り、それらが拓く地平を見定め、そこに日本の「構成」的解体のベクトルを描こうとする試み

---

## 課題の所在：「拒否」が拓く地平に「日本の『構成』的解体」へのベクトルを描く —「アンラーニングプロジェクト・2011 ～2013」の試みから—

### はじめに

「3・11」以降の反・脱原発運動の高まりの中で、とりわけ、原発ゲート前をバリケード封鎖・占拠した昨年「大飯原発再稼働阻止闘争」に現れているように、「軍事植民地」的状況を強制する日本国家への「拒否」を突き付ける沖縄の人々の闘いと遠く連動するような、「『拒否』の〈前〉線化」と呼ぶに相応しい非暴力・直接行動の連鎖が、ようやくこの列島上で生まれつつあるように感じている。

そうしたこの列島上での「『拒否』の〈前〉線」のありかを探りながら、それが拓く地平に日本の「構成的」解体へのベクトルを描き出すことに向けて、戦後日本国家の構成原理の原型／変容／現在を改めて捉えなおすこと。私・たちは、「『拒否』が拓く地平—日本の『構成的』解体の方へ」をテーマとして、今年4月から「アンラーニングプロジェクト・2013」をスタートさせている。

この数年間、生・労働・運動ネットでは、私たちがこの世界に生きる中で身につけてしまっている体制的な価値観を「学び捨てる(unlearn)」ことに向けて、「アンラーニングプロジェクト」という自由な討論・学びの場を営んできたが、その中で「日本の『構成』的解体」ということを論議の大きなテーマとしてきた。現在、自民党・安倍政権は、単なる個別の政策課題の手直しに止まらず、まさに戦後の日本の国家レジームそれ自体の「右」からの突破に着手しようとしている。そうした状況に対して、私たちの側から「日本の『構成』的解体」をいかに進めるかが、改めて問われているように思う。

私・たちが目指したいことのイメージをもう少し明らかなものにするために、「3・11」以降の私・たちの歩みの中で、「日本の『構成』的解体」ということをめぐってどのように考えてき

たかを、以下、たどりなおしてみたい。

## 1. 「驚天動地」の事態の中で「〈エクソダス〉2011」をスタートさせる

「日本の『構成』的解体」というのは、もう少し分かりやすく言えば、私たちの「生」の破壊・侵害を自らの存続の「糧」とするようなこの日本国家－社会のあり方を私たち自身がこわす、ということに他ならない。富山の私・たちがそのことを自覚的に自分たちの運動の課題と捉えるようになったのは、貧困の拡大や「生」の保障の破壊による「生の困難」の問題が、決して「自己責任」などではなく、「小泉構造改革」以降強行されてきたネオリベ政策の結果だと広く認識されるようになった 08 年頃からだったように思う。

「3・11」以降、そうした「生の困難」ということが、労働や社会保障の領域の問題に止まらず、人間がこの世に生を受けて育ち、子を産み育て、老いて死を迎えるという、まさに、「生」の再生産という社会の最も根底にある営みにまで及ぶようになってしまったことを、私・たちは強く感じていた。同時に、原発事故による放射能汚染によって、人間の「生」の時間を超える程の長期に渡って、この列島上の広大な範囲の地域で安定的な暮らしを営むのが困難になってしまったという事態に対して、自分たちは何を手がかりにしてどう考えたらいいかということ自体が、もはや自明ではないという戸惑いもあった。そのような事態を前に、しばらくの間、私・たちは意気消沈し、ほとんど思考停止状態に陥りそうになっていた。しかし、むしろ、こうした事態であればこそ、自分たちがこれまで獲得してきた力や経験を最大限結集し、どのように〈前〉に出るかが問われているのではないかと、しだいに私・たちは考えるようになっていった。

反原発運動の側からの警告を無視して、電力会社が目先の利益のために老朽化した原発を動かし続け、国の原子力規制行政もそれを追認してきたことの結果として原発事故が起きたという意味で、巨大地震が「引き金」とはいえ、この原子力災害は「人災」以外の何ものでもない。また、この国の政府は、原発から半径 20 ～ 30km 以内のごく限られた範囲を除けば、深刻な放射能汚染の中に多くの人々を「放置」したまま、放射能による健康被害をとりわけ受けやすい幼い子どもや妊婦を優先的に避難させることさえもしていない。

そこにも現れているように、紛れもなく「人災」である原子力災害の被害が、このような事態を生み出した者たち自身によって更に人為的・「政策的」に拡大していく様子を、私たちは否応なく見せつけられていた。そのように私たちを容赦なく「見殺し」にするこの日本国家－社会を私たち自身が見限り、私たちにとつてもない「生の困難」を強いる者たちを「解任」すること、そこから更に、東日本大震災／原子力災害の同時発生というこの「驚天動地」の事態を日本国家－社会の「構成的『解体』」へと「反転」させること——私・たちはこの事態をどのように迎えるかをめぐって自分たちの内部で論議を進める中で、そのことが自分たちにとっての大きな課題としてあるということ、少しずつ確かめていったように思う。

私・たちは、そうした論議をもう少し具体性をもって考えることを促したり、それに対してよ

り豊かなイメージを喚起してくれたりする一群の言葉に出会ってきたが、そのような言葉の一つに「避難都市」がある。「避難都市」というのは、政治的な思想によって自らの属する国家によって迫害されている作家を積極的に保護しているフランスのストラスブル等のヨーロッパの複数の都市を指しているが、それらの「避難都市」はまた、国境を越えた都市間のネットワークを形成している。そのように、迫害や生命の危機からの「避難」ということと、地域の「自治／自律」が分かちがたいものとしてあるあり方に触れることで、そこに私・たちがこの「驚天動地」の事態をどのように迎えるかを考えるための重要なヒントがあると感じていた。

福島原発事故後、連日のように、「ただちに健康への害はありません」という決まり文句を繰り返すだけの政府関係者の姿をテレビで見ながら、「国策」として原発を推進してきた「原子力国家」が、原発事故後も「事故隠し」を行ったり、放射能汚染地帯から人々が脱出することを阻むものとして依然として存続し続けていることを、私・たちは痛感していた。そのように、被災地からの文字通りの「エクソダス」(集団脱出)と、私たちを「生」の危機の中に放置する日本国家－社会からの「エクソダス」(離脱)とは不可分なこととしてあるという思いから、2011年3月27日の「東日本大震災：私・たちは〈なに〉をなすべきか」の集いを皮切りとして、「〈エクソダス2011〉・富山」をスタートさせた。

3月27日の「東日本大震災：私・たちは〈なに〉をなすべきか」の集いでは、最初に、この「驚天動地」の事態によって数え切れないほど多くの人々が命を失い、また、大きな苦しみの中にあることを悼む「祈り」のような思いと共に、この事態を日本国家－社会の「構成的『解体』」へと「反転」させることへの一步を富山から踏み出したいという決意を込めて、「避難都市を、今ここに」と題する一文を朗読した。当日は、「この富山でも『避難都市宣言』を行って、無条件かつ生活費の支給も含めた被災者の受け入れを市行政に求めることがあってもいいはずだ」といった意見など、この事態を私たちの側がどのように捉え、この富山からいかに〈前〉に踏み出すかをめぐって活発な論議が行われた。

また、3月27日の集いでは、アクティビストで「原子力都市」(以文社・2010年)の著者である矢部史郎さんと、「魂の労働」(青土社・2003年)等の著作を通じてこの国での本格的なネオリベ批判の嚆矢を切った渋谷望さんをゲストスピーカーとして迎えた。矢部史郎さんは、当時、愛知県の実家を原子力災害からの「避難場所」としていたが、そこに渋谷望さんも息子さんと一緒に一時避難していたということだった。そのように、二人ともまさに文字通り「エクソダス」の途上にいたわけだが、その集いの「Part II」では、矢部さんと渋谷さんのそれぞれにこの事態に関して考えていることを忌憚なく語ってもらった。とりわけ、矢部さんからは、放射能汚染地帯となった東京からの「エクソダス」とその東京での「ゼネスト」の2つを今後の運動の「両輪」とすべきだという意見や、放射能汚染からの避難者が単に保護の対象ではなく、避難先の住民と出会う中である種の「化学反応」が生じて何か面白いことが起きることを「夢想」しているといった発言等、私・たちの運動的な想像力を喚起する話

を聞くことができた。

それからほぼ 1 月後の 4 月 24 日、「3・11」後の危機的な状況を「日本国家を解任せよ！」といった「不可能なことの胸ぐらをつかむ」ような課題へあえて踏み出すことへの転機としたいという思いから、『『エクソダス 2011』・富山』企画Part1』として、「沖縄と東北が、そして、私・たちが一つに連なる声の蜂起を！日本国家－社会の『構成』的解体へ向け」と題する集いを行った。なお、その集いは、「3・11」の前から私たちが「富山平和運動センター」との共催の企画として準備を進めていた「沖縄セミナー・2011 in 富山」の「プレ企画」も兼ねて行ったものだった。

4 月 24 日の集いでは、タイトルにもあるように、地震／津波／放射能という三重の苦難の下にある太平洋岸東北地方の人々と、「軍事植民地」的状況によって「生」の根底までも侵害され続けてきた沖縄の人々、そして、「3・11」後の日本を生きる私たちの三者が一連なりに声を上げる「声の蜂起」をいかに成し遂げるかをめぐって論議が行なわれた。その中で、2000 年代初頭のアルゼンチンで社会保障・福祉の大幅な削減や「規制緩和」を強行した「構造調整」に対する反対闘争で唱えられた「皆、消えろ！一人も残るな」という有名なスローガンが紹介されたが、それは、まさに民衆が自分たちを「生の困難」に追いやる国家を「解任」しようとする意思を明確に示すものだ、と言えるだろう。

また、その集いでは、沖縄と東北、そして私たちがいかに一連なりに「声の蜂起」を成し遂げるかを考えあうための手がかりとして、南米・カリブ海のアンティール諸島（フランス語ではアンティュー）にあるフランスの「海外県」のマルティニク島から発せられた「高度必需品宣言」と、それに喚起されて沖縄在住の文化／映像批評家の仲里効（なかざと・いさお）さんが「思想」誌上（2010 年 9 月号）に寄せた「遠き声の流紋へ——ネシアと反乱の結界」の文章が紹介された。

2008 年 9 月の「リーマンショック」後、投資マネーが石油や穀物の先物市場に流れ込んだ結果、全世界的に食料品や燃料が高騰したが、それに対して、2009 年初頭に、アンティール諸島にあるフランスの「海外県」のグアダループ島やマルティニク島では、最低賃金の引き上げと生活必需品や燃料代の引き下げ等を求めるゼネストが行われた。2009 年 2 月、アンティューでのゼネストへの全面支持と、そこでの諸要求を「高度必需品」への要求に高めることに向けて、マルティニク島在住の作家のシャモアゾーやグリッサンといったカリブ海のフランス語圏を代表する知識人によって発表されたのが、「高度必需品宣言」だ。そこでは、衣食住や燃料といった生存のための基本的な必要物の確保と芸術・文化の創造や享受といった高次の要求とは分離されるべきではない、という理念に立って、『『最低必需品』を別の消費物の部類、すなわち、『高度必需』に属するような部類に移すこと』を訴えている。「宣言」では、そうした「高度必需品」の内に入るものとして、「人民と民衆を創るという、世界の大いなる舞台に尊厳をもって入る」ことを挙げると共に、「この運動は、我々自身による我々自身の権力へたどり着けるような変革と予測の政治力を切り開く、

そうしたビジョンの中で開花すべきである」と述べている。

仲里さんは、「遠き声の流紋へ」の文章の中で、「アンティューユは遠い、そして、近い」というフレーズを繰り返しながら、地理的には遠く離れたカリブ海のアンティューユと東シナ海にある沖縄との近しさや共通性を指摘している。その中に、『高度必需品』という考え方を通して詩的なるものへの自覚を呼びかける、その先に私は〈独立〉を新しくしていく、〈独立〉を発明していく構えを読み取る」という一節があるが、更にその文章の最後の方で、仲里さんは、『高度必需品』の詩的なるもののポストコロニアルの波紋に、亜熱帯の地で焼かれたユートピアを投擲する」と書いている。そのように、マルティニックの人々が第2次大戦後60年以上を経てなお継続される植民地主義的な社会のあり方を打破して、これまでの国民国家の枠組みでの〈独立〉とは違うあり方を「発明」しようとしている、と仲里さんは捉えている。そのような新たに〈独立〉を発明しようとする声の広がりにつながることに向けて、「亜熱帯の地で焼かれたユートピア」、つまり、日本「復帰」からほぼ40年後の現在もなお継続する沖縄の苦難の軌跡の中で育まれた沖縄の「自治／自律」や「自己決定権の樹立」への夢を、遠くアンティューユから到来する「流紋」の中に投げ込もう、と仲里さんは呼びかけている。

そのように、沖縄の人々が「〈独立〉を発明していく」ことや「自己決定権の樹立」という新しい地平に向かおうとする上で、「日米安保体制」の解任をどう進めるかということは避けて通れない。一方、沖縄の人々が「自己決定権の樹立」という新しい地平を切り拓こうとすることに対応するようなレベルで言えば、私たちヤマトの側は、東北の人々と共に地域の「自治／自律」の「再発明」や、「地方」自治体から「地域」自治体への転換が求められている。そうした「解任」と「再発明」の結合を日本国家それ自体の「解任」と一連なるのこととして創り出すことに向かうためにも、「3・11」後を生きる私たちにとっての「高度必需品宣言」をいかに構想するかが問われているのではないか。——4月24日の集いでは、参加者同士の論議を通じて、そのような大きな課題を改めて確かめることができたように思う。

その後、『〈エクソダス2011〉・富山』企画Part2として、5月8日、「再見！森崎東『生きてるうちが花なのよ死んだらそれまでよ党宣言』」と題して、森崎東監督の映画「生きてるうちが花なのよ死んだらそれまでよ党宣言」（1985年・キノシタ映画製作）の上映会を行った。また、5月29日には、『〈エクソダス2011〉・富山』企画Part3として、「災害／資本主義考——その1 災害資本主義考」と題する集いを行い、ナオミ・クラインの「災害資本主義」論と「ショック・ドクトリン」論を元に「3・11」後のこの国のあり方を読み解き、対抗のための手がかりを探ることを試みた。その集いが「〈エクソダス2011〉」の最後の企画となったが、「〈エクソダス2011〉」で論議されていた日本国家の「解任」やそこからの「エクソダス」（離脱）として「日本の『構成』的解体」を捉えなおすこと、また、それと不可分なこととして地域の「自治／自律」の「再発明」があるということが、その後の私・たちの取り組みの中での大きなテーマとなっていった。



## 2. 沖縄の「自己決定権の樹立」への動きとの連帯をヤマトから模索する

沖縄のいわゆる日本「復帰」から 40 年目に当たる 2012 年という大きな節目に際して、この間、「自己決定権の樹立」という新たな地平を拓きつつある沖縄の人々と、ヤマト(日本本土)の私たちがいかに連帯するかを模索することを通じて、共に「日本の『構成』的解体」へ向かうための道筋を探りたい。——そのことをテーマとして、「生・労働・運動ネット」と「富山平和運動センター」との共催企画として「沖縄セミナー・2011 in 富山」をスタートさせることに向けて、私・たちは、2010 年末から準備を進めてきた。また、「沖縄セミナー」を企画するに際して、日本「復帰」から 40 年目という節目に当たって、「この日本国家と日本を生きる私たちが、累代にわたって沖縄に対して行ってきた存在の『根底』を破壊するふるまいをいかにとにかえすことができるのか？」という〈問い〉をきちんと自らのものにしなければならない、という思いもあった。

「沖縄セミナー」の連続学習会の話し手の人たちへの依頼や日程調整を終え、ちょうどそのプログラムをほぼ確定しようとしていた最中の 2011 年 3 月、私・たちは、東日本大震災／原子力災害の同時発生という事態を迎えた。「3・11」後、この国の政府が「がんばろう、日本！」といった翼賛的なスローガンの中で原子力災害の実情を隠蔽し、高レベルの放射能汚染の中に人々を「囲い込む」のを見ながら、沖縄の人々が苦難の軌跡の中で生み出してきた一群の言葉や「反国家」の思想が、ヤマトの私たちにとってもかつてない大きな意味をもつようになっていくことを感じていた。一時は、「沖縄セミナー」の企画を進めること自体が困難だった時期もあったが、そのように、日本国家からの「離脱」や自立／自律ということは、沖縄の人たちだけではなく、まさに「3・11」後を生きる私たちにとっても切実な課題になっているという思いで、再びその準備を再開し、当初の予定通りのプログラムを実施することができた。以下、そこで論議のアウトラインを紹介したい。

### □ 大野光明「72年日本『復帰』

#### ——本土(ヤマト)からの『応答』の軌跡」(2011・6・18)での論議から

先程も述べたように、2011 年 4 月 24 日に「沖縄セミナー」の「プレ企画」として、「沖縄と東北が、そして、私・たちが一つに連なる声の蜂起を！」の集いを行ったが、それからおよそ 2 ヶ月後の 6 月 28 日、日本本土での沖縄をめぐる社会運動の思想・軌跡を主要なテーマとする若手の研究者の大野光明さんを話し手に迎えて、「72 年日本『復帰』——本土(ヤマト)からの『応答』の軌跡」と題する集いを行った。

その中で、沖縄をめぐる論議ではあまり取り上げられることのない、ヤマトの側から沖縄での運動をどのように受け止め、それに「応答」しようとしてきたかをめぐる軌跡を、沖縄の「祖国復帰」運動に対するヤマトの「革新」知識人たちの反応や、60 年代末から 70 年代初頭にかけての「ベトナム反戦」運動の中でのヤマトと沖縄との関係を問う試みを中心に、改めてたどりなおすことを行った。

第 2 次大戦後間もない時期の沖縄での米軍による直接統治下の過酷な状況の中で、早くも 50 年代初頭には日本「復帰」を求める動きが登場している。その後、1960 年には、日本「復帰」を実現する上での大きな推進力を発揮した、「沖縄祖国復帰協議会」が結成されている。一方、全国的に高揚した 60 年安保闘争の中でも、沖縄について言及されることはほとんどなかったことにも現れているように、50 年代から 60 年代前半までの日本本土の社会運動では、沖縄は本土の人々にとって完全に忘却された存在になっていた。

大野さんによれば、日本「復帰」運動を推進した沖縄の人たちには、「日本国民」になることで、米軍統治から解放されて、日本の法の保護の下で人間としての尊厳や、平和な暮らしが保障されるという切実な思いがあったとのことだった。しかし、60年代の本土の「リベラル」な文化人の多くは、もっぱら「主権回復」や「民族」という概念で本土と沖縄を結びつけて、アメリカに蹂躪されているもの同士という被害者意識に基づいて沖縄との連帯を語ることに終始していた。結局、そうした心情的なナショナリズムに囚われることで、沖縄とヤマトとの関係性が、「日本国民」という狭い枠組みの中に押し込められてしまったことは否めない。

そのように、同じ「日本国民」だという語り口によって、戦前・戦後を貫いて、ヤマトが沖縄に対してどのような暴力や抑圧を行使してきたのかという「問い」が、忘却される。それは、同時に、日本が沖縄の外に広がるアジアの国々に対して行使してきた植民地主義的な暴力を忘れ去ることもつながっているという意味で、いわば「二重の忘却」を生み出すことになる。それは決して、過去のことではなく、今でも私たちに問われ続けていることであるということ、大野さんは強く訴えていた。

そうした同じ「日本国民」だという心情的ナショナリズムを打破して、日米安保体制に対して共に闘う者同士としてヤマトと沖縄との新たな関係を築こうとする動きが、ベトナム反戦運動の中から生み出されていた。60 年代末から 70 年代初頭にかけての日本のベトナム反戦運動を象徴するものとして、「ベ平連」(ベトナムに平和を！市民連合)があるが、それは、労働者や学生による社会運動というのではない、「普通の市民」が参加できるような社会運動として日本で初めて成立した運動だった。その中で自らの加害者性への認識を深めることを通じて、日本のベトナム反戦運動が沖縄に出会っていく。つまり、ヤマトが沖縄に米軍基地を押しつけているという加害者性が、日本がベトナムに爆弾を落とす側にいるという加害者性にそのまま直結しているということが、沖縄を媒介項にすることで見えてくる。しかし、同時に、そうした戦争体制の被害者である沖縄と、沖縄に対する加害者であるヤマトの私たちの両者が、日米両政府の被害者であり、ベトナムの民衆にとって加害者である。そうであれば、沖縄とベトナムとヤマトの私たちとの連帯がどのようにありうるのか、という模索が進められていった。それは、具体的には、日米安保体制の破棄を目指すという運動であり、また、沖縄の米軍基地の撤去を求めるという運動でもあった。

1969 年 11 月の「ニクソン・佐藤会談」後に出された「日米共同声明」によって、72 年の沖縄「返還」が日米で合意されたが、それと共に、沖縄の米軍基地が「返還」後もそのまま残されることや、自衛隊の沖縄への進駐が決定された。また、沖縄がベトナム戦争と直結していることを象徴するのが、沖縄の嘉手納基地に常駐する B 52 戦略爆撃機だが、それが沖縄にやって来たのが 68 年の 2 月だ。しかも、当時、嘉手納基地の弾薬庫には核兵器が貯蔵されていると言われていたが、68 年の 11 月と 12 月に立て続けに B52 が基地

内で墜落事故を起こした。また、当時、アメリカの原子力潜水艦が沖縄に寄港することで、深刻な海洋汚染を引き起こしたが、そうした状況に対する沖縄の人々の怒りが炸裂して、69年2月に沖縄全島でゼネストが計画された。しかし、アメリカ政府や日本政府から様々な圧力がかかり、結局、ゼネストは回避されてしまった。

そのような状況の中で、沖縄からヤマトへの強烈な告発や糾弾の言葉が登場するようになったが、そうした沖縄からの「声」によって、本土の運動の側も自らのあり方を問いなおさざるを得なくなる。そうした問いなおしの中から、「沖縄を返せ！」ではなく、「沖縄を沖縄の人々の手に！」といった沖縄の自治／自立をヤマトの側が支援するというスローガンが生み出されている。しかし、そのように、沖縄とヤマトとの関係をめぐる思考が「加害者と被害者」という構図に縮減されてしまうことで、ベトナム反戦運動の中での沖縄とヤマトとの連帯の模索が「隘路」に入り込んでしまった。率直に言えば、それが、72年の沖縄「返還」に至るまでの日本の運動の限界としてあったということ、大野さんは指摘していた。

しかし、その一方で、非常にマイナーなものではあれ、そうした日本の運動の限界を打破するような運動が間違いなく存在していたが、その1つが、基地のフェンスを越えた反戦運動だ。つまり、当時、米軍基地の中のアメリカ軍の兵士たちと共にベトナム反戦運動に取り組むという、希有な運動が存在していたということだ。

71年頃の沖縄のコザでの反戦・反軍活動のミーティングの様子を撮影した貴重な写真を大野さんは話の中で紹介していたが、そこに参加している米兵は全員が黒人兵で、そこに何人もの沖縄の若者たちが加わっている。当時のアメリカには徴兵制度があり、否が応でも戦場に行かされるという状況の中で、とりわけ、黒人や移民の若者たちが最も過酷な戦場に送られるということがあった。そうしたアメリカ国家の内部での黒人差別の構造と、日本での沖縄人に対する差別構造は共通するものがあるという認識から、差別・抑圧される者同士として、戦争を止めさせるために共に手を携えて闘うということがどのようにありうるか、ということが真剣に模索されていた。

そうした基地のフェンスを越えた反戦運動は、沖縄だけではなく、本土の運動でも取り組まれていた。埼玉県と東京都の境界上にあった米軍の朝霞キャンプには、ベトナムで負傷した兵士を静養させて、再び戦場に送り出すための米軍の医療施設があった。当時、「大泉市民の会」というベ平連系の反戦グループは、朝霞キャンプの撤去を求めると共に、基地の中からの反戦運動への参加を、直接、米兵に向けてキャンプのフェンス越しに呼びかけることを行っていた。そうした呼びかけに対して、米兵が怒りを込めてフェンス越しに石を投げってくるという形での「応答」もあったが、ベトナムでの戦況の悪化につれて、石を投げて応酬するということが減り、フェンス越しの反戦アピールに対して、ピースサインを向けるといった好意的な反応を示すようになったということだった。

そうした基地のフェンスを越えた反戦運動と併せて、大野さんは、竹中労やNDUによる「文化闘争」についても詳しく触れていた。竹中労は、「琉球共和国」という興味深い沖縄論を沖縄の日本「復帰」の年に書いているが、その本の中で、コザの街の娼婦といった沖縄の下層民との出会い・交流について思いを込めて語っている。そのように、彼は、沖縄の運動からも排除されるか、忘却されている沖縄の下層労働者の視点から、日本「復帰」運動の欺瞞性を激しく批判している。

そうした彼の主張とNDUの活動とは重なるものがある。NDUというのは、「日本ドキュメ

ンタリストユニオン」の略称で、ドキュメンタリー映像を作る製作者集団だが、実は、彼らは、早稲田大学の学園闘争を闘って、大学を中退した人たちだった。NDU は、第 2 次大戦後、大日本帝国がアジアから撤退して縮小していくという過程を逆にたどりなおして、そこに痕跡として残っている旧日本帝国の暴力を映像で記録している。また、NDU の製作した「沖縄エロス外伝 モトシンカカランヌー」というドキュメンタリー映画では、娼婦や、ヤクザ、台湾人労働者、集団就職の若者、混血児、黒人兵といった、沖縄の中の「下層」やアウトローと呼ばれるような人々を取り上げている。そこに映された米兵相手の沖縄人娼婦といった、沖縄の日本「復帰」運動さえもが目をそむけているような存在と沖縄社会との関係を緻密に読み解くことで、日本「復帰」へと突き進むもうとする沖縄社会の中の差別や抑圧、暴力を可視化するという作業を行っている。

そのように、竹中労や NDU は、アジア各地の被差別民や「窮民」と、沖縄社会の中に存在する多民族的な下層労働者を「横」につなぐことを目指すことで、日本「復帰」に伴うナショナルな統合化や国民的な一体感を打ち破るような「文化闘争」を敢行したことが、大野さんの話の中で語られていた。

## □ 仲里効「沖縄における『自立／自己決定権』論 ——その系譜と展望」(2011・9・25)での論議から

9月25日、「プレ企画」の中で紹介された「遠き声の流紋へ」の著者であり、沖縄在住の文化／映像批評家の仲里効さん話し手に迎えて、「沖縄における『自立／自己決定権』論——その系譜と展望」と題する集いを行った。

当日は、東京での大学時代に沖縄出身の若者たちが日本本土で結成した「沖縄青年同盟」の一員として活動していたといった仲里さんの個人史も織り交ぜながら、沖縄での「自立／自己決定権」論がどのように展開されていったのかをめぐって、話が進められた。

アメリカの占領下から脱して経済成長を遂げていった日本本土とは異なり、アメリカの軍事占領下に置かれ続けるという「戦後」を経験した沖縄では、アメリカの軍事的支配に対する大衆運動は、最終的に「祖国復帰」を求める運動という形を取るようになった。50年代の沖縄の民衆の米軍支配への抵抗は、日本「復帰」運動として組織されていたが、1960年には、運動団体・組織を横断する「統一戦線」として「沖縄県祖国復帰協議会」が結成され、日本「復帰」運動はより大衆的なレベルで進められていった。

その際に気を付けて見ていかなければならないのは、沖縄での日本「復帰」運動の中に、戦前の皇民化教育によって植え付けられた「同化主義」的な心情と論理が流れ込んでいたことだ。戦前の沖縄のエリート層は、日本国家による植民地主義的な同化政策を「内面化」して自らそれにのめりこんでいったが、沖縄教職員会の会長で戦前の台湾の師範学校の教員だった屋良朝苗や、沖縄師範学校の出身で戦前、小学校の教員をしていた祖国復帰協議会会長の喜屋武(きやん)真栄など、「皇民化」政策を内面化した人たちが、沖縄の戦後の日本「復帰」運動のリーダーとなっていた。

そのように、アメリカの軍事支配体制下での沖縄民衆の抵抗が、祖国としての日本を「想像」することによって生み出されたという意味で、アメリカへの強制的な従属と「祖国」日本

への自発的な従属という、いわば「二重化」された植民地主義の構図がそこに存在していたことを、仲里さんは指摘していた。

歴史の教科書などでは、1972年5月15日に沖縄が日本に「復帰」とされている。しかし、「復帰」というのは元々あった場所に帰るという意味だとすれば、「琉球処分」によって日本国家に「併合」された沖縄の施政権の日本への「返還」を、「復帰」と呼ぶこと自体が、根底から問いなおされるべきではないか。現に、沖縄の日本「復帰」に対して、当時の沖縄では、明治政府による「琉球処分」や、サンフランシスコ講和条約によるアメリカの沖縄に対する「施政権」の確認と並ぶ、「第3の琉球処分」だ、という言い方がなされていた。

そうした意味では、沖縄の日本「復帰」というのは、むしろ、戦後の日本国家による沖縄の新たな「併合」であり、沖縄の軍事植民地的な状況の根本的な部分には手をつけずに、アメリカによる単独支配から日米共同管理体制による沖縄支配へと移行したと捉えなければならぬことを、仲里さんは改めて強調していた。

そうした日本国家による沖縄「返還」をめぐる動きが顕著になっていく時期の沖縄では、それまでの同化主義的な日本「復帰」運動を問いなおすような運動や思想が新しく登場してきた。そうした動きを象徴するのが、68年4月末の全軍労による「10割年休闘争」や、それに続いて行われた一連のストライキだが、それは、米軍基地での労働によって生計を営んでいる人たちが、基地のフェンスの内側から、自分たちの労働の根拠である米軍基地の存在自体を問うような闘争を行ったという画期的なものだった。

その前の大野光明さんの話にもあったように、沖縄では、1968年にB52が嘉手納基地内で墜落・炎上した事件を機に、毒ガス兵器と併せてB52の撤去を求める声が大きく高まり、翌69年に「二・四ゼネスト」が予定されるというところにまで運動が大きく高まっていった。しかし、それに対して、日本政府側からの妨害だけではなく、1968年11月に初めての公選制による主席選出選挙で琉球政府主席となった屋良朝苗「革新」琉球政府や、本土の総評までもが介入して、「二・四ゼネスト」の実施は阻止された。結局、そうした「革新」勢力側の沖縄の運動への介入もあり、沖縄での日本本土との「一体化」路線は、更に強固に進められていった。しかし、一方では、そうした日本本土との「一体化」路線を問いなおす思想的な実践が、当時の沖縄で生み出されていた。

1970年に、民俗学者の谷川健一の編集による「叢書『わが沖縄』」(木耳社)の第6巻として、「沖縄の思想」が出版されたが、とりわけ、そこに収録された、新川明「非国民の思想と論理」、川満信一「沖縄にとって天皇制とは何か」、岡本恵徳「水平軸の思想」という3つの論文は、「反復帰」思想の内実を全面的に展開するものだった。それらの論文は、「琉球処分」以後の沖縄の近代そのものまでさかのぼって、それとの連続性において沖縄の「戦後」を捉えなおそうとするものであったという意味で、非常に画期的なものだった。「反復帰論者」と呼ばれる新川明や、川満信一、岡本恵徳といった人たちがそれぞれ何に焦点を当てて論議を展開しているか、ということでは必ずしも同じではない。しかし、天皇制や沖縄での「集団自決」といった問題を初めて沖縄からの内在的な視点で捉えて、国家の論理と「相似形」をなすような近代以降の沖縄人の思考のあり方をいかに打破するか、を模索したという点で、「反復帰」思想は共有化された問題意識に基づく思想的な実践であったということを、仲里さんは改めて強調していた。

69年の「日米共同声明」以降の沖縄と日本本土との「一体化路線」の一環として、沖縄

では、日本への施政権「返還」前の 1970 年 11 月に、「国政参加選挙」が行われた。川満信一といった「反復帰論」の論者や「反復帰論」を指示する若者たちは、「国政参加選挙」は、沖縄から国会議員を選出することで沖縄「返還」をめぐる国会論議に沖縄の人々も参加して合意したという「筋書き」をつくりだそうとするものだとして、それに強く反対し、「国政参加選挙」拒否・ボイコット闘争が展開された。それは「反復帰」思想の1つの具体的な実践の形であった、と言ってもいいだろう。

また、「反復帰」思想と同様に、「祖国日本」幻想や〈復帰〉思想を打破しようとした思想的・文化的な実践として仲里さんが言及していたのが、日本「復帰」から 4 年後の 1976 年に書かれた知念正真の戯曲「人類館」が沖縄の演劇集団「創造」によって上演されたことだ。「人類館」という戯曲は、1903 年に大阪の天王寺で開催された内国勸業博覧館で、アイヌ人や、台湾先住民、朝鮮人などと一緒に、沖縄人が見せ物にされた「人類館事件」を1つの素材として書かれたものだ。そこでは、日本語の使用や天皇崇拜を強制する軍服姿の「調教師」と、「陳列」された琉装の沖縄人の男女という 3 人が主な登場人物となっている。その中で、「人類館事件」を連想させる場面から、取調室、沖縄戦の戦場へと場面が目まぐるしく転換すると共に、3 人の登場人物の役柄も次々と変わることによって、沖縄での植民地主義的な差別・暴力の構造や、沖縄戦での「集団自決」、ベトナム戦争、日本「復帰」をシンボリックに浮かび上がらせるという、一種のトラジ・コメディ（悲喜劇）となっている。

〈1972 年 5 月 15 日〉の沖縄「返還」後にも継続される沖縄の「軍事植民地」的な状況に否応なく直面する中で、70 年代末から日本「復帰」後の現状を問いなおそうとする動きが沖縄で改めて登場するようになったが、そうした動きの中で、自治労沖縄県本部による「沖縄特別県構想」（1981 年）や、イヴァン・イリイチの研究者としても知られている玉野井芳郎による「沖縄自治憲章」（1981 年）が発表されている。

そうした「復帰」後の沖縄の自治・自立をめぐる構想の中で、沖縄をいかに自立／自律的な「社会空間」として再構成するか、という政治思想の水準にまで至ったという意味で、仲里さんは、1981 年の「新沖縄文学・第 48 号」に掲載された川満信一の「琉球共和社会憲法 C 私（試）案」と、仲宗根勇の「琉球共和国憲法 F 私（試）案」に、特に大きな評価を与えている。とりわけ、前者は、「国家の廃絶」という理念から、「琉球『共和国』憲法」ではなく「琉球共和『社会』憲法」となっている。そこでは来るべき沖縄社会の構成原理として、「軍隊、警察、固定的な国家的管理機関、官僚体制、司法機関など権力を集中する組織体制」の廃絶という理念が謳われている。

そうした「国家の廃絶」の理念を沖縄社会の構成原理として掲げる川満の「琉球共和社会憲法 C 私（試）案」は、その後の沖縄の自治／自立への機運の高まりの度に参照されてきたということだった。

そのような「反復帰論」を中心に沖縄の自立／自律をめぐる思想的系譜を探ることと併せて、当日の仲里さんの話では、1995 年の「米軍少女暴行事件」を契機とする反基地闘争の高揚から、「自己決定権の樹立」へと向かう動きの思想的な背景となった 2000 年代の沖縄での 2 つのシンポジウムの開催までの流れを、大きくたどり直すことが行われた。

沖縄中部の金武町（きんちょう）に米軍基地のキャンプ・ハンセンがあるが、1995 年 9 月に、そこで海兵隊員 2 名と海軍兵士 1 名の 3 人のアメリカ軍兵士による「米兵少女暴行事件」が発生した。この事件の衝撃は沖縄社会を大きく揺るがすものであり、それを契機と

して沖縄駐留米軍基地の撤去・解体を求める動きが大きく高まっていった。そうした沖縄での反基地運動の高揚を受けて、当時の大田昌秀沖縄知事は「代理署名」拒否を行うと共に、96年9月に、日米地位協定の見直しと沖縄の米軍基地の縮小の是非を問う県民投票を日本で初めて実施した。しかし、その後、大田知事の3期目の任期への知事選挙で、日本政府からの干渉や妨害工作によって保守系の稲嶺恵一が当選したことで、大田知事が掲げた沖縄の米軍基地の撤去・解体という目標は、その途上で挫折を余儀なくされることとなった。

2000年7月に、「九州・沖縄サミット」が開催されたが、そこには明らかに、沖縄へのサミットの誘致によって普天間基地の移設問題をめぐる当時の沖縄の人々の抵抗を「沈静化」させる、という政治的な思惑があった。そのような「新保守主義」と呼ばれるような動きが「九州・沖縄サミット」前後の時期の沖縄で台頭するようになり、「米軍少女暴行事件」以降、大きく高まった沖縄での反基地の動きは、後退したかに見えるような時期が続いた。

それから数年後の2007年の高校の歴史教科書の検定で、沖縄戦での「集団自決」に対する日本軍の関与・強制があった、とする記述が削減・修正を求められたことから、沖縄の民衆運動は、再び大きな高揚を迎えるようになった。「集団自決」記述の削減・修正に反対する同年の沖縄での「9・26県民大会」では11万人もの人々が参加したが、それは、まさに、沖縄戦を直接には体験していない戦後世代も含めて闘われた「記憶をめぐる闘い」とでも言うべきものであった。

そのような「記憶をめぐる闘い」と並んで、この頃から、琉球弧の「自己決定権」の樹立を求める動きの「胎動」が始まっていた。そうした動きの1つが、2009年に企画された「薩摩の琉球侵略400年・琉球処分130年を問うシンポジウム」だ。その際に、沖縄だけではなく、奄美諸島の徳之島や沖永良部島でもシンポジウムを開催するなど、琉球弧を横断しながら、そうした歴史の「再審」をめぐる論議が活発に進められた。

2008年5月に那覇市で開催された「シンポジウム『来るべき自己決定権のために—沖縄・憲法・アジア』」では、仲里さん自身がそのシンポジウムの実行委員の1人として、そこでのパネラーを務めたということだった。そのシンポジウムでは、「反復帰」思想や、川満信一と仲宗根勇による「憲法私(試)案」を、東アジアを横断する「構成的」権力の形成を展望し、「ポスト冷戦」時代の東アジアの民衆同士の新たな結合軸を生み出すための「思想的資源」としていかに〈活用〉するか、ということが、大きなテーマとなっていた。

以上のような沖縄での「自立／自己決定権」論が具体的にどのように展開されていったのかをめぐる話の最後に、仲里さんは、「3・11」後、〈フクシマ〉の「影」で進行する沖縄の「軍事要塞」化について大きな危機感を抱いていることを語っていた。

東日本大震災と福島原発事故の被災者の捜索・救援のために、アメリカ軍は、自衛隊との合同作戦として「トモダチ作戦」を展開したが、それは、災害救助というイメージを「動員」しながら、沖縄に「凝縮」されている日米双方による軍事体制を更に強化しようとするものでしかない、ということを仲里さんは訴えていた。そのことは、同時に、尖閣諸島周辺の中・台湾の「領土ナショナリズム」の台頭をにらみながら、普天間基地の辺野古「移設」や、「島嶼防衛計画」に基づく南西諸島での自衛隊の配備強化を一挙に進めようとする動きとして沖縄で具体的に現れている、ということだった。尖閣諸島にも近い与那国島に陸上自衛隊を駐屯させるという政府の方針が出されている他、「島嶼防衛計画」の一環として、宮

古島市に属する下地島空港に、アジア規模の「災害時緊急支援センター」を建設しようとする計画もある。併せて、那覇市にある航空自衛隊基地で、F-15 戦闘機を現行の 20 機から 30 機へと増強しようとする案が出ている。仲里さんによれば、そうした沖縄での軍事再編の動きは、ただ単にアメリカ政府の意向を受けたものというよりは、むしろ、日米双方の国家的レベルでの軍事戦略に基づいて推進されている、と捉えるべきだということだった。

仲里さんとしては、そのように沖縄を日米双方にとっての「軍事要塞」にしようとする動きに対して拒否を突きつける「声」を沖縄の中から上げていきたい、ということだった。そのためにも、この間、沖縄で拓かれつつある「自己決定権」の樹立という地平の中で、「反復帰」思想や、川満信一の「琉球共和社会憲法 C 私(試)案」といった沖縄の「思想的」資源を、新たな「構成」的権力を生み出すための「糧」としていかに読み解くことができるかが問われている、ということだった。

『構成』的権力」というのは、イタリアの活動家・政治思想家のアントニオ・ネグリによる概念で、彼は、それをタイトルとする本も書いているが、それは、旧来の社会体制のあり方を根底から覆して、新しい政治的・社会的な共同性を「構成」しようとする民衆の力能を指す言葉だ。川満信一の「琉球共和社会憲法 C 私(試)案」は、「琉球共和社会の全人民は、ここに『完全自治社会』建設の礎を定めることを深くよろこび、直接署名をもって『琉球共和社会憲法』を制定し、公布する」と、高らかに宣言している。彼の「憲法私(試)案」は、あくまでも沖縄固有の歴史的・政治的文脈に根ざしながら、徹底した「非暴力」と、「慈悲」、「民衆自治」の精神に基づいて、そうした『構成』的権力のあり方を構想しようとするものだ。同時に、同「憲法私(試)案」は、天皇制を通じて「国民統合」を図りながら、侵略と併合によって成立してきた近代以降の日本国家・社会の軌跡を沖縄から「裏返す」ことを通じて、新たな「社会空間」の創造を展望しようとするものだ、と捉えなおしてみたい。

それと併せて、かつて琉球弧の海が異集団間の自由な交流・接触の舞台であったという歴史的な経験も想起しながら、いかに「沖縄に内在する東アジア」を再発見し、それを語る「文体」を新しく創りだすのかということも含むものとして、沖縄での「自己決定権」の樹立を求める動きを今後、更にどのように豊かに展開するのか。そうした模索の中に、福島原発事故の「影」で進行する沖縄の「軍事要塞」化に対抗するための、一つの手がかりがあるのではないか、と仲里さんは今、改めて考えているということだった。

## □ 川音勉「沖縄の『自己決定権』との連帯を模索する」(2012・1・15)での論議から

翌 2012 年 1 月 15 日、「沖縄セミナー」の連続学習会の締めくくりとして、「沖縄文化講座」といったこの間の沖縄での動きをめぐる論議の場を主宰してきた川音勉さんを話し手に迎えて、「沖縄の『自己決定権』との連帯を模索する」と題する集いを行った。

「3・11」後、川音さんは、相次いで起きた原発の爆発の映像を、「やっぱり、こうなったか」という思いで見ながら、しばらくの間、家族と「これが本当に『最後の晩餐』だね」と言いながら、酒ばかり飲んでいるような気力が湧かない状態が



続いていたようだ。しかし、「東電前アクション」や沖縄に連帯する「新宿ど真ん中デモ」といった直接行動に取り組んでいる若い人たちの動きにも励まされて、この間、何とか自分のペースを取り戻してきているとのことだった。

そういったエピソードを話の糸口として、当日は、この間の沖縄での運動との関わりや、その中で考えてきたことを中心に川音さんに話してもらった。

当日の話の資料の2011年6月25日付の「沖縄タイムス」紙の社説では、「福島第1原発事故の発生以来、原発と米軍基地との類似性がさまざまな点から指摘される」と言う一方で、両者の決定的な違いとして、「原発稼働を目指す政府は、立地自治体の了解を得ようとしている」のに対して、「辺野古移設は一方的な『伝達』を繰り返すだけだ」ということを指摘している。それはまさに事実だと認めざるを得ないし、私たちとしては、その違いは何によるものなのかを考えないわけにはいかない。

「沖縄タイムス」紙の「対談シリーズ・国策を問うー沖縄と福島の40年」の「対談シリーズ」の第1回では、「フクシマ論」（青土社）の著者として注目されている若手の社会学者の開沼博へのインタビューを、2011年12月19日と20日に連続して掲載している。「沖縄タイムス」のインタビュー記事で、彼は、郷土の発展を願って福島原発を受け入れた地元の多数の人たちの思いを反原発運動の側は断罪すべきではない、と言っている。そうした視点は、確かに大事なことではあるが、ただ、彼の場合にしても、日本国家という政治的な枠組みの中で、沖縄と福島が「地域」として同じように存在しているわけではない、ということに対してあまり自覚的ではないように思う。

「フクシマ論」では、福島の歴史に深く分け入って、戦後、福島の貧しい地域の住民が地元の発展の「夢」を託して原発を誘致するに至るまでの軌跡が克明に描かれている。ただ、当然のことではあるが、運動をいかに進めるか、ということまで含めて彼が提起しているわけではない。開沼博が「フクシマ論」の中で展開している論議にもう少し付け加えて言えば、日本の近代・現代史に照らして福島のポジションを考えることが必要なのではないか。福島を含めた東北地方は、戦前の日本国家が経済的・軍事的に成長していくための食料や地下資源（金属、石炭）、工業地帯に供給される労働力、また、兵隊となる人材といった「資源」を供給する「国内植民地」的な地域であったことがよく指摘されている。そうした東北からの「資源」はどんな目的で利用されたかと言えば、それは日本ーアジアの近代史に照らして見れば、日本がアジア諸国に対して帝国主義的な侵略を行うためだったということが、明らかになる。

そのように、日本近代国家形成期に併呑されたアイヌや琉球、日本帝国主義に侵略・占領された、朝鮮、中国の民衆それぞれの〈視線〉から、東北の人たちが何のために収奪・利用されたのかを見ることで、戦後の福島と中央の政府との関係だけでは分からない部分が、改めて構造的に浮かび上がってくるのではないか。そういったことまで含めて考えなければ、日本国家にとっての沖縄と福島のポジションの違いをきちんと捉えきれないのではないかと川音さんは参加者に問いかけていた。

また、当日の川音さんの話の中では、仲里効さんも言及していた2008年5月の那覇市

・沖縄県立美術館での「シンポジウム『マーカラワジーガ: 来るべき自己決定権のために 沖縄・憲法・アジア』」について、詳しく触れられていた(「マーカラワジーガ」は沖縄の言葉で「どこから怒りをぶつけてやろうか」という意味)。そのシンポジウムには、仲里さんをはじめとして、新聞社やテレビ局の人たちを含めた広範な沖縄の言論人が企画のために尽力した他、川満信一自身もパネリストとして参加して、彼の「琉球共和社会憲法 C 私(試)案」の思想的な意義を改めて確かめあうということが行われた。川音さんによれば、そのように、沖縄の日本「復帰」前後に展開された「反復帰」思想を経て生み出された「琉球共和社会憲法」を沖縄の〈思想資源〉として捉えなおすということが、この間の沖縄での「自立／自己決定権論」をめぐる論議の1つのベースとなっているとのことだった。そのシンポジウムでは、在日朝鮮人で植民地時代の朝鮮文学の研究者の崔真碩(ちえ・じんそく)さんや、中国の日本政治思想研究家の孫歌(スン・グー)さんをパネリストに迎えたが、そのことによって沖縄の状況を東アジアの視点から捉えなおす、といった論議の広がりが生まれていたということだった。

そのシンポジウムでは川音さん自身も「裏方」として関わっていたことが、川音さんの話の中で紹介されていたが、その際に、川音さんは、知識人だけではなく、沖縄の運動の現場にいる人たちの発言を入れることに尽力したということだった。そうした努力の結果、そのシンポジウムでは、普天間基地「県内移設」攻撃がかけられている辺野古や、ヘリパッド建設予定地の高江の現地の人たちからのアピールが行われ、会場で支援のカンパも寄せられた。

鳩山元首相の普天間基地「県外」移設をめぐるアメリカとの外交交渉の顛末(てんまつ)からも明らかなように、いわゆる「日米同盟」というのは、単なる政策合意のレベルに止まるものではなく、強固な物質的・経済的な基盤の上に成立している。そうした「基盤」を解体していくためにも、私たちが世界のあり方をいかに構想・想像するかをめぐる「思想戦」を闘うことが必要だ、ということ川音さんは強調していた。

最近の沖縄では「沖縄ナショナリズム」的な傾向が強まっているが、川満信一が「琉球共和社会憲法 C 私(試)案」で訴えていることの核心には、沖縄にヤマトと同じような「ミニ国家」をつくったとしてそれで何の意味があるかということがあるはずだし、むしろ、沖縄社会をいかに「開く」ということが、そこで提起されているのではないか。川音さんとしては、そのように考えることで、その「問い」をヤマトの私たち自身が日本社会をいかに開くかということとして受けとめたいし、そうした論議をぜひ、沖縄の運動現場や、ヤマトの沖縄連帯運動、そして「フクシマ」を初めとするこの国の政治・社会の変革を目指す運動の中で行っていきたい、ということだった。

また、ヤマトの自分たちが沖縄や東アジアとの新たな関係をどう創りだすかということと併せて、自分としては、環太平洋圏での海の交通・交流を考えたいという思いを、川音さんは語っていた。普天間基地の移転先の候補地としてしばしばグアム島の名前が上がるが、「日米同盟」に象徴される現在の日本とアメリカとの関係をどう変えるか、という問題にしても、環太平洋の人たちと私たちとの民衆同士の交通・交流はいかに可能か、といった視点から考えることができるだろう。

単に「大風呂敷」を広げればよいということではないが、そうしたグローバルな視野で考えていかなければ、この世界の中で日本や沖縄だけが単独で変わるということはありません。

い。はるか遠い先のことではあるだろうが、そうした世界大の民衆間の連帯で、この日本の「帝国主義」的なあり方をいかに解体するか、を展望していきたい。同時に、そうした大きな展望の中でこそ、いかに私たちが福島や沖縄の人々とつながるか、を考えることができるように思う。川音さんは、話の最後でそのように大きな展望を語っていた。

この間、沖縄での動きは、すでに反基地運動の枠を超えて、「沖縄の未来を決めるのはアメリカや日本の政府ではなく、沖縄に住む我々自身だ！」という「自己決定権の樹立」へ向かおうとする段階に入っている。「沖縄セミナー」の連続学習会での論議を通じて、そうした動きが登場するに至るまでの沖縄の民衆運動の流れや、その流れの中で生み出されてきた思想・言説、とりわけ、「反復帰論」や川満信一の「琉球共和社会憲法 C 私(試)案」が沖縄の運動にとってもつ大きな意義を改めて知ることができた。

「反復帰論」と川満信一の「琉球共和社会憲法 C 私(試)案」は、沖縄の民衆運動の高まりの度に絶えず参照されてきたそうだが、とりわけ、1995年の「米兵少女暴行事件」後の反基地運動の高揚の中で、沖縄の「戦後」や日本「復帰」後の歳月を問いなおすための手がかりとして当時の若い世代が「反復帰」思想を再発見したことが、仲里さんの話の中で紹介されていた。日本「復帰」前後の時期を中心に展開された「反復帰論」は、「祖国日本」幻想を打破し、沖縄人自らの日本本土への「同化主義」的なのめりこみを問いなおしながら、沖縄の自立／自律を目指すものとしてあった。この間、そうした「反復帰」思想が沖縄の人々の心に深く根を下ろして、思想的営為であることを超えた具体的な運動として展開されるようになっていくことを、「沖縄セミナー」では改めて確かめることができたように感じている。

また、「プレ企画」で紹介された「遠き声の流紋へ」の中で、仲里さんは、沖縄と地理的には遙か遠くのアンティエユとの同時代性や「共振性」を指摘していたが、「沖縄セミナー」の連続学習会では、東アジアと沖縄との同時代性や、東アジアの中での沖縄のポジションをどう捉えるかということが、そこでの論議を貫ぬく一つの大きなテーマになっていたように思う。

仲里さんを富山に迎えたのは、ちょうど仲里さんが発言者として招待されたドイツの版画家ケーテ・コルビッツのシンポジウムが開催された中国・北京から戻ったばかりの時期だったが、その時の中国訪問で東アジア的な視点の中に沖縄が登場してきていることを改めて強く実感した、ということだった。2008年5月の「シンポジウム『来るべき自己決定権のために』」の中で、東アジアを横断する「構成的」権力や「ポスト冷戦」時代の東アジアの民衆同士の新たな結合軸の形成ということが大きなテーマとなっていたということだったが、「東アジアの中の沖縄」という視点は、誰よりも沖縄の人々自身によって強く意識されていると言ってもいいだろう。川音さんの話では、そのシンポジウムの終了後も、川満信一の「琉球共和社会憲法」を「東アジア越境憲法案」の構想へとふくらませていこうという論議が継続的に行われてたということだった。その背景には、川満信一が、冷戦体制の初期に住民の大量虐殺が行われた韓国の済州島の歴史に沖縄と共通する部分を見だし、思索や現地交流を深めてきたことがあるということだったが、そのことにも「東アジアの中の沖縄」という視点や問題意識が現れているように思う。

仲里さんによれば、第二次大戦後の東アジアでは、「日本型」と「韓国・沖縄型」の2つのタイプの「戦後」があり、冷戦戦略の一環とはいえ、まがりなりにも日本国憲法下で「民主

化」された独立国家として経済成長をとげた日本とは異なり、アメリカ軍によるむきだしで直接的な占領下に置かれた沖縄や韓国では軍事支配的な「戦後」体制が生み出されたということだった。そのように、冷戦体制下の東アジアで、戦前からの日本の植民地主義の「負の遺産」が日本の敗戦と共に解体されるのではなく、逆にアメリカの反共政策によって「再生産」されたということが、沖縄で「反復帰論」が登場するに至った背景にあるということだった。戦後、反共独裁国家といういびつな形ではあれ、まがりなりにも主権国家として独立した韓国や台湾といった他の日本の旧植民地と沖縄を同一には扱えないにせよ、沖縄の「戦後」は、そのように、日本本土以上に韓国や台湾と共通する部分をもつものだと言えよう。

そうした意味で、この間の沖縄での「自己決定権の樹立」へ向かおうとする動きは、「軍事植民地」的状况からの自立／解放を求めるものであると同時に、冷戦体制下で植民地主義の解体が中断された東アジアで、冷戦体制終結後改めてその新たなあり方をいかに創り出すかという大きな「問い」を必然的に含まざるを得ない。仲里さんの話の最後で、〈フクシマ〉の「影」で進行する沖縄の「軍事要塞」化について語っていたが、そこにも現れているように、冷戦終結後の東アジアを創り出す「当事者」は誰かということが、日米の支配者層にとっても切実な問題としてある。

そのような意味で、この間の沖縄での動きは、沖縄を含む東アジアの未来を民衆自身が生み出そうとすることを阻もうとする者たちとの闘いでもあると言えよう。それは翻って、沖縄での「自己決定権の樹立」へ向かおうとする動きとの連帯を模索するヤマトの私・たち自身が、「日本の『構成』的解体」ということを、日本一国だけの視野で捉えるのではなく、そうした大きな政治的・思想的文脈の中にいかにすえるかが問われているということでもあるように思う。

また、この間の沖縄での運動の中で絶えず参照され続けている川満信一の「憲法私(試)案」について、仲里さんは、ヤマトによる侵略・併合によって大きな苦しみを強いられ続けている沖縄の側から日本国家のあり方を「裏返す」ことを通じて、新たな「社会空間」の創造を展望しようとするものだ、と高く評価していた。そうした視点に立てば、「3・11」後の私たちの「生」の再生産の危機の中での、私たちの身体を構成する個々の細胞や遺伝子という微細なレベルにまで及ぶ侵害という事態を、「生」の再生産を支えあう新たな「社会空間」の創造へといかに「裏返す」かが問われているということになるだろう。そのような意味で、川音さんの言葉を借りれば、現在、私たちは、かつてない「思想戦」を闘うことが求められていると言えよう。

以上、概観したように、「沖縄セミナー」では、この間の沖縄での動きの運動的・思想的な意義と併せて、ヤマトの私たち自身の大きな課題を改めて確かめることができたように考えている。同時に、そこでの論議を通じて、そうした沖縄での動きに「応答」するような運動をヤマトの私たちがどこまで創り出しているかが、絶えず問われていたように思う。

### 3. 「アンラーニングⅡ」の論議を振り返る —「構成的権力」・「地域主権改革」・「反原発デモ論」

先にも述べたように、昨年 7 月の大飯原発の再稼働への反対行動として、原発現地では原発前ゲートが「封鎖・占拠」され、東京でも大飯原発の再稼働に抗議して何万人もの大群衆が首相官邸前の歩道に押し寄せるといった状態が数ヶ月間にわたって続いた。そうした原発現地や街頭で活発に展開されている直接行動から、今、何が新しく生み出され、いかに社会運動の新たな範型を生み出しつつあるか。また、それは、社会運動の後戻りできないスタートラインをどのように引きつつあるか。——「日本国家の『構成的』解体」という視点から、そうした「問い」を参加者同士の論議を通じて解きほぐしていくことに向けて、「生・労働・運動ネット」では、昨年 10 月から今年1月にかけて、「アンラーニングプロジェクトⅡ」さらに日本の『構成的』解体の方へ」を企画し、毎回、「生・労働・運動ネット」のメンバーが提起や報告を行った。以下、そこでの論議のアウトラインを紹介したい。

#### □ 第1回「問題のありか——さらに日本の『構成的』解体の方へ」(2012・10・28)での論議から

2012 年 10 月 28 日の「アンラーニングⅡ」の第 1 回「問題のありか——さらに日本の『構成的』解体の方へ」では、最初に、「沖縄セミナー」について改めて言及していた。日米合同の軍事支配体制による「負の歴史」を負い続けてきた沖縄の人々が、この間、沖縄の「自己決定権の樹立」に向けて動き出しているが、そのことに対して、ヤマトの私・たちは、現在のような日本国家・社会をいかに解体するかということで「応答」したいというモチーフで、「沖縄セミナー」を企画したということだった。「沖縄セミナー」では、そのことをとりあえず、「日本の『構成的』解体」と呼んできたが、そのように、沖縄の問題というのは、自分たちにとって、この日本国家・社会のあり方をいかに解体するかという「問い」としてあることが、改めて強調されていた。

ただ、それをそのままむきだしで言うだけではあまり意味がないということで、「第 1 回」の集いでは、「日本の『構成的』解体」ということについて、「構成」や、「構成的権力」という言葉を手がかりにして、イメージをもう少しふくらませることを試みた。

「日本の『構成的』解体」と言う時の「構成」というのは、日本語では何かを「組み立てる」ことだが、英語で構成を意味する"construion"という言葉は、同時に「憲法」を意味する言葉でもある。その派生語である"construion"という形容詞は、「構成上の、構成的な」という意味と併せて、「憲法を制定する権能をもつ」という意味にもなる。「構成的権力」というのは、世界的に活躍しているイタリア出身の活動家・知識人のアントニオ・ネグリによる概念で、彼はそれをタイトルとする本を書いている。彼がそこで言っているのは、一言で言え

ば、この世界には、「憲法を制定する権力」と「憲法によって制定される権力」という二つの権力がある、ということだ。

例えば、日本国憲法というものが既に成立していることを前提として、それに依拠して合法的に根拠づけられているような権力をネグリは「構成された権力」と呼んでいるが、それに対して、憲法を新しく制定する力能をもつ民衆の権力が「構成的権力」ということになる。「日本の『構成的』解体」というのは、そうした民衆側の力能によって、現在のような日本国家・社会のあり方を解体したいということだ。

憲法というものは、一つの社会的な共同態をどのような原理で構成するかをめぐる人々の集合的な意識を集約するものであり、憲法という全ての法の上に立つものを新たに創りだすということは、それまでの国家・社会の基本的なあり方を解体するに等しい意味をもつことになる。そのことを現在の私たちにとってのさしせまった課題に引きつけて言えば、それは、沖縄での「自己決定権の樹立」を求める動きに向きあうことができるようなものとして、この列島上に存在する国家・社会を解体し、組み替えなおすための社会構成的なプロセスをいかに創りだすか、ということになるだろう。

そのように、自分たちが「日本の『構成的』解体」という言葉を使う際に、まさに新たな憲法を制定するに等しいような社会構成的なプロセスをいかにこの列島上に生み出すか、という問題意識がそこに反映されているということだった。

2011 年前後の時期を中心に、エジプト・カイロのタハリール広場の占拠・ムバラク政権打倒に象徴される「アラブの春」と呼ばれた動きから、アメリカ・ニューヨークのズコッティ公園の占拠まで、世界的な広がりでも「オキュパイ運動」が展開されてきた。「第 1 回」の集いでは、併せて、「構成的権力」の著者のアントニオ・ネグリがマイケル・ハートとの共著として最近出した”**Declaration**”（「宣言」）という本を手がかりとして、そのことの運動的な意義を考えることを行った。なお、その時は、まだ、その日本語訳は出版されていなかったが、インターネット上で公開されていたその日本語訳を基に、その「序章」を中心にその本の紹介を行った（ネグリ・ハートの「宣言」は、2013 年 3 月、「叛乱—マルチチュードの民主主義宣言」というタイトルでNHKブックスから出版）。

私・たちが「日本の『構成的』解体」と言っていることを、ネグリとハートの「宣言」では、「グローバル資本主義の解体」と言っているが、そうした観点から 2011 年からの「オキュパイ運動」をいかに捉えなおすかということが、その本の大きなテーマとなっている。ネグリとハートの「宣言」の序章には、「オープニング：運動のバトンリレー」というタイトルが付けられている。「宣言」の中では、「運動の『バトン』を受け継ぐ」という言い方もされているが、この間、世界各地で展開されているオキュパイ運動では、その一つ前にあった運動を受け継いで次の運動が展開されるということが、目的意識的に行われているように見える。もう少し具体的に言えば、この間のオキュパイ運動に共通する顕著な特徴として、大きな運動組織や政治グループが人々を「動員」することなしに行われているということがある。

世界の各都市でのオキュパイ運動で占拠された広場で主張されていることは、必ずしも同じではない。それでは、そうした主張の違いを超えて、世界各地のオキュパイ運動が相互に連動しあっていることの内実がどこに現れているかということだが、ネグリとハートは、それぞれのオキュパイ運動を貫いて、新たな社会を構成するためのプロセスが生み出されている、と言っている。「宣言」の中では、そのことについて、「これらの運動のサイクルの最もラジカルで、最も遠大な諸要素の一つは、代表＝代行の拒絶と、直接民主主義的な参加のスキームの構築」であり、「大切なのは、マルチチュード(民衆)の要求に対して常に開かれたままでいるような新たな社会構成的プロセスを創り出すこと」だ、という言い方をしている。

南アメリカの国々は、早い時期からネオリベ経済政策の「実験場」にされてきたが、アルゼンチンではそれに対して激しい民衆闘争が展開された。その時の有名なスローガンに、「みんな出て行け。一人も残るな!」というのがある。それは、言い換えれば、「私たちの『代表』を勝手に自認するような政治家連中は全員退場しろ」ということだが、ネグリやハートが言っているのは、そうしたスローガンにも直結することのように思う。つまり、自分たちの意思や意識を何者にも代表させることなく、自分たちを直接的に政治的な主体として構成するということだ。

また、ネグリとハートは「宣言」の中で、「アメリカ独立宣言」の一節をパラフレーズして、民衆が政治的な闘争を通じて獲得してきた譲り渡すことのできない諸権利には、「『生命・自由・幸福追求の権利が含まれる』だけではなく、『コモン』に対する自由なアクセス権や、『コモン』の持続可能性に対する権利が含まれる」と言っている。ここで言う「コモン」とは、共有地や水、また、公共サービスや、電気のようなエネルギーも含まれると思うが、人間が生きる上で誰にとっても必要な資源であると共に、人々の共有物として私有化されずに確保されるべきものとして捉えてもいいだろう。世界各地でのオキュパイ運動では、そこで主張されていることの違いを貫いて、代表＝代行の拒否に基づく直接民主主義的な社会構成的プロセスが生み出されていると同時に、そうした「コモン」に対する人々の要求が表現されていると、ネグリとハートは言っている。その時に、何を私たちにとっての「コモン」として「構成」するかということ自体が、重要な社会構成的な営みとしてある。

「2011年から」のオキュパイ運動は、これまでの反グローバリズム運動とは異なる新しい運動のサイクルの始まりを告げるものであるということは、多くの人々が認めていることだ。そうしたオキュパイ運動の特徴として、ネグリとハートが指摘しているのは、「それらの闘争が自らの時間を管理する『政治的な自律性』」をもっているということだ。つまり、反グローバリズム運動での時間のリズムは、WTOといった国際金融機関の会合やG8サミットの開催のスケジュールに大きく規定されるものであったのに対して、「2011年から」のオキュパイ運動では、広場の占拠をいつまで続けるかということ自体が運動の参加者によって決定されるものだ。

そうした「2011年から」のオキュパイ運動に象徴されるような新しい運動のサイクルがど

のようにこの列島上に到達しているかどうかということが、現在の私たちにとっての重要な問いとしてあるだろう。そのようなことと言えば、「3・11」以降、日本の各都市の街頭や原発立地現地で繰り広げられている反原発デモや、再稼働阻止に向けた直接行動が、全世界的な新しい運動のサイクルに相当するものなのではないか。今回の「アンラーニングⅡ」のプログラムでは、「ポスト3・11の反原発運動」を考えるということが主なテーマの一つになっているが、その際に、この国での「3・11」後の反原発運動の中に新たな社会構成的プロセスがいかに孕まれているかということが、論議の重要なポイントとしてある。

そのように、ネグリとハートの「宣言」を読むことで、「2011年」からのオキュパイ運動の意義をどのように捉えるかについての大きな手がかりを得ることができたと感じている、ということだった。また、この間、私・たちが「日本の『構成』的解体」と言っていることが、全世界的に見ても確かな運動的な根拠があることをその本を通じて改めて認識することができて喜ばしく思っていると、ネグリ・ハートの「宣言」の紹介の最後で語られていた。

## □ 第2回「『地域主権改革』?!——『唄』を忘れたカナリアは……」(2012・12・16)での論議から

2012年12月16日、「アンラーニングⅡ」の第2回「『地域主権改革』?!——『唄』を忘れたカナリアは……」の集いを行ったが、その中で、民主党政権下で「地域主権改革」ということが浮上してきた背景や、それに対して私たちとしてはどのようなスタンスで向き合うかをめぐって、提起が行われた。

60年代末から70年代にかけて全国各地で展開された反公害・反開発を掲げる地域住民闘争を通じて「地域」というものが改めて見出されてきた流れがあり、「地域主権」という言葉は、90年代前半までは中央政府に対抗する「地域主義」的なニュアンスが込められていた。しかし、今日、一般的に使われているのは、民主党の掲げる「地域主権改革」路線を踏まえた「地域主権」概念だ。民主党の「地域主権戦略大綱」中の言葉を使えば、「地域主権」改革とは、「国が地方に優越する上下の関係から、対等の立場で対話のできる新たなパートナーシップの関係へと根本的に転換する」と共に、「国民が、地域の住民として、自らの暮らす地域のあり方について自ら考え、主体的に行動し、その行動と選択に責任を負う」ことだとされている。

グローバル資本主義とネオリベ「改革」が全世界を覆い尽くす中で、全世界的に基礎自治体といった国家の下位スケールの統治単位の再編成が行われているが、自民政権での「地方分権改革」や民主党政権の「地域主権改革」は、そうした全世界的なネオリベ政治「改革」の流れの中で登場してきたものだと言えよう。

「国民は中央政府だけではなく、自分が居住する地域の自治体にも自らの統治を信託している」という「二重の信託説」に基づく地域自治論を唱えた松下圭一という政治学者が



いるが、民主党政権の元首相の菅直人は、松下圭一の弟子を自称している。民主党の「地域主権戦略大綱」に明確に現れているように、「地域主権改革」というのは、「国家はお前のライフスタイルに干渉することはしない代わりに、お前の行動と選択の結果はお前自身が責任を負え」という、「自己選択」・「自己責任」というネオリベのロジックに、「市民自治」の要素をまぶしたものだと言ってもいいだろう。

グローバル経済化やネオリベ「改革」の進展によって、この国でも中央政府から国家の下位にある自治体へ国家のもつ権限をゆだねるといったある種の地域の「自治・自立」の促進が、国家が福祉のような社会的な領域から「縮退」して、治安や国防といった国家に固有の役割に専念しようとする事と並行して進められてきている。「道州制」構想は、関西の経済界によって積極的に支持されてきたが、その背景には、ネオリベ資本主義が「自由」に展開する上で、現在の都道府県という広がりでは不十分だということがある。

そうした状況に対して、自分としては、この「アンラーニングプロジェクトⅡ」のテーマでもある「日本の『構成的』解体」という「唄」を歌うことで対峙していきたい。「日本の『構成的』解体」とは、一言で言えば、社会の諸領域での自治・自律に向けた実践や「自己権力」を生み出す、そして、そのことによって国家を解体する方向へ追いつめる、ということだ。なお、この場合の「自己権力」の獲得というのは、既存の国家権力に取って代わる新たな「主権」を目指すということではなく、むしろ、「主権」的な権力のあり方それ自体を地域の自治・自律に基づく連合の形成を通じて解体するようなイメージで捉えている。

当日の提起の中で、東京・代々木公園での「さようなら原発 10 万人集会」の前日に、「集会の壇上を占拠してアピールしたいと思うのだが、その場で何を言ったらいいのだろうか」という相談をある青年から電話で受けた、というエピソードが語られていた。結局、その青年が「10 万人集会」の壇上を占拠することはできなかったのだが、彼からの相談に対して、大学や職場、地域ごとに「反原発評議会」をつくることを呼びかけたらいいのではないかと答えたということだった。

かつてのソビエト連邦の「ソビエト」は「評議会」という意味であり、また、第一次世界大戦後のドイツ革命は、労働者と兵士が結成した「レーテ」が革命運動の母体となったことから「レーテ蜂起」とも呼ばれているが、その「レーテ」も「評議会」を意味する言葉だ。もう少し最近のことで言えば、ハンガリーの民衆がソ連の支配に対して蜂起した 1956 年の「ハンガリー革命」でも評議会が結成されている。

そのように、既存の政治・社会のあり方に対峙しようとする人々の意思を共同化することに向けて評議会が生み出される際には、必ず自分たちの「敵」を名指すということがある。一時、首相官邸前の街頭を数万人規模の抗議者で埋め尽くした「官邸前抗議行動」は、現在も規模を縮小しながら続けられている。しかし、そこでは、原発の再稼働や原子力規制委員会の人事を「敵」とすることはあっても、原発の再稼働を強行しようとする電力会社や、原発政策に固執する日本国家そのものを「敵」として名指すところにまで踏み込んではいない。

沖縄で拓かれつつある「自己決定権の樹立」という地平に対して、私・たちとしては「日本の『構成的』解体」という「唄」を歌うことで「応答」したい。その際に、かつての評議会運動のように、この列島上の様々な地域や社会的諸領域で、人々が自らの意思を共同化してそれを「自己権力」にまで高めていくための新たな仕組みをどのように創りだすのか。そのことが今後の運動の重要なポイントになるのではないか、ということが、当日の提起の最後で、改めて強調されていた。

## □ 第3回「ポスト3・11の反原発運動 ——何が起きているのか」(2013・1・27)での論議から

今年1月27日、「アンラーニングⅡ」の第3回「ポスト3・11の反原発運動——何が起きているのか」の集いでは、最初、「3・11」以降の反・脱原発運動がどのように展開されてきたかを大きく振り返って整理することが行われた。

「3・11」からまだ間もない時期にこの国の各都市の街頭で反・脱原発デモが展開されたが、その中でも、とりわけ、新たに状況を画するものだと思うのが、2011年4月11日、「素人の乱」の主催で高円寺駅周辺で行われ、1万5千人が参加した「超巨大反原発ロックフェスデモ」だ。「3・11」からちょうど3ヶ月後の6月11日に、「素人の乱」が企画した新宿デモも含めて都内の各地で反原発デモが行われたが、「共同行動」として同日の夕方にそれらのデモの参加者が何万人もの大群衆となって新宿駅東口アルタ前広場に集結したことで、一時的ではあるが、そこに警察の規制の及ばない「解放区」が出現した。「素人の乱」では、その3ヶ月後の9月11日にも、1万人規模の反原発デモを行ったが、その時には12人もの逮捕者が出るという厳しい刑事弾圧を受けている。

2011年9月19日、原水禁や元総評系の労働組合等が中心になって、「さようなら原発5万人集会」が行われて6万人もの参加者があったが、そこでのアピール・発言や参加者の動き自体には特別に目新しいことはなかったように思う。むしろ、自分としては、9月11日の「経産省前包囲行動」の一環として、その日に「9条改憲阻止の会」のメンバーが同省の敷地内に「経産省前テント」を設置したことに注目したい。「経産省前テント」は、政府側の度々の脅迫や妨害行為にも関わらず、原発に反対する人々の「拠点」として現在も継続されている。

福島原発事故からちょうど1年目に当たる2012年3月11日には、全国各地で反・脱原発デモやアクションが行われたが、その日には、「原発再稼働反対」や「脱原発社会」を訴えて国会議事堂を1万人の「人間の鎖」で包囲するというアクションが行われている。それをどう評価するかということはあるが、2012年の反原発運動の注目すべき動きとして、間違いなく、「首都圏反原発連合」が主宰する「官邸前行動」がある。大飯原発の再稼働が決定される前後の時期から「官邸前行動」の参加者は急増し、6月15日には1万人、6月22日には4万5千人、大飯原発再稼働の直前の6月29日には、主催者発表で20

万人がそこに参加したが、その後、数ヶ月に渡り、毎週金曜日の「官邸前行動」に毎回数万人が参加するという状態が続いた。11月11日の「反原発100万人大占拠行動」でも、首相官邸前や国会議事堂周辺を数万人の参加者で包囲・占拠することが行われた。

以上のような「3・11」から今年1月現在までの反・脱原発デモの流れの概観からもうかがえるように、それ以前から「生の無条件の肯定」を掲げて街頭でサウンドデモや奇抜なアクションを展開してきたフリーター労組や、「素人の乱」のような「路上解放」系の若者たちが中心となって、大規模な反・脱原発デモを行っていた時期がまずあった。それから少し間を置いて、2012年夏を中心に「官邸前行動」や国会議事堂周辺での抗議行動が登場している。そのように、2年足らずの短い期間ではあるが、反・脱原発を掲げる街頭でのアクションや直接行動の流れは2011年の途中で一度「切れ目」があり、また、運動の主体も変わってきたことが改めて指摘されていた。

「第3回」の集いでは、そのように、「3・11」後の反・脱原発デモの流れを概観することと併せて、原発デモをめぐって書かれた9つの文章を素材として、「3・11」以降の反・脱原発運動のあり方や、そこからどのような新たな運動状況が生み出されているかを探ることを試みた。

「資料①」の五野井郁夫の『「デモ」とは何か』(NHKブックス・2012年4月)の文章は、ツイッター上で不特定多数の人たちにデモへの参加を呼びかける「ツイッター・デモ」等、インターネットやメール、ツイッターを積極的に活用した「3・11」以降の反・脱原発デモについて、かつてのような党派的・暴力的なイメージを脱した「直接民主主義の表現と実践へと変貌を遂げている」という高い評価を与えている。また、彼は、政治学者の丸山眞男の言葉を援用して、「院外」たる民衆の意思が「院内」の議員連中に無視・黙殺されるような場合、自分たちの未来と将来世代を守るために、「議会外の力」を「院内」に突き付けるためのデモという「直接民主主義の表現」が必要だと主張している。

「資料②」の社会学者の小熊英二へのインタビュー記事(2012年7月19日付「朝日新聞」『オピニオン』欄)で、小熊英二は、革命派によるバスチューユ監獄襲撃というフランス革命の大きな転換点の日に、狩りの獲物がなかったフランス国王ルイ16世が日記に「何もなし」と書いたエピソードを紹介している。ルイ16世のように、社会の根底が大きく動いていることの認識が欠落しているという意味で、「代議制の危機を招いているのは政府自身」であり、デモを通じた「院内」と「院外」のズレの解消を訴える五野井郁夫とは異なり、「デモをする人たちは、もはや議員に自分たちを代表してほしいとは思っていない」と小熊英二は捉えている。

「資料③」は、「週刊金曜日」に掲載された、政治学の研究者で「官邸前行動」にも深く関わっている木下ちがやへのインタビュー(2012年8月31日付「週刊金曜日」路上から『No Nukes』をNo.4)だ。2011年4月10日の「素人の乱」のデモから2012年夏を中心とする「官邸前行動」に至るまでの人々の行動や意識は、決して急速に変化したのではなく、「3・11」以降、人々が放射能汚染や原発について学習・議論やデモを通じて場を

共有することで厚みのある粘り強い意思が形成されていったと、彼は捉えている。彼によれば、大飯原発の再稼働は、そのようにしてじっくりと形成された人々の反・脱原発の意思が一挙に「爆発」するきっかけになったということだ。

「資料④」は、メディア論やコミュニケーション論の研究者の伊藤昌亮(いとう・まさあき)の「デモのメディア論」(筑摩書房・2012年12月)の中の文章だが、彼は、「3・11」以降の反・脱原発デモを「市民運動型」と「サウンドデモ型」という2つのタイプに分けて論じている。「市民運動型」のデモは、シュプレヒコールやスローガンといった「あくまでもメッセージを伝えるための手段」となっているのに対して、「サウンドデモ型」のデモでは、具体的なスローガンやメッセージを伝えること以上に、『『市民』と呼ぶにはあまりにも危なっかしい雰囲気』の若者たちも含めた「有象無象」が街頭でお祭り騒ぎを繰り広げるというスタイル自体が、自分たちの存在や集合性のあり方を提示するための「メディア」となっている。

そのように、いわゆる「ロスジェネ世代」が参加者の多くを占める「サウンドデモ型」のデモでは、「社会が壊れていく姿を目の前で見ながら自分たちの社会観を形成してきた」者たちが、一時的であれ、街頭で一体感や共同性を生み出そうとするという意味で、一種の「社会を創り出す運動」であると伊藤昌亮は捉えている。

「資料⑤」の「ざくっとデモ論」と題する文章は、「かすが」というハンドルネームの人物による2012年7月10日付のブログの中のものだが、彼は、デモの「機能」と「メタ機能」という2つの区分を立て考察を行っている。デモの「機能」というのは、一言で言えば、特定の政治的・社会的な要求を掲げて街頭で集団的に声を上げることを通じて、『『民意』の顕在化』を図るということだ。それに対して、通常であれば投票行為という間接民主的な政治変革の手段しかもたない民衆が、街頭で直接に国家の法遂行行為に対する意義申し立てを行い、既存の社会秩序に「亀裂」や「麻痺」を生じさせることで「民主制を支える闘いの武器」とするというのが、デモの「メタ機能」ということになる。

「資料⑥」の「ポスト運動の分析」という文章は、「現代思想」誌の論客の一人であり、一昨年3月27日の集いのスピーカーを引き受けてくれた矢部史郎のブログ(2012年9月4日付「原子力都市と海賊」)から取ったものだ。彼は、「3・11」以降、この国の主婦たちを中心に組み込まれている放射線防護活動も含めた都市住民の集団的行為の組織化が、「ネットワーク」(諸団体・グループの結合)から個人のレベルまで分解された人々によって再び織り上げられる「メッシュワーク」へと転換したと捉えている。そのように、彼は、スマートフォンや線量計の大規模な利用によって、都市暴動や放射線防護活動といった直接行動の組織化がマルクス主義といった理論を媒介せずに直接に行われていることに着目して、デモや直接行動のもつ体制転覆的なポテンシャルを更に引き出すものとしてコミュニケーション・テクノロジーの可能性を指摘している。

「資料⑦」は、「東京新聞」の記者でエジプトのタハリール広場の占拠運動の取材・報告を行っている田原牧が書いた『『海』を耕す試み——エジプト民衆反乱と反原発』という文章(atプラス13号)2012年8月の抜粋だ。その中で、田原牧は、「官邸前行動」に批

判的な投書を紹介しているが、その投書の背景として、昨年6月29日の「官邸前行動」で、呼びかけ団体が、警察の指揮官車のマイクを通じて「ここで暴動みたいになっても原発は止まりません」と言いながら、参加者たちに終了予定時間前の解散を呼びかけたという「前代未聞の出来事」があった。そのように、彼は、「暴徒のように映ったら困る」といった主催者側の「自主規制」や、「ここで事故が起きてしまえば、再び抗議行動ができなくなる」という「官許」の発想を厳しく批判している。

その上で、彼は、「赤提灯や茶の間、井戸端で庶民がお上に対して悪態をつく」ような民衆同士の共同性や権力者への批判意識といった「新たな社会を構想する前提そのものが崩落している時代に私たちは生きている」と言いながら、タハリール広場の占拠運動や「官邸前行動」のような、現在、世界各地で広がっているデモは、そうした乾ききった『『人民の海』を耕す試み』ではないか、と言っている。

「資料⑧」の「i」と「ii」は、文化・社会批評家の廣瀬純が、「3・11」以降の反・脱原発デモについて論じたものだ（『週刊金曜日』2011年10月14日号・「生の最小回路31 すべての中にすべてがある」、同2012年9月4日号・「自由と想像のためのレッスン1 現代思想の実践——『怒り』から『自由』へ」）。2011年9月11日に「素人の乱」が企画したデモでは12名が逮捕されるという厳しい刑事弾圧があったが、「資料⑧ i」の文章の中で、廣瀬純は、その時の取り調べの際に逮捕者が警官から「何がやりたいデモなのか、まるで理解できない」と告げられた、というエピソードを紹介している。廣瀬純は、「反原発」のただ中に、その警官は、反原発・脱原発の声とは別の「過剰な何かを聞き取っている」のであり、警官にとって「ノイズにしか聞こえないその『過剰な何か』のほうこそが、『原発やめろ』の意思表示にもまして、反原発デモの参加者たちの『やりたいこと』の中心をなしているという奇妙な事実気づいてもある」と言っている。

批評家の柄谷行人は、自分は社会に「代案」を提示する「アーキテクト(建築家・設計者)」であることを止めて、「アーティスト」という資格で反・脱原発デモに参加すると同時に、他の人々にもデモへの参加を呼びかけている、と発言している。廣瀬純は、その発言を受けて、「歩くことでわれわれ一人ひとりがそれぞれ『アーティスト』になるのであり、疲労とそれゆえの怠惰とに抗って踏み出される一步一步が『解放』なのだ」と言っている。そのように、彼としては、人々が「過剰な何か」に突き動かされてデモのような直接行動に踏み出すことを全面的に肯定したいという思いがあるように思う。

「資料⑧ ii」の文章の中で、廣瀬純は、市田良彦の「革命論」(平凡社新書・2012年2月)の中の言葉を引用して、「革命とはクリシェ(常套句・決まり文句)との闘い」であり、「クリシェとは、社会的・経済的・利害的・物理的な因果性に従って継起する諸現象や、そうした因果性」のことだと言っている。つまり、「原発事故を原因とする結果としての反原発デモ」という「必然性の中で生きられる限り、反原発デモはクリシェでしかありえない」し、また、「反原発デモの参加者の怒りが原発事故によって隅々まで規定されている限り、反原発デモは革命でありえない」ということになる。

廣瀬純は、同文章中で、「現実には原発事故との因果的連鎖の中でしか生起し得ない反原発デモがそれでもなお、その連鎖の『切断』となり、まったく『自律性』を得ること」、「怒りの必然性にとどまることなく、例外としての革命の可能性を肯定すること」という言い方をしている。その上で、彼は、「革命論」での論議を引いて、「因果的連鎖からの『逸脱』や『切断』としての革命の原因に人間になるための思索や技法、あるいは、技術の具体的な発明こそが『現代思想』と呼びならされてきたもの」にのっての根本的な課題だ、と言っている。

それらの廣瀬純の文章は彼特有のレトリックに満ちているが、彼が反原発デモの中の「何か過剰なもの」に注目したり、反原発デモはいかに革命になりうるかという「問い」を精一杯追求しようとしていることに、「3・11」以降の反・脱原発デモを考える上で大事なヒントがあるように思うということが、当日の報告の最後に語られていた。

「第3回」の集いでは、以上のような報告の後、参加者同士の「フリートーク」の論議を通じて、参加者がそれぞれの関心やスタンスから、当日の提起の中で紹介された反・脱原発デモ論を改めて整理しなおすことを行った。

そのような論議の中で、当日の報告を行った者は、デモの「メタ機能」を論じている「資料⑤」の「ざくっとデモ論」や、「資料⑥」の矢部史郎の文章、また、「資料⑧ i」と「資料⑧ ii」の廣瀬純の文章のような、とりわけ、デモのもつ既存の社会秩序に対する転覆的な要素に焦点を当てて論じる文章に自分としては親近感をもっている、と語っていた。そのように、デモの「メタ機能」への期待と共感をもって状況を捉えるのか、それとも、「資料①」の五野井郁夫の文章や、「資料②」の小熊英二インタビュー記事、「資料③」の木下ちがやインタビューのように、デモの社会的な背景といった社会学的な視点から状況を観察・分析するのかといったスタンスの違いから、それらの文章を整理しなおすことができるのではないか、ということだった。

当日の「フリートーク」の論議の中で、「資料④」で伊藤昌亮がデモ参加者の存在のあり方や意識にまで降りたってデモを見ようとする視点はとても大事だと思うという意見が、ある参加者から出ていた。しかし、同時に、労働組合が組合員を「動員」して行うデモも、いわゆる「新しい社会運動」の当事者のデモも、同じ「市民運動型」のデモということになるし、「市民運動型」のデモの参加者が本当に自分のことを「市民」というアイデンティティーで捉えているかということから言っても、「市民運動型」と「サウンドデモ型」という二分法でいいのか疑問に思うという発言も、同じ参加者からあった。そのような意味で、デモの参加者が自分のことを自覚的に「市民」として捉えていたのは、60年代末の「ベ平蓮」の時ぐらいではないか。〈68年〉の運動では、むしろ、学生や労働者であるといった自分たちの社会的な属性をいかに離脱するかということが意識されていたように思う、ということだった。

更に、そうした論議を受けて、人が街頭で社会的な属性から離脱して新たな集合性を獲得するというのは、サウンドデモに限らず、どのようなデモでもありうることではないか、と

いう意見が出ていた。また、デモの「メタ機能」ということも、デモで人が街頭に出ることで自分の社会的な属性や日常性から最大限はみ出そうとすることの中で孕まれるようなことであって、デモの「メタ機能」それ自体があるということではない、という指摘もあった。

当日の「フリートーク」の中で、「資料⑧ i」と「資料⑧ ii」で廣瀬純が言っていることについて、彼が言うように、「原発デモの参加者の怒りが原発事故によって隅々まで規定されている限り、反原発デモは革命でありえない」ならば、「素人の乱」のサウンドデモと「官邸前行動」とはその限りでは同じことになってしまう、という意見があった。その意見を受けて、彼としては他の論者にはない問題提起を精一杯しようとしていると思うが、それが十分に現在の運動状況に即した論議になってはいないし、運動側も、まだ、「反・脱原発デモはいかに『革命』になりうるか」という彼の問題意識を受け止めることができるようなレベルにはないのではないか、という発言も出ていた。

また、「資料⑥」で矢部史郎が言っていることについて、この間の運動の新しさをそのように捉えたいという思いはよく分かるが、現実の日本の運動がそうなっているとは全く思えない、という意見が出る一方で、首都圏の若いお母さんたちが放射能を計測して、その情報を即座にスマホで交換しながら動き回っているような運動のあり方を彼はうまく捉えていると思う、という意見もあった。

また、当日の「フリートーク」では、ある参加者から、今回紹介された「デモ論」の中でも、デモのもつ「危険な匂い」というか、人が社会的な役割や属性を脱ぎ捨てて街頭に出ることを積極的に肯定するような論議に惹かれるという意見が出ていた。そうした意見を受けて、別の参加者から、「資料④」で伊藤昌亮が言っている論議を言い換えれば、デモの中で脱ぎ捨てるべき確固たる社会的な属性を最初からもたずに、デモを通じて自分たちのアイデンティティを集散的に確かめるような世代が登場しているのではないかと、という指摘があった。それとは逆に、「官邸前行動」では、たとえ不安定雇用労働ではあっても、賃労働者として働くような日常性を脱ぎ捨てずに、そのまま、あまりにもなめらかに首相官邸前の歩道で抗議行動を行うことへと移行しているという印象を受ける。そういった意味で、先程の「3・11」以降の反・脱原発運動の流れをたどる中で指摘されたような「3・11」以降の反・脱原発運動の「切れ目」や不連続性があるように思う、ということだった。

以上のような「フリートーク」での論議を受けて、「第 3 回」の集いの最後に、「3・11」以降の反・脱原発運動を日本の社会運動の流れの中で捉え返すことが行われた。

平和運動や貧困問題も含めて、全国組織の労働組合による労働運動を中心に組み込まれるような社会運動の「古典的範型」が戦後長らく続いてきたが、それを解体させたのが、全共闘も含めた〈68年〉の運動だった。その消滅後、「反公害・反開発」の住民運動や、障害者運動やフェミニズム運動、エコロジー運動のようないわゆる「新しい社会運動」が登場したが、それを社会運動の範型の「解体の始まり」と捉えれば、そのような「解体の始まり」の「終わり」を示すのが、80年代末の反・脱原発運動の「ニューウェーブ」ということになるだろう。当時、新しく反・脱原発運動に入ってきた女性たちが、デモや電力会社前

での抗議行動を規制する警察官に向かって、「あなたたちも人間として危険な原発に反対してください」と呼びかけて、古くから反原発運動に取り組んできた者たちを当惑させたということがあった。この段階まで来ると、社会運動のあり方はそれまでになく大きく崩れてしまったと言ってもいいだろう。もう少し後の90年代半ば以降になると、NPO やボランティア活動と社会運動との区別自体がなくなってしまい、社会運動という概念やカテゴリー自体が散逸してしまうが、現在は、その「散逸」自体が散逸しているというか、そういったことが全く意識に昇ることもないような状態になっている。

1999 年のアメリカ・シアトルでのWTO総会を大群衆で包囲・流会させた「シアトルの乱」に代表されるような反グローバリズム運動は、英語で"**a movement of movements**"と呼ばれているが、それは、巨大企業やネオリベ政策に反対する複数の運動グループで構成される1つの運動ということだ。それをもじって言えば、この国の「3・11」以降の反・脱原発運動は、"**a movement of several movements**"、つまり、互いにあまり交差することのない複数の反・脱原発運動グループ・団体も含めて構成される1つの運動ということになるのではないか。そのことを更に厳密に言えば、"**a stream of several streams**"、つまり、まとまった運動というよりは、いくつもの流れから成る一つの大きな流れとして、現在の反・脱原発運動があるように思う。「官邸前行動」も、一つの運動というよりも、様々な反・脱原発運動の潮流が、合流しているという自覚もないままに一つに合わさったものと見るのが相応しいように思う。

2000 年代初頭のイラク反戦運動の時にこの国の街頭では大きな「ざわめき」が生じたのだが、その後も、「生の無条件の肯定」を掲げる「保障されざる者」たちによる「路上解放」運動や、反貧困運動として、街頭の「ざわめき」は小さくとも続いてきた。

「3・11」以降の反・脱原発運動の中で、再び大きな街頭の「ざわめき」が生じているが、そのことの中に、「日本の『構成的』解体」に向かうベクトルがどのように孕まれるのかを、今後ぜひ探り続けていきたい。そのような思いが、「3・11」以降の反・脱原発運動を日本の社会運動の流れをたどり直すことの最後に語られていた。

以上、概観したように、「アンラーニング・II」では、「日本の『構成的』解体」について、ネグリの「構成的権力」の概念を手がかりにそのイメージを豊かなものにするを試みると共に、2011 年の全世界的な「オキュパイ運動」の運動的な意味を改めて確認した。併せて、「地域主権改革」のような私たちの生きることの全てをネオリベ的な原理で再編成しようとする動きに対して、かつての「評議会運動」も参照しながら私たちがどのようなスタンスで対抗するかを探った。また、「3・11」後の反・脱原発運動をめぐる論議では、「再稼働阻止」といった個別の課題を提示するために街頭で集团的に声を上げるといった側面を超えて、デモや直接行動の中にある体制転覆的なポテンシャルや、デモの参加者の自分の社会的な属性や日常性からはみ出そうとすることへの欲求を、改めて確かめることができたように感じている。



# おわりに

以上、概観してきたように、私・たちは、「3・11」後の私たちの「生」の大きな危機をこの日本国家—社会の「構成的『解体』」へといかに「反転」させるかを探りながら、「自己決定権の樹立」という新しい地平を拓こうとする沖縄の人々に「応答」するような運動を、ヤマトの私たちの側がどのように生み出すかを模索してきた。

昨年秋、沖縄では、オスプレイ強制配備に抗議する人々が、普天間基地のゲート前を4日間にわたって封鎖したが、基地ゲート前でただ座り込むという「非暴力直接行動」の闘いによって日米安保体制の要である米軍基地を機能不全に陥らせた。そこからもうかがえるように、現在、沖縄での動きは、「自己決定権の樹立」という段階を超えて、日米安保体制そのものや、沖縄の日本国家への帰属それ自体を問うようなことにまで突き進もうとしているように思う。そのような意味で、沖縄では「拒否」の累積によって、すでに「前線」の形成がなされていると言ってもいいだろう。

そうした沖縄での「拒否」の蓄積の動きに相応しいような動きを、ヤマトの側がどこまで創り出しているかはまだまだ心もとないのが実情だ。しかし、そうではあれ、「3・11」後の反・脱原発運動の中での直接行動やアクション、とりわけ、昨年6月末に大飯原発のゲート前を封鎖・占拠した大飯原発再稼働阻止闘争に象徴されるような動きの中に、「『拒否』の〈前〉線化」が現れつつあると言ってもいいように思う。

そうした『『拒否』の〈前〉線』が継続的に繰り返し変わりながら累積されて、「前線」へと転化することで非暴力・直接行動の連鎖がさらに厚みをもって形成され、そこから拓かれる「拒否」の地平に「日本の『構成』的解体」へのベクトルを描き出すこと。先程も述べたように、そのことが「アンラーニング・2013」の課題としてあるが、この間の反・脱原発運動や、沖縄での闘いの中の『『拒否』の〈前〉線』のありかをさぐるということが、その中の大きなテーマとなっている。

現在、「アンラーニング・2013」は、以下のようなプログラムで進行中である。

1. 「オープニング: 私たちの『課題』のありかと今年度のプログラム」
2. 「『拒否』の〈前〉線をさぐる・1——反・脱原発運動の展開の中から」
3. 「『拒否』の〈前〉線をさぐる・2——沖縄の闘いを通じて」
4. 「『拒否』の地平をみきわめる試み——『拒否』のメタ論理を考える」
5. 「武藤一羊『戦後日本国家の構成原理』論に学ぶ  
——戦後日本国家レジーム・その原型と変容の『現在』」
6. 「武藤一羊さんを招いて:  
安倍政権による戦後日本国家レジームの解体と私たちの側からの『対抗線』」
7. 「大野光明さんを招いて: 拒否が拓く〈政治〉——その現在と展望を探る」
8. 「日本の『構成』的解体の始まりを——『アンラーニング・2013』のまとめとして」

私・たちは、「アンラーニング・2013」の試みを進めながら、今日、この列島上の『拒否』の〈前〉線の動静をつかみ、そうした「拒否」が拓きつつある地平を見きわめ、その地平に「日本の『構成』的解体」へ向かうベクトルを描くことに挑戦したいと思う。

——私・たちは、その挑戦を多くの人々との共同の営みとすることへ向けて、『拒否』の〈前〉線情報を、発信する。願わくは、それが今この列島で生起している「拒否」の諸動線の間を〈運動〉する〈と〉とならんことを。

---

# IN/OUT

「素朴な叫びよりもさりげない  
はるかな暗号のように響き合う  
言葉」(清田政信「遠い朝・眼の  
歩み」)

---

## 平井玄：「敵対線を引き直す」

### 1) サッチャーとローチ

マーガレット・ヒルダ・サッチャーが脳卒中で世を去ったのはついひと月前の4月8日である。剛腕で鳴らした1980年代イギリスの女性宰相を送る国葬が準備されているその翌日、映画監督のケン・ローチは「彼女の葬式を民営化しよう」と言った。

この言葉は核心を突いている。「新自由主義」が終わったことは一度もないからだ。「自助努力」の名の下に、イギリスの労働者たちが生きる社会空間をまるごと売り渡した張本人がサッチャーだった。その彼女が権力の座を追われて23年。その間に「世界恐慌」が勃発してから時代はさらに大きく一回転した感がある。今や新たな「富裕層」がぶ厚い暗雲のように地球上を覆う「パワー新自由主義」が台頭している。死後3日を待たずに「鉄の女」は甦ったのである。だから「葬祭コストを市場競争にさらせ」という映画監督のコメントは、サッチャーリズムが死んでいないことへの怒りである。世界のどこでも叩き上げの新自由主義者ほどたちの悪い者はない。その点でも、彼女は間違いなく先覚者だったのである。

### 2) オールド・シネマパラダイス

サッチャーに対する痛烈な批判者として知られるローチは、映画作家としてもハリウッド的なスペクタクル映像を拒んできた。宇宙から青い星を見下ろすCG映像から始まり、成層圏に突入した映画の眼が急降下、さらにクレーンカメラで主人公の周りを360度回転するといったお決まりのシーンなど、彼の作品

には一度として現れない。デジタル色調が可能にした闇が垂れ込めたような濃い翳りも感じない。3Dはむろんのことだ。人の眼が見ている地上100数十センチ、自然光の下で移民の女が思案に迷う静止画や、呼吸する肩とともに揺れる失業者の視野が基調になる。展開されるストーリーにも、時制の逆行、並行する複数世界の絡み合い、倒錯した内面のアレゴリーなどほとんど登場しないのである。

「コモンの眼」だ。だが同時に、現実を飛び超えて見えないものを描く「前衛性」にも乏しいのである。まるで喪われた20世紀リアリズムの「シネマ・パラダイス」である。批評家のそういう意見は承知の上だろうから、ここに留まる意思力は尋常ではない。映像技術にばかり拘泥する作品が蔓延する現在、逆にこの選択が「実験的」にさえ映るのである。

おそらく、こうした方法意識を自覚しながら、最新作『天使の分け前』（2012年）は失業者100万人の連合王国の片隅グラスゴーを見つめている。このスコッチ・ウィスキーの故郷にして産業革命都市の残骸で、ケンカ、盗み、詐欺の微罪で「社会奉仕」の判決を受けた若き男や女たち、失業雑民たちの姿を、貧民街バローフィールドの眼で描き上げる。事実、公共建物を改修するペンキ塗りに監視員つきで駆り出される主人公ロビー役には、地元出身で似たような経歴を持つ青年が選ばれている。対立グループの挑発に激高する痩せた彼の反応が、私に眼の中で東京のフリーターデモに参加するラッパーが制服部隊に毒づく背筋の疼きに直結する。額の皺まで似てしまう。これは「非正規労働者」の存在がついに地球労働力人口の過半数を超えて、惑星的な普遍と化した証である。

### 3) 労働者からステークホルダーへ

「鉄の女」がイギリス首相になって34年。この国でも、サッチャーリズムを和風アレンジした日経連による労務支配ガイド「新時代の日本的経営」から18年。それを実行した小泉政権からも12年が過ぎた。その間に「リーマン・ショック」と「原発震災」に揺さぶられて、「市場原理主義」から「新福祉社会」へ曖昧に移行し、そして曖昧に失敗していく。気がつく「敵」のいない「格

差社会」という言葉は吹き飛んでいた。「貧困」や「破綻」を資源として大量に必要とする層が存在している。そういう大きな「敵」が公然と姿を現したからだ。

「ステークホルダー」という言葉が「利害関係者」から転じて「投資家」を意味するようになったことは、企業社会の住人なら誰でも知っているだろう。シルクハットに葉巻の燕尾服紳士が麻袋にゲンナマを詰め込む「資本家」イメージは19世紀ロンドンのイラスト新聞が描いた古文書、鳥獣戯画のようなものである。セントラルパークを見下ろす摩天楼最上階で重役会に臨むスーツ姿のエグゼクティブでさえ、20世紀の産業遺産になった。ここではノーネクタイやパンツスーツ、あるいはデザイナーズTシャツで会員制ダンスクラブに集う男女の「ステークホルダー」たち、といった「敵」イメージの当てにならない断片をひとまず想像しておこう。

20世紀を通じて企業経営のベースが、創業者一族による私的な資本投下から公開株式市場による資本調達へと進化するにつれて、その公的な役割が強調されるようになった。だから当初、ステークホルダーという言葉が意味する範囲は「ホワイトカラー社員」や「顧客」だけでなく、「労働者」や「市民社会」まで含んだ広がりを保っていた。「労働者による生産の自主管理」を掲げて勃興する社会主義運動への対抗が強く意識されていたのは間違いない。ニュートラルに聞こえる「利害関係者」という言い方が広まったのは、こういう歴史的背景がある。「企業は誰のためにあるのか？」という問いを安全圏に囲い込もうとして、経営学者たちが苦心して練り上げた模範解答だったといえる。

ところが「社会主義敗退」以降には、対象となるメンバーの「戦略的選択」が強調されるようになる。当面の脅威が消えたからだ。こうした企業体のあり方を比較経済論的に整備する国際的な論争に、第1次ブントの指導者だった姫岡玲治、つまり青木昌彦が深く関与していたことを小さく伝えておこう。「当期営業利益」の数字だけが経営最高責任者の命脈を決する。そんな趨勢の下で、ステークホルダーとは、もっぱら株価を瞬時に左右する「機関／非機関投資家」を指すようになったのである。

だが大きく強調しておこう。このstakeholderの語幹stakeは「刺すもの」と

いう原義を持つ。そこから「火刑の柱」や「賭け」といった二つの意味系が派生している。さらにholderという接尾辞が付くと、「磔の柱を支える者」や「賭金を預かる第三者」という語義が深い海の底から浮かび上がるのである。時の大海に沈んだ言葉の骸は何処ともなく流れていき、ある日遠い岸辺に水死体のように打ち上げられる。裂けた藻のように海底を彷徨う非正規たちは、それを「死刑執行人／博打打ち」と読むだろう。ステーキホルダー杭を支える者たちにとっては、フリーターなど火炙りさえ無駄なコストである。担当者がメールする「発注ゼロ」の一瞬で足りる。「格差社会」が博打打ちの理想郷なのは古来より当然のこと。資本の世界の住人たちは移動なき「階級社会」もしくは「カースト社会」という、素晴らしく明快な世界像を打ち出したのである。

#### 4) 「資本主義の復讐」を復習する

ここで「資本主義」の復習をしよう。「格差社会」だけではない。「市場原理主義」や「カジノ資本主義」という言い方も「敵」を回避する上塗りの修辞である。「抑制」や「節度」を説く公民道徳の時間は終わったと言うべきである。

どうやらこの世界の住人たちには「資本主義」という自分の姿がよく見えならしいのである。血の匂いに涎を垂らす獵犬さながら金儲けの方向は嗅ぎ分けても、「餓鬼」と化して突っ走る自分の姿がどうも分からない。それが追われる者の不安を膨張させる。19世紀も終わる頃にカール・マルクスという髭オヤジが制作した2枚の「合わせ鏡」を手にして、ようやく自分自身の全身像を発見したようだ。

ナルシスの顔が映る前方の鏡と、生傷だらけの背中が浮かぶ後方の鏡。2枚をそれぞれ「文明化の鏡」と「植民地化の鏡」としよう。あるいは「市民の鏡」と「原始蓄積の鏡」でもいい。いずれにせよ未来は後ろのそれにしか映らない。前に映るのは取り繕った自分の表情や遠ざかる後方の光景だけ。その脇に映り込むもう1枚があればこそ、背に取り憑く阿修羅や突き進む暗闇が見えるのである。前の鏡にのめり込めば、自分で視界を遮ってしまう。「貨幣」とは、この二枚の鏡が張り合わされたものである。ただし内側に向けて。だから中に何が封じ込められているかなど、手にした瞬間に忘れられる魔法の貝殻である。

さらに資本主義による「復讐の物語」を復習しよう。

20世紀半ば、地球上の3分の1に及ぶ地域が何らかの形で「非資本主義への道」を掲げるといふ危機に戦慄したシカゴ大学のミルトン・フリードマンは、政府と大企業の援助の下で奇妙な「発明品」をこしらえる。物のみならず、形のないあらゆる社会システムまで市場のセリに賭けるといふ「新自由主義」の基本アイディアを捻り出したのである。社会保障、医療制度、学校教育、郵便網などから始まり、ついには人体臓器や遺伝子にいたるまで、何でも売りに出される経済社会デザインの出発点がこれだった。

しかしシカゴ学派の首領は狐のようにずる賢い。1970～80年代の南米チリを「市場化」の巨大な実験室と化しつつ、そこから軍隊や秘密警察の機構、巨大メディア産業を巧妙に除外する。彼のゼミナールで育った経済エリート集団シカゴ・ボーイズと、アメリカの指導でクーデターを起こした將軍ピノチェトの秘密警察は表裏一体だった。しかし研究室の書籍に埋まるエコノミストたちは、自分の影たちが街や監獄で何をしたか知らないことになっている。フリードマンは、表に金額が刻印されたコインの裏には独裁者の肖像が彫られていることを隠したのである。暴力は意識下に埋め込まれてしまう。裏表を意識して自販機にコインを放り込むような人間はいないからである。いずれ多大な犠牲を払って引き剥がされ、そこに埋められた大量の遺骸が発見されることになるとは、この時まだコインを握りしめた誰もが考えていない。

ところが、フリードマンの鏡にも映らなかったことがある。自らタクトを振るった「市場の全能化」が「貨幣」そのものまで呑み込んでしまったことである（中山智香子『経済ジェノサイド』平凡社、2013）。ほぼ同時に、金本位制によって空想的に支えられてきた各国通貨の取引も、ドルの離脱以降、市場の濁流に放り込まれる。こうして地球上で爆発した多重妄想的な金融膨張が、さらに強大な軍事力に支えられていることは言うまでもない。

企業が物を造り、それを売って稼ぎを挙げる集合体だったのは過去のことである。今や、巨大企業集団の筆頭収益部門は為替相場の賽の目を読む「財務金融」部門になった。足下かつ直近の例を挙げよう。トヨタは2年前の2011年3月期ですでに営業収益全体の77%が金融部門の賜物であり、円安誘導が進んだ

今年2013年の為替差益は3月ひと月だけで1400億円に上る。含み資産益も膨大な伸びを示した。かつては連結決算していたカーローン会社を金融爆発以降に完全統合している。資産運用益は増大し、車の長期ローン金利も上昇、株価は高騰した。ハイブリッドカーは金融の井戸から黄金の水を汲み上げるための「誘い水」である。良質の誘い水であることが第一の条件だが、世界最大の自動車メーカーはとっくにある種の「金融産業」なのである。

金融市場の大洪水は「市場のイデオログ」が設えた防波堤を乗り越えて、惑星表面のすべてを覆い尽くしてしまったといえる。

## 5) 「2周目」の新自由主義

死刑執行人の胸中に「反省」の文字などない。それでも一度目の失敗から貴重な「教訓」を得たのである。「2周目の新自由主義」を走るランナーは「1%」ではない。5%の濃厚な「富裕層」を作り出したらしい。

不可能である。そうと知りつつ煽動する。その一步先に切り立った断崖が待ち受けようと、蜃気楼に向けて引きずり込もうというのが支配層の三代目、孫世代の首相による妄想的な目論見である。彼を「孫a」と呼ぼう。1920年代に擡頭した平民出身の資本家層は戦争で淘汰され、また戦後成長で増血されて、すでに四代目も壮年に達している。この富裕階級による集団的な欲望の表現が孫aによる経済ミクスチュア、人口バブルの大博打なのである。

例えば、2012年秋には、純粋に金融取引に回せる資産、つまり住むための家財や食べるための家計を除外したそれが1億円以上という層は、日本国内で360万人、前年より8.3万人増で総人口の約3%になった、というデータがある（クレディ・スイス銀行「Global Wellness Report」2012年11月より）。そこに付された分析によれば、この10年でそれまでの世襲資産家とは違うIT経営者たちが加わってきたという。この言葉を真に受ければ、1周目を強制終了したかに見えた2007年の世界恐慌は、富裕層にとって何ら打撃ではなかったことになる。それどころか、相続者たちはむろんのこと、生き残ったネオリベ層も確実に太らせたのである。実際には「新興」と称されるIT起業家を、何らかの巨大資本がバックアップしていたケースは少なくない。新旧の境い目は判然としないの



である

クレディ・スイス銀行のレポートは、こうした傾向はアジアを中心に全大陸で見られるとしている。この層が4年後にはさらに5%にまで増大するというのが、そこから分析された将来予測である。むず痒いほどの明るい見通し。世界最大級の金融複合体が発したこのステイトメントは、世界中の富裕階級に投資を誘惑する希望的観測であるとともに、各国の政治経済権力に対しては流れる資本の水路を示し、国内法を通してその方向に誘導する環境整備を促す恫喝的言明でもある。

孫aによる複合経済プランが、こうした帝國的誘導の軌道に乗ったものであることは間違いない。この孫が2周目のスタートを切る3か月前の衆議院選挙直前、金融複合体は「5%の金力と暴力で貧乏人たちを抑え込め」とアピールしたのである。格差増大や財政破綻は危機ではない。「経営資源」としてさらに開発し、大量にストックすべし。この重力が地表で呻くプレカリアートたちの体を押し潰すようにのしかかってくる。

## 6) 8月の暗い空に

ケン・ローチの『天使の分け前』に戻ろう。

発見された1億5000万円の貴重な樽から、超レアなウイスキー・モルトを盗んだ4人の若造たちによる物語は、ロシアの金持ちに売った2本分2800万円を4人平等に分け、主人公が手に入れたワーゲンのバンに赤ん坊や妻を乗せて旅立つところでエンドマークが出る。利き酒職人としての人生が彼を待っているという、微笑ましいハッピーエンドだ。

秘蔵の樽に貯蔵されたモルトは熟成するにしたがって、毎年2%ずつ蒸発する。半世紀でその半分以上が消えてしまうから、残されたモルトは恐ろしく高額になる。樽底に残ったこの酒精を「天使の分け前」という。「パブ」は親父たちの世代の労働者たちが憩う連帯の場所だ。そこで浴びるほど呑んだ安ウイスキーさえ、子である4人は舐めたこともない。そんな場所もとうに消え、酒は贅沢な輸出品になったからだ。その高級酒を奪い返す物語には、職人的な労働者の意地が込められている。

ビートルズ中期の傑作『リヴォルバー』には、取り残される産業資本主義都市リヴァプールの煤けた外気が濃厚に封じ込められている。フーやストーンズも含めて、パブにとぐろを巻いて仕事の愚痴を言う親父たち、その加齢臭に鼻を背ける嫌悪感がブリティッシュ・ビートのエネルギー源だった。その臭いの素こそ黒ビールであり、スコッチの安物である。さらにその子の世代であるバローフィールドの連中にはもうノスタルジーも嫌悪もない。「敵」の富がそこに詰められているだけ。それを盗め！

そこにはどんなルサンチマンも、死の欲動も感じ取れない。

実は盗んだのは4本である。最後の土壇場でドジを踏み、うっかり瓶を2本も割ってしまう。2800万が霧のように吹き飛んだ。カネもアルコールもほんの一瞬で消えてしまうのである。残されたのは仲間たちだけ。———本当の「天使の分け前」はこの連中だぞ！

こういう簡明なメッセージがタイトルには込められている。グラスゴーの雑民連中のように「富をこの手に奪い返せ」、だが「縛られるな」とローチの映画は言う。

この映画がクランクインする直前の2011年8月、ロンドン北方の郊外でアンダークラスの長い暴動が始まる。その基点にはアイルランド系の兄弟がいた。最初に殺されたのはアンチ・ファシズム運動の活動家である弟だった。これに怒ったのがアンティファの先輩であり、今はクラブのドアマン、つまりは用心棒を生業としていた兄である。この兄弟が発火点である。兄は裏表の世界の接点にいた人間である。アンティファとギャングスター、両方の線が麻のように錯綜しながら真夏の乾いた空気に乗って火は燃え広がっていく。

この「8月の暗鬱な空」に垂れ込める重い翳りは、もうローチの映像の外にある。

---

# 「拒否」の〈前〉線情報

この列島の反転へ向かう未成の「拒否」の前線—その予兆としての〈前〉線＝色とりどりの『身体の述語たち』の軌跡／動線を「寄せ木細工」する試み 〈注・1〉

---

2013年4月

フリーター全般労組：反原発企画

「3・11 北へ西へ。語るべきだが語られてこなかったこと」をめぐって

はじめに

あらためて言うまでもなく、「3・11／12」から2年余、この列島では、さまざまな反原発の営み・試みが展開され、多様な動線が描かれてきた。それ以前からの連続性を帯びたものもあるとはいえ、多かれ少なかれ新たなものが多い。

私・たちは、それらを一望したり、俯瞰したりしたいわけでもないし、出来るわけでもない。私・たちも、自分・たちなりの軌跡を描きながら、今後の進み方を見定めようという思いで、それらの動線を聴きわけ、視わけ、かぎわけようとしてきた。それらは、しかし、すべて相互に滑らかに接続しあえるものではなかった。

そうした中で聞こえてきたフリーター全般労組の反原発企画は、きわめて喚起力に満ち、エッジ感にあふれる営みであるように、私・たちには思われた。

残念ながら、参加できなかった私・たちは、そこで「北へ行った(ひとりの)人」として発言した北島教行さん、同じく、「西へ行った(ひとりの)人」として発言した矢部史郎さんの軌跡を可能なかぎりたどり、その動線——いわば、一方での「被曝労働(者)運動」、他方での「ゼロベクレル派運動」とでもいうべきその動線を見きわめ、それ・らが〈交錯〉するありようをつかむことを、きわめて泥くさい手続きになることもかまわず、試みることにした。

その試みは、何よりも私・たち自身のためのものだが、同時に、この列島上の多様な動

線が今後どのように多様な〈前〉線にまで転成するかを考える手がかりをつかもうとする試みである。その意味で、ただ今現在のこの列島における「拒否」の〈前〉線情報のありかを探る企てでもある、と私・たちは考えている。私・たちは、この試みが、フリーター全般労組の企てを損ねることにならないようにと、おそれるばかりである。——なお、いずれ「報告集」が出されるとのことなので、それを待って、さらにそれぞれの動線の再考を試みたい、と思う。

## I . フリーター全般労組：反原発企画

### 「3.11 北へ西へ。語るべきだが語られてこなかったこと」

『主催：フリーター全般労働組合

問題提起：

北島教行(北に向かった人々のひとりとして)

矢部史郎(西に向かった人々のひとりとして)

日時：4月6日(土)17時～20時

場所：渋谷区代々木4-29-4西新宿ミノシマビル2F』

#### I -a. 呼びかけ

『出発点は単純です。

原発事故後、「被ばくを避けて」西へ向かった人々がいます。その一方で、事故を機に北へと向かった人々がいます。さらに言えば、東京近郊で諸活動の取り組みを続けている私たちは、西にも北にも向かわず、ここにとどまり続けています。これらはいずれもその人々にとって真摯な選択でした。その真摯さ故に、原発事故から2年もの間、それぞれの選択についてあまりに語られることがなかったように思います。私たちは「被ばく後、どちらに向かったのか？」そのことを考えてみようと思い立ちました。

西へ向かう者たちは、ガレキをめぐる、食糧をめぐる、生活保守を原理的に推し進める戦略を採用しました。それは「被ばく」が決して災害などではなく、電力の安定供給を人の命よりも優先する政府・電力会社・企業集団の暴力に他ならないことを鋭く指摘します。また、その暴力を明るみに出す、政府や専門家集団に依らない自律的な思考と行動が各地で生み出されていることを評価します。

北へ向かう者たちは、原発立地地域と都市棄民たちの連帯を模索する戦略を採用しました。それは「被ばく」が決して人々が均等に背負っているリスクなどではなく、国内植民地であった東北地方と都市貧民に強く押し付けられた被害であることを鋭く指摘します。政

府が推し進める挙国一致の「震災復興」によって押しつぶされようとしている声に対応する動きが、福島で作られることを評価します。

西へ向かう者たちは、北へ向かった者たちの戦略を加害を隠蔽するものと非難するかもしれません。北へ向かった者たちは、西へ向かった者たちの生活保守が右も左もない挙国一致の「脱原発復興」を支えるものだとして非難するかもしれません。そしてどちらにも向かわずに、このあたりをまごまごしている私たちの愚鈍さや倫理の欠如を嘲笑するかもしれません。さてこの状況をどう考えたらいいか。倫理の次元、戦略の次元、さまざまな問題設定においてともに考えたいと思います。』

## I - b 「引き裂かれて、ざわめく」〈注・2〉

『非正規、不安定、低賃金な仕事をする人たちが、あえて街の言葉で「フリーター」と自称するとはどういうことだろうか？ 正規、安定、高賃金のネガでしかないのか、オレたちは——。これは私自身が正社員たちの姿を見ながら自分の「労働」の「汚染」を問う声である。

そんないかがわしい「俗語」がざわめく中から運動をつくってきたように思える、フリーター全般労働組合らしい集会在4月6日、東京・渋谷の初台事務所で開かれた。2年前の原発震災が起きた直後、「北に向かった一人」福島第一原発での労働に従事した北島教行さんと、「西に向かった一人」小さな一人娘とともに名古屋に移った思想家の矢部史郎さん。対照的な動きを選んだ二人が語り、集まった30人以上がそこからワラワラとざわめき合う集まりである。

西方の人は「命の保守」をとことん突き詰める。問題は「3月12日」だ。炉心が溶けた直後に首都圏全域は完全に汚染された。被曝は国や東電の「戦時暴力」。留まるのは戦争への動員だ。逃げるのがもう闘い。そこから母親たちが自分たちで放射能を測る「新しい科学」が始まる。それはより深い「階級闘争」の兆しだという。オレたちの命はそんなに安いのか。廃炉工程を無人化して、むしろ「収束作業拒否」の運動へ向かうべきだ、とまでいう。

一方、北方の人は危険を承知で原発労働に飛び込んでいく。放射能は平等に降り注がない。いつか現れる症状と引き換えに与えられる日給は6千円～1万円、危険手当もピンハネされる。異様に高い被曝基準を、低くごまかされた毎日の線量でさえ何年かで満たしてしまう。原発地帯は国内の「植民地」だ。「障がい児が生まれる」「福島の米を食べるな」と叫ぶのは差別そのもの。オレたちは加害者だ。貧困者と福島、二つの植民地を見殺しにできっこない。

二人はいずれ劣らぬ「衝動の人」である。居ても立ってもいられない。韋駄天の如く名古屋と福島にすっ飛んでいく。そして「言葉の人」。この2年、双方から喧しいメッセージが連射されたのである。』

## I の〈注〉

〈注・1〉 『表現の自由は誰しものがすでに持っています。生まれたての赤ちゃんですら、おぎゃつと自己を表現するわけですから。重要なのは、むしろ“印象の自由”なのです。(J=R・ゴダール)』

『「自由」をめぐる問題としてゴダールが expression ではなく——impression を強調するとき、そこでは少なくとも二つの異なることがらが問われている。』

『第一に、引用・複製・コピーとその使用をめぐる問題、すなわち、所謂『知財』なるものの共有性をめぐる問題がある。英語同様、仏語でもimpression には『印刷』の意がある。『印象の自由』は『印刷の自由』のことでもあるわけだ。『表現』については、誰しものが赤ちゃんの時からその自由を行使している。したがって真の問題は、他人の発するそうした様々な表現を自由に印刷して使うことであり、それを『正義』の振る舞いとして実践することなのだ。』

『しかしゴダールのいう『印象の自由』はそれだけにとどまらない。同時に、他人の発するあらゆる表現に対して印象を創りだすこと、すべての事象について介入することもまた、『印象の自由』の重要な内実なのだ。』

(広瀬純「印象の自由／ゴダール／ボッティチェリ」(「蜂起とともに愛がはじまる」河出書房新社2012年))

〈注・2〉 平井玄「討論集会『3・11 北へ西へ。語るべきだが語られてこなかったこと』をめぐる随想」(「週刊金曜日」940号 2013年4月19日)

## Ⅱ. 矢部史郎さん／北島教行さんの軌跡

### Ⅱ-a. 矢部史郎さん——その軌跡:

2011年3月11／12日～2013年4月

年	(「原子力都市と海賊」(矢部史郎ブログ) <a href="http://piratecom.blogspot.jp/">http://piratecom.blogspot.jp/</a> などから)
2011	3/12 インジンを購入 3/13 子どもを連れて愛知へ〈注・1〉 3/14 「全ての友人への呼びかけ」 3/23 「首都圏大衆の被害と加害」〈注・2〉 3/25 「原子力国体からのエクソダス」 3/27 愛知への転居を決める 3/29 富山へ「もう一つのメルトダウンへ」〈注・3〉 4/27 東京へ 5/5 名古屋へもどる 「三つの課題」〈注・4〉 5/11 「もう『原子力災害』じゃない」〈注・5〉 5/23 放射能測定器を入手 5/30 東京砂場プロジェクト企画:ワークショップ〈注・6〉 6/15 同上:茨城県からはじめて、首都圏各地で実施 以下 6/17, 21, 23, 24, 25, 27, 28, 7/4, 5, 6, 10, 12, 13 7/8 「王道科学と遊牧科学」〈注・7〉 7/15 砂場プロジェクト本格始動 10/26 「福島を再生させるな／できないし」 12/12 末～2012/1 始 「3.12の思想」をめぐってロングインタビューを受ける
2012	2/12 「3・12の思想」校了—3月刊〈注・8〉 3/15, 16, 28 池上善彦のインタビューを受ける 4/12 同上 5/21 「ゼロベクレル派宣言」校了—6月刊〈注・9〉 7/1 「被曝不平等論」(「現代思想」2012年7月号) 12/14 第1回 被曝社会研究会〈注・10〉
2013	2/13 「被曝社会年報」刊〈注・11〉 3/2 「日本の主婦について」 3/7 「ノート被曝労働」〈注・12〉 3/16 被曝社会研究会〈注・13〉 4/6 フリーター全般労組:反原発企画「3.11北へ西へ。語るべきだが語られてこなかったこと」へ参加

## Ⅱ - a. の〈注〉

### 〈注・1〉 子どもを連れて愛知へ（「原子力と海賊」）

『12日朝の段階で、娘を愛知の実家に避難させることを決めた。イソジンに入っているヨウ素は1 ml 中7 mg。一日に大人14 ml、子供7 mlを飲む計算だ。しかしヨウ素なんて大量に飲むものではないし、イソジンは内服用ではない。飲ませたくない。愛知の母の元に娘を連れて行った。幸い、新幹線は順調に運行していたが、名古屋に到着した時点で、福島の状況は予想以上に悪くなっていた。実家に娘を預けたら、自分は東京に戻るつもりでいたが、やめた。

福島の状況は、相当まずい。テレビでは「冷静に冷静に」と言っているが、冷静にじっとして被曝を待てということか。いまもっとも冷静な対応は、粛々と移動を始めることだ。』

子どもを連れての東京からの「脱出」について、再三ふれられている。——「東京を離れて」（「現代思想」2011年5月号）／「はじめに」（「3・12の思想」2012年以文社）／「あとがき」（「放射能を食えというならそんな社会はいらない、ゼロベクレル派宣言」2012年新評論）

### 〈注・2〉 首都圏大衆の被害と加害（「原子力と海賊」）

『数日前、平井玄さんからメールを頂いた。

そこで予見されているのは、「この都市で働かされる私たちは、「使い棄て原発日雇い労働者」に確実に近づいていく」という指摘だった。

私がここに批判的に補足したいのは、原発の被曝労働者はただ被曝をしているというだけでなく、放射線の被害を過小評価する洗脳教育を受けることで、自分だけでなく同僚を被曝させ、地域住民に原子力の脅威を与える存在であるということだ。

被曝労働者（労働者というよりは人材）という存在は、ただ被害者であるだけでなく、加害者・共犯者でもある。

いま東京の労働者が自らに問わなければならないのは、被害の問題ではなく、加害・共犯の問題だ。自分がいま選択すること／しないこと、意識すること／しないことが、誰を脅威にさらしているのか、落ち着いて考えることだ。

いま東京のテレビは、放射性物質の被害を過小評価し、大丈夫大丈夫と呼びかけあうことで、女性と子供を脅威にさらしている。首都圏4千万人の壮大なネグレクト（育児放棄）が始まっている。本当なら、児童の集団疎開を提起・実践するとか、教員が「教え子を被曝さ



せない」と訴えてもよい時期だ。

日本民衆・大衆はかつて、戦争に勝てないことをうすうすわかっているながら、若者を特攻させて殺したバカ民族である。バカ民族の末裔のグズどもが、いまなにをできるか、私は悲観的だが悲観ばかりもしてられない。』

## 〈注・3〉 もう一つのメルトダウンに向けて（「原子力と海賊」）

『昨日、富山市の「生・労働・運動ネット」のセミナーに参加して話してきた。

現在の状況を説明し確認するうちに、自分がやろうとしていることが少し整理できた。

要約すれば、今次の原子力災害による首都圏の被災は、日本列島全体を揺るがす事態になるだろうということだ。

いま放射性物質の拡散をうけて、東京という都市の位置づけは揺らいでいる。東京は被災した東北地方を救援する拠点なのか、それとも東京自身が被災地なのか、その評価をめぐって葛藤がくりひろげられている。政府は「首都圏は安全」という発表を繰り返し、企業は労働者を拘束して事業を継続する。他方、妊婦や乳幼児を連れた母親たちは、西日本に向かって大移動を始めた。若年労働者からは、ゼネラルストライキの声があがりはじめた。いま首都圏では、ひとつの家族が退避するかしないか、会社に留まるか否かをめぐって、引き裂かれている。これを福島第一の核燃料に喩えれば、これまで「絶対に安全」だと信じられていた企業社会／核家族の被覆管が、じわじわと破れはじめているのだ。政府がいくら統制を試みても、この動きは止まらない。首都圏3800万人のうち、その1%が動いたとして38万人、5%で190万人だ。資本主義の被覆管を溶かし漏出していく女と子供、若年労働者（そして外国人）は、別の街に堆積し、新たな運動の連鎖反応を始めるだろう。

もうひとつのメルトダウン、企業社会から分離・漏出する「人口」のメルトダウンが始まる。この新しい人口の波に洗われた地方都市は、かつてあった「日本」であり続けることはできない。首都圏を離れた巨大な人口と知性、潜勢力が、日本列島全体を焼き焦がしていく。

楽しみだ。やる気が出てきた。』

## 〈注・4〉 3つの課題（「原子力と海賊」）

『名古屋に戻ったが・・・。

東京は緊張感が高く、有意義な議論ができた。

これから3つの行動をすすめていこうと思う。

1、「ニュー新宿」の建設

東京脱出の促進。東京の人々の地方都市への移住を促すために、名古屋で〈基地〉をつくる。東京以外の場所に「ニュー新宿」や「ニュー高円寺」をつくる。

## 2、東京砂場プロジェクト

放射線の計測と公開。関東の土壤汚染マップをつくる。後になって被害をうやむやにされないために、汚染問題を数字で残しておく。裁判や行政交渉で争える数字を確保する。

## 3、『NO NUKES LEXICON』

『VOL Lexicon』に続く第二弾として、反原子力用語集をつくる。領土、人口、尺度、海、生政治、都市、新自由主義、認知資本主義、etc。人文系のみなさんがテンションあがってるところで、総力で用語集をつくる。原子力時代に応答する現代思想が大爆発。御用学者を一掃。

以上、3つの行動計画を同時並行で進めます。「ああ俺はこれだな」と思いあたるふしのある人は、どうぞよろしく。』

## 〈注・5〉 もう「原子力災害」じゃない

『これまで東電・福島第一の問題を「原子力災害」と書いてきたが、もうやめた。これは災害でも事故でもなく、原子力公害事件だ。

たしかに問題の発端は地震だったかもしれない。しかし経産省と東京電力は「地震があっても大丈夫」と嘘をついてきたのだ。今回の地震が想定を超える規模であったかどうかなんて、関係ない。度重なる指摘に対して「安全です」と言ってきた事実は大きい。この事件は、自らの利益のために社会を欺き、人を殺し、財産を奪い、精神的苦痛を与えた犯罪だ。

下手人は多い。被害を被った者も多い。失ったものは想像を絶するほど大きい。

おそらく日本の司法制度ではまかないきれないほどの審判が待ち受けている。方法の評価はともかく、無数の人民裁判が始まり、流血を伴う断罪がなされるだろう。

我々が唱えてきた人権概念など意に介さないような、強烈な怒りをもったアナキストが生まれる。到来する新しい世代にどのように応えるのか、私も本腰をいれなきゃだ。』

## 〈注・6〉 6月2日、渋谷でワークショップ&Ust中継（「原子力と海賊」）

『誰でもできる！ 素人による素人のための放射線計測講座

講師 Bruno Chareyron ブルーノ・シャレイロンさん

## CRIIRAD (クリラッド＝市民放射能測定ラボ) ディレクター

ただちに健康に影響をおよぼすものではない——この3ヶ月間、このよくわからないフレーズは、私達をただただ不安にさせるばかりでした。

これまで安全だと言われてきたこと。「専門家の言うこと」だから、黙って従ってきたこと。絶対に間違いないと、されてきたこと。そうしたこれまでの「常識」が、根拠のない思い込みにすぎなかったということが今、明らかになりつつあります。

私達の生きる環境を、これ以上誰かに委ねるわけにはいきません。政府が動かないのであれば、自分達で放射線を計測するしかない。そう感じている「素人」のための、実践放射線測定講座です。

子ども達の未来は、私達の手にかかっています。さあみなさん、一緒に街へ出ましょう！

### レクチャー

- ・放射能とは？ なぜ人間にダメージを与えるのか？
- ・外部被曝とは？
- ・内部被曝とは？
- ・東京での福島第一原発の短期、長期的影響とは？
- ・土壌汚染と砂場汚染の計測方法とは？
- ・食品汚染の測定方法とは？
- ・「専門家」は何をごまかしているか
- ・政府・自治体に防護措置をとらせるにはどうするか
- ・素人にできること、素人にしかできないこと

### ワークショップ

- ・数種類の測定器による屋外での放射能測定(空間線量率)
  - ・ガンマ・スペクトロメーターによる土壌汚染の測定
  - ・「専門家」につっこまれないための測定方法
- ※実際の計測器を使って測定を行います。

日時 6月2日(木)13時30分～17時

場所 神宮前隠田区民会館 一階集会室

住所:神宮前 6-31-5

電話: 03-3407-1807

交通: JR 原宿 6分

交通: 東京メトロ千代田線 明治神宮前駅 徒歩2分

交通: 都バス[池 86][早 81]系統「表参道」 2分

申込み不要・参加費無料

主催: 東京砂場プロジェクト(TSP)

tokyosunaba@gmail.com

協力:測定器 47 台プロジェクト

HP:<http://www.pj47.net/>

Blog:<http://sokuteiki.exblog.jp/>

※ CRIIRAD とは

Commission de Recherche et d'Information Indépendantes sur la Radioactivité

(放射能に関する調査および情報提供の独立委員会)の略称です。

CRIIRAD は 1986 年に設立されました。

チェルノブイリ原発事故の際、フランスの公的機関は、距離の遠さゆえに、放射能雲はフランスにまったく到達しないと発表しました。そのため、ほとんどの人が何も知らずに、放射性物質にまみれた牛乳、チーズ、生野菜を消費してしまいました。チェルノブイリ事故が環境と人間に及ぼす影響についての、こうした思慮の浅さを反省し、CRIIRAD が設立されました。

※東京砂場プロジェクト( TSP )は、首都圏に存在するすべての児童公園の砂場で放射線量を調査するプロジェクトです。放射性物質の降下量は、場所によってばらばらです。TSP はこどもが遊ぶ砂場に限定し調査方法を統一することで、首都圏全域の線量マップをつくる試みです。現在は便宜的に「首都圏」と言っていますが、栃木・群馬・福島・宮城・その他の東北関東地域も対象になります。

追記

上京していくつかの砂場を試験的に計測した。

東京都北区( JR 東十条駅) 富士神社の砂場で  $0.29 \mu \text{sv/h}$

千葉県市川市(東西線 原木中山駅) 一丁目公園で  $0.47 \mu \text{sv/h}$

興味深いのは、原木中山駅の入口付近の線量は  $0.08 \mu \text{sv/h}$  であったということ。

これが何を意味するかというと、一般的な計測地点で  $0.08$ 、まあ正常値より高いけどがまんできないことはないかなと受け止められているときに、そこから数十メートル先の公園の砂場では、歩き始めたばかりの幼児が6倍の濃度の放射線にさらされているということである。恐ろしいのは、駅前の数値にひとまず安心して、砂場の調査が忘れられてしまうことだ。

先日、日本共産党東京都議団は詳細な放射線測定マップを発表したが、この数値は実際には目安程度にもならない。子供の生活空間に視点を定めて計測していかなければ、高濃度線量の砂場が放置されるという事態になりかねない。日本共産党には今後がんばってほしいところだが、まあ、山あり谷ありの作業になるだろう。大変だ。』

## 〈注・7〉 王道科学と遊牧科学（「原子力と海賊」）

『東京電力・福島第一原発の放射能公害事件は、史上類のない巨大な規模でわれわれの生活環境を書き換えている。

この新たな環境のなかで、政府が招聘する「専門家」は、しだいに疑わしい職業と見なされるようになっていく。原子力の「専門家」、財政の「専門家」、医療の「専門家」、ボランティアの「専門家」は、一時的に耳目を集めつつ、その後、人々の切実な関心から外れていくだろう。そうして、昨日まで放射線のほの字も知らなかった素人たちが、前人未到の公衆衛生学を切り拓いていく。政府が依拠してきた王道科学は信を失い、無数の遊牧科学が生起していくのだ。

近代医療の形成を研究するフェミニストは、19世紀アメリカの公衆衛生運動をふりかえり、次のように書いている。

フェミニスト研究者は公衆衛生運動についてもっと多くの発見をしなければならない。今日の女性運動の見方では、これは多分女性参政権運動よりも関係が深い。運動に関して、我々が最も興味を引かれる部分は、(1)それが階級闘争とフェミニスト闘争を代表していたこと。今日、ある方面では、フェミニスト問題を単に中産階級の関心事であるとして片付けることが流行しているが、公衆衛生運動には、フェミニストと労働階級のエネルギーの合流が見られる。これは公衆衛生運動が当然あらゆる種類の反対者を引き付けたためだろうか？ あるいはより深いところで目的が一致していたためだろうか？

(2)公衆衛生運動は単によりよい医療を求める運動ではなく、根本的に異質の健康管理を求める運動である。それは当時支配的だった医学上の定説、技術、理論に対する実質的な挑戦だった。今日我々は医療の組織化の面に批評を限定したり、医学の科学的基盤は論争の余地がないと仮定しがちである。我々も医療という「科学」を批評的に研究する能力を養わなければならない——少なくともそれが女性とかかわりがあるかぎり。

（『魔女・産婆・看護婦——女性医療家の歴史』

B・エーレンライク／D・イングリッシュ著 長瀬久子訳）

いま東京で始まっているのは、科学とは何かを審判し再定義する試みだ。

もっと深い地層が動き出している。』

## 〈注・8〉 「3・12の思想」校了—3月刊

### I 「はじまりとしての3・12」

『（前略）

今回私が話したいと思っているのは「3・11」の自然災害ではありません。その翌日「3・12」から始まる放射能公害事件です。大地震、大津波、原発爆発、放射能拡散という

一連の出来事を、人々は「3・11」という日付で呼んでいるわけですが、私は問題をよりはっきりと腑分けするために、「3・11」ではなく「3・12」について話したいと思います。「3・12」事件はいまも終わっていないし、われわれが死んだ後もずっと継続し続ける問題だからです。

(中略)

最大の問題は首都圏です。

「3・12」事件によって、首都圏という巨大都市は、位置づけが大きく変わりました。もしも「3・12」だけが問題なのであれば、首都圏の人口と生産力は被災地救援の最大の主体になったでしょう。しかし「3・12」の放射能公害事件によって、首都圏は救援の主体ではなく対象になってしまった。東北救援どころではない、誰か首都圏を救援してくれということになってしまった。この巨大な人口はあまりにも大きな荷物になっていて、問題解決を遅らせる一因になっています。

(中略)

「3・12」事件によって、東北・関東からたくさんの住民が流出しました。これがどれだけの規模になるのか私にはよくわかっていないのですが、愛知県や岐阜県にも1000人から2000人の規模で避難民が生活しています。

これは難民です。国内に数万人規模の難民がいるわけです。

(中略)

こうした人たちの存在は、まったく見えなくされています。難民の存在は見えない。それよりもっとよく見えるものがあって、崩壊した4号機とか、膨大なガレキとか、そういう視覚に訴えるスペクタクルが全面に出ているあいだ、難民や、その生活というものは、見えなくされるでしょう。

しかし、今後の社会の動き「3・12」後の見通しを考えていくとき、この人たちこそが重要な主体になってくる。

(中略)

国内難民となった人の多くは、子供をもつ母親たちです。私は、名古屋に移住してから、食品や土壌の放射能を測定する「市民測定所運動」に加わったのですが(この運動については後で詳しく述べます)、その測定運動で出会うのが、子供をもつ主婦たちです。

(中略)

彼女たちは知っているんですよ。自分たちがマイナーな存在であることを。

自分たちがどんな正しいことを言っても、だれもまともに相手にはしてもらえない。頭のおかしい、それこそ「パニック」を起こした人間としか扱われないだろうと。

男性社会や企業社会のメジャー(ものさし)から、あらかじめ排除されたものとして、はじめからメジャーの外にあるということを知っている。そして、自分たちが主張していたことの正しさが後になって証明されても、誰にも感謝されず、誰からも謝罪されないというこ

とまで知っている。

さらに、メジャーがとりこぼしたものによって今後引き起こされる、さまざまな事態の尻ぬぐいをさせられるのが自分たちだということまで、知っている。スーパーでの食品を吟味することから、具合の悪い子供を病院へ連れて行くことまで、結局自分たちにツケがまわってくることを、経験的に理解しているのです。

(中略)

歴史は繰り返すというか、よく思い出してみれば、50年代の原水爆実験反対運動も、チェルノブイリ事件に発する80年代後半の反原発運動も、その中核を担ったのは女性たちでした。反核運動というのはずっと一貫して、素人の、女の、運動だったんです。いまそれがかつてない規模で始まった。

「3・12」のインパクトはここにあると思います。

まず大規模な離散が始まり、女性たちを収容していた「社会」が、メルトスルーしてしまう。もう誰も彼女たちを統制することはできない。そして、漏出していく分子はてんでにチェーンリアクションを起こして、潜在する知性を解放していく。

これは日本の歴史上かつてない、ラディカルなデモクラシーが始まるということです。

このデモクラシーは、議会政治には集約されない。これまであった左翼の議会主義国民運動は、根本的に不能になるでしょう。80年代の反原発運動は土井社会党を生み出したわけですが、もう一度そうしたコースを辿って、「3・12」がなんらかの議会政党勢力として表現されることはないと思います。

もっとケタ違いの変化が、もっと見えないしかたで進行する。「日本文化」とか「日本人らしさ」とか「日本社会の慣行」というものが根元から変動するような事態です。言ってみれば、われわれが日本人ではない者になる、ということです。

(中略)

西日本の人には理解しにくいことかもしれませんが、東北・関東の住民にとって「3・12」とは、政府が「国民の保護」を放棄した日です。

われわれは政府の保護を期待できない外国人のように、海外情報を読み漁り、また、外国の政府を分析するように、日本政府の動きを分析しているんです。こうした事が、たとえば沖縄県で起きていたら、事態はこれほど緊迫していなかったでしょう。問題は「日本」のまさに中心である首都圏で起きたということです。政府を疑うことのなかった「国民」が、まさに政府に裏切られ、外国人化していったのです。

(中略)

「3・12」を考えると、私がある意味でとても解放的な気分になっているとすれば、それは、「日本人ではない者になる」ということの肯定的な力を感じているからだ、と思います。この力が、あの日私の背中を押して、被曝被害から護ってくれたのです。

フェリックス・ガタリの「三つのエコロジー」に話を戻しましょう。ガタリは三つの作用領域があるんだと言っています。「環境のエコロジー」、「社会諸関係のエコロジー」、そし

て「人間的主観性のエコロジー」です。今回の「3・12」事件はおそろしい破壊をもたらしたわけですが、そのなかで唯一希望を持てるものがあるとするれば、それはわれわれの主観性が大きく書き換えられようとしているということです。

私のような人間が、公園の砂場を測定したり、食品を刻んで測定したりしているんですよ。飯も食わないでタバコばかり吸っていて、「衛生」概念を正面から批判していた私が、あの日以来ずっと「公衆衛生」を考え実践しているんです。タバコはやめてませんけどね。まったく自分でも驚きです。

これは放射線防護の必要から強いられたものなのですが、しかしこの防護のプロセスは、ただ面倒な負担が増えたということにとどまらないポテンシャルを含んでいると思います。いまわれわれのなかで「主観性のエコロジー」が大きく変動しているんです。

(後略)』

## II 「放射能測定という運動」

『私が現在かかわってる活動は二つあります。

まず、東京を中心とした関東の公園の砂場の放射線量の記録を残すための「東京砂場プロジェクト」(<http://sunaba-project.com/>)があります。

これは爆発から3ヶ月後の2011年6月に呼びかけて、活動を始めました。5月末から7月まで、何度か関東へ足を運んでこの計測活動をしていました。

次に、こちらは名古屋で始まった市民測定所運動で、「未来につなげる・東海ネット・市民放射能測定センター」(<http://tokainet.wordpress.com/>)というところに、測定ボランティアとして加わっています。ここではNaIシンチレーションスペクトロメーター1台を設置して、土壌・水・食品の核種分析をしています。

(中略)

計測の問題は、サンプル採取の問題です。これは食品の測定にも共通する問題だと思えますが、どのようにサンプルを採取するかで、結果の数値が大きく左右されてしまう。

(中略)

それは、「どこが危険な場所なのか」を考えるのではなく、「誰が危険にさらされているのか」を考えるということです。「どこが」ではなく「誰が」ということに、問題設定を変えたんです。

(中略)

計測をはじめたころは、砂場のない公園は「砂場なし」と書いて処理してきたんですが、そういう例があまりにも多いので、最後はしかたなく地面の線量を測っていきました。でもそれでいいのか。わからない。

(中略)



「複雑系」の空間ということに絡めて言えば、この空間に向かうさまざまな市民計測活動というのは、つねに変化して、生成していく、オートポイエティック(自己創造的)な性格を持つのだと思います。

これは実践的な意味で、非常に重要なことです。

このことは従来から反原発運動をやってきた人々に向けて言おうと思うのですが、ここはキモの部分です。

ざっくりした言いかたをしますが、いまさまざまな計測活動・測定所活動の現場では、オートポイエーシスのプロセスが始まっています。何もかも手探りだからです。こうした新しい動きに、従来からある反原発運動が接続していくためには、このオートポイエーシスのプロセスを理解し、踏み込んでいかなくてはならない。

構築された「運動」や「団体」というのはいわばオートノミーですから、これまでの手持ちの材料だけで何かをしようとするわけですが、それは「3・12」後の状況に対しては無効です。問題設定が根本的に書き換わっていくプロセスが始まったからです。

だからいま必要なのは、「運動」のオートノミーをいったん解除して、新しい諸条件に向かって開いていって、オートポイエーシスのプロセスに巻き込まれることなのです。「運動を」再生産するのではなく、「運動の運動性を」再生産する、ということです。

(中略)』

### Ⅲ 「3・12の思想」

『 (前略)

東北・関東には、いまでも決して看過できない量の放射性物質が降り注いでいます。われわれは、原子力の時代がもたらした管理社会において、さらに飛散した放射能までを管理し続けなければならない、という重荷を負うことになりました。これはしんどいと言えば相当しんどい事実です。

だからこそ、今後何十年、いや何百年と続く放射能管理を、原子力社会特有の「嘘と秘密」の論理で処理させてはならないのです。これはわれわれがいかなる新しい集団性を創造しうるかということにもかかわっています。

(中略)

高い知性を備えた母親たちと父親たちは、原子力国家とそのスペクタクルをしっかりと対象化しました。人々の関心と無関心が作戦対象になつてしまった戦争、社会学化した闘争を、正確に把握したのです。

(中略)

都市住民のハビトゥスとは、「ハビトゥスのないハビトゥス」、つまり、分業や性別分業に束縛されない、柔軟性、便宜主義、機会主義です。テレビや新聞がどんなに国民的号令をかけても、彼らはもう相手にしません。「専門家」の権威も信じていないし、性別に絡

めた道徳的な誹謗中傷などまったく怖れません。それは、都市が教育し都市住民が獲得した、ハビトゥスであり知性なのです。

こうした人々が、これからの戦争状態のなかで主導的役割を果たす前衛になるでしょう。彼女・彼らは粛々と放射能を測定し、被害の実態を告発し、避難民となり、避難民と結合し集団化していくのです。

(中略)

人がなぜ病気になるのかわからない時代。放射線公衆衛生学に関して、いま私たちはその段階にいるのです。私たちのような実践が魔術的な相貌を帯びるのはある意味あたりまえなことで、いま私たちは、魔術と科学が渾然としていた時代にひきもどされているわけです。

(中略)

今後、放射線被曝をめぐる医学は、科学と魔術、宮廷医の系譜と魔女の系譜とのあいだで激しく揺れ動いていく、そういう抗争の場になるでしょう。

(中略)

宮廷医は、自分が正当な科学者であると自認していました。そして、魔女たちがもっていたハーブや薬学の知識を排除して、患者に水銀を飲ませることをした。そういうことを繰り返してはいけません。魔術的なものを退けることが、科学的な態度だという考えは、間違いなんです。誰かを非科学的だと論難すれば、自分が科学の側にたてると思は、それ自体が迷信なのです。

いま科学に忠実に、科学的であろうとする人は、積極的に、魔術のなかに入っていきはざです。魔術を忌避するのではなくて、魔術的实践のなかで、さまざまな知見を蓄積していく。それが「3・12」後の科学なんです。科学であり、魔術です。必要なのは魔女を怖れることではなくて、魔女になることです。

(中略)

一方で、こういうことも考えられます。「3・12」以後、「数字」による証明の位相に変化が起りはじめています。これまでであれば、行政の側が「統計」という名目(トリック)を最大限利用するかたちで数字を次々に提示し、その数字の「専門性」において民間からの問題提起を煙に巻くという手法が主流でした。

しかし、いま起きているのはそれと逆のことで、下から提示される放射線量などの数字に対して、権力側が「いや、その数字には解釈の仕方がいろいろあって……」と、これまでならありえなかったような態度を取るわけです。

今後彼らはそれこそ、魔術というか妄言と何も変わらない「言い逃れ」をしようとするでしょう。それに対して、私たちはあえて数値を持ち出して、闘っていくこととなります。

(中略)

この闘いは行政側のごまかし＝魔術に対する、市民の側からの数字＝科学の闘いである、という側面を指摘できると思います。

(中略)

権力側が魔術的な「ごまかし」を今後武器として用いてくるなかで、私たちは「魔術の唯物論」というような態度をもって闘う必要があるということです。

(後略)』

## 〈注・9〉 「ゼロベクレル派宣言」校了—6月刊

### 1 放射能を食えという社会

『(前略)

いま、全国の親たちががんばっているのも、その核心に「私たちにツケをまわすな」ということがある。東電による公害事件によって、家事労働をいっそう増やされることへの抵抗であり、叛乱です。

がれきや給食の問題で奮闘している主婦たちをさして、母性主義イデオロギーだなどといって非難する向きもありますが、まったく見当ちがいです。そういうことをいう人は、子どもが被曝の脅威にさらされているとき、それを気にするのは当然母親であるべきだと考えている。それこそが母性主義イデオロギーでしょう。

全国で主婦をふくめ女性たちが懸命に動いているのは、生活というものはだれかに丸投げすることができないことを、彼女たちがよく知っているからです。最終的にそのツケがまわってくるのは自分たちだろうと予感しているし、もしそのときになれば、その責任を甘んじて引き受ける覚悟ももっている。でも同時に、国と東電のせいでそんなことを引き受けてたまるか、ふざけるな、という強い怒りも抱いている。これは母性主義でも何でもない、むしろ母性主義イデオロギーを破壊する思想だと思います。

——そして、退避からちょうど1年後に、矢部さんは「3・12の思想」(以文社)という本を出版されました。退避の日付が、そのまま思想の言葉になっているわけですね。

あの本は、退避後、私がかかわってきた放射線防護活動の意義と可能性をまとめたものです。私は愛知県内に居を定めたあと、2011年の5月から7月にかけては、子どもたちの遊び場である関東各地の公園の放射線量を計測してまわりました。そして9月以降は、おもに食品と土壌の核種分析にたずさわっています。

『3・12の思想』の出版動機の根底にあったのは、今回の出来事を、絶対に「想定外の震災による不測の事故」などといってごまかせせないぞ、「東京電力放射能公害事件」として明確に立ち上がらせるぞ、という決意です。

(中略)

だから、「3・12」を機に、「公害」や「リスク」の意味を拡充しなければならないと思っています。私は、「東京電力放射能公害事件」をけっして許さないことで、「公害」や「リスク」の概念が、資本主義を転覆する装置へと反転するはずだと考えているんです。

(中略)

つまり、この事態を公害事件として名指すべきだという思想と、地震と津波の初発の衝撃、そして爆発の驚愕からわれに返ったその翌日、「3・12」からが、国家や末期資本主義と対峙する社会戦争の本番なのだという覚悟を、タイトルにこめたかった。

(中略)

まさしく、現在各地で展開しているさまざまな活動は、計測と防護の「運動」というべきものですね。そしてそれは、従来の「運動」と、ある一点で決定的に異なっている。自然発生的、自律的であるだけでなく、自己創出的な性質を持っているのです。思想も方法も、なにもかも手探りのまま、「運動の運動性」が不断に編み直されていっている。

(中略)

だから、われわれは生命と生活をまもるため、そして、犯罪者たちをとりのがさないために、自ら計測と防護にとりくまなければならなかった。

(中略)

そのとき、見えない放射能の力を何とかしてとらえるために、私たちは「ベクレル」の単位を使い、それは専門家と国家と資本が依拠する「シーベルト」の思想への抵抗でもある。

その意味で、いま運動における「資本／労働」「国家／民衆」の対立の焦点は、「ゼロベクレル派か否か」にあたっている、という言い方もできるのではないかと考えています。

(中略)

表面上はともかく、心の底をのぞけば、じつは日本中が「ゼロベクレル派」と「力いっばい気にしない派」にまっぴたつに分かれているのではないか。日常のあらゆるところで、「ベクレル社会戦争」が起きているといってもいい。

何より、計測運動が退避にダイレクトに結びついていかないことに、私はいらだちを感じています。復興イデオロギーがそのじゃまをしている。「絆」や「食べて応援」のキャンペーンにはばまれて、退避がすすまないということに、私は本当に腹を立てています。

(中略)

放射能拡散の恐ろしい現実を「地震と津波からの復興」のイメージでおおいかくしている。だから「放射能を食らえという社会」が出現してしまっているわけです。

レベル 7 とは、本来徹底して脱出を要する事態です。収束、再生、復興を行うべきものではありません。

(中略)

少なくとも、福島を中心とする高線量被曝地帯に関しては、「除染→帰村」は論外としても、補償をうんぬんするより先に退避すべきだろう、と。生命や再生産に甚大なリスクを負ってしまってから、補償にむけて闘うというのは後手にまわった戦法です。まずは逃げるべきだろう、なぜ逃げないのか、とどうしても思ってしまう。

さらに、首都圏を含めた低線量被曝地帯は、補償などほぼ確実に無理ですから、む

しろ福島以上に、自衛の手段として退避・移住が必要です。

(中略)

レベル7の現況は徹頭徹尾、社会的被曝なのに、そのことが本当には直視されていない気がするんです。それはなぜなのか。

「市民社会」というのは、国家に対峙するもののはずでしょう。国家が「避難の必要はない」と言えば、逆にきわめて危険だと判断し、ただちに退避するのが「市民社会の厚み」というものかと思っていました。でもそうではなかった。

(中略)

事故後、迷わず退避できたのは、私もふくめて「はぐれ者」でした。国家からも社会からもはみだした人間たちです。

一気にではないにせよ、これから徐々に、あらゆる「社会」が解除されて、人々は分子レベルに解体していくと思います。「生への執着」と自己保存の原理が前景化することで、親子、夫婦、家族からご近所、地域、会社、業界まで、あらゆる「社会」が解体していく。だれもが他人になるし、難民化する。

退避・移住した人たちと話していると、かれらはすでに常民をやめて「外国人」になっているから、なにしろ強いんです。知性の面だけでなく、人間としての力が強いし、自己保存を肯定する意志と力に満ちている。インチキな言説に絶対にだまされない強さがある。避難先にはもう、「社会」が解体した後の「難民たちの世界」のイメージが、きざしとしてあらわれていると思います。

(中略)』

## 2 ゼロベクレル派宣言

『2012年5月、「ゼロ稼働の日」がまぢかに迫っています。

(中略)

しかし、「ゼロの日」以降は、問題の照準は、防護と廃炉処理を含めた「放射能との戦争」、つまり「レベル7における闘い」に、全面的に移行します。

この戦争状態の中でわれわれは、1ベクレルでも余計にとりこまないことをめざす「ベクレル主義」をつらぬかなければならない。

(中略)

私たちは、目に見えない放射能の力をダイレクトにとらえたい。そして、「人体に与える影響」を自分たちで考えて、決めたい。だから、水、食品、土壌に含まれる放射能の「強さ」を表すベクレルで考えたいのです。

(中略)

1986年のチェルノブイリ事故のあと、西ドイツでも日本と同じように、母親たちの放射能防護運動が自然発生的にたちあがりしました。「緑の党」を中心としたドイツの反原発運

動のなかで、このように放射能に対する不安、とくに子どもをもつ親の不安を運動の中心にすえる人々は少数で、運動の内部ですら、「ベクレル派」という蔑称で呼ばれていました。

(中略)

そして、ベクレル派はけっして温厚な「日常生活者」ではありませんでした。自己保存に裏打ちされた、野性的な存在でした。だから政治派の批判などまったく意に介さず、防護活動をつづけた。

私たちはドイツ・ベクレル派と思いを同じくしつつ、ここに「フクシマ・ゼロベクレル派」を宣言したいと思います。

(中略)

「がまんできる量」などじつはだれにもわからないし、ましてや基準値などというものはあやしくなってくる。現在の戦争状態のもとで、健康被害を最も重視した国際基準の「1年1ミリ」が、私たちが準拠すべき唯一の「がまん量」とみなされています。しかしこれもじつは内部被曝や低線量被曝、晩発傷害の十分なデータがないまま、危険性を最大限に見積もって合意にいたった「暫定値」にすぎないのです。

(中略)』

### 3 「がれき民主主義」の勃興

——この1年、矢部さんが定義するところの「レベル7」の状況をめぐって、計測や退避の運動が立ち上がっていきました。そして今年2012年に入って政府が「広域処理」を宣伝するのにもなって、各地でガレキ受け入れに抵抗する運動が興ってきています。

『 (前略)

計測運動やガレキ抵抗運動をつうじて、私たちは自治体行政の意思決定プロセスを否応なく知ることになりました。ついでに汚職を発見したりもしながらね。自分や家族の住む界限、校庭や公園、学校給食、ガレキを受け入れた場合の拡散状況……生活のいくつもの場面について一つひとつ交渉するなかで、地方行政の具体的なプロセスがはっきりと見えてくるわけです。

これは「ガレキ民主主義」もっとひろげて言えば「地域民主主義」の勃興といえる状況ではないか。すべての都道府県、市町村で均質に起きているわけではないけれども、確実に民主主義が顕在化している。そして、それは地方行政と同時に、国家の復興イデオロギーにも対峙するものになっている。

(中略)

このような「がれき広域処理」の真の目的とは何でしょうか？線量の「安全基準」はもとより、たとえば愛知県でいえば、6億円という莫大な規模の「調査費」の根拠もいかがわしい。愛知県はなぜこのような無理強いをするのでしょうか。

もちろん、ゼネコン、産廃業者、官僚などが、がれきの処理によって直接的にうらおうという利権の問題もあります。しかし、それだけではない。

その最大の目的のひとつは、低レベル放射性廃棄物のリサイクルを既成事実化することだろうと思います。今後、福島第一をはじめ全国の原子力関連施設では、膨大な放射性廃棄物が出ます。これを廃棄物として処分するのは相当にカネのかかる事業なわけですが、リサイクル品として流通させることができれば、バックエンド対策費がそれなりに圧縮できるということになる。鋼材などのクリアランス基準は現在 100 ベクレル/kgですが、将来この基準を緩和することができれば、もっともっと予算が圧縮できる。問題の中心は「震災がれき」ではなく、その後に発生する一般の放射性廃棄物であり、バックエンド事業の問題なのだろうと思います。

(中略)

電力会社にしても、福島第一原発由来のゴミがリサイクル資源として売れるとなったら、処理に要する莫大な費用を圧縮できてしまう。がれき受け入れがこれだけ騒がれているのも、最終的にはその処分の一般的フレームをつくることによって、原子力産業のバックエンド対策費用に一定のめどをつけたいためでしょう。東電は、銀行にも株主にも、今回の事故のバックエンド対策の総コストがいったいいくらになるのか、まだまったく示せていませんから。

つまり、がれき拒否運動は、個別の自治体とのせめぎあいだけでなく、原子力産業全体との闘いともなっていくわけです。

(中略)

とくに、地方の運動、直接行動が多様化しているのが非常によろこばしいですね。これまで地方の運動というのは、さまざまな課題がひとつの運動体(たとえばベ平連など)に集約化、一本化される状況が長くつづいてきました。

しかし、震災・放射能難民が各地に拡散することで、それが変化してきています。ただただ給食が気になってしかたがない主婦たちが、各地でグループをつくって、てんでに陳情とか申し入れをする。運動が多面的、同時多発的になる。意見交換会でもやって陳情を集約しようかという話が出ても、「いや、べつにバラバラでいいんじゃないですか」という感じで、ぜんぜん一本化されないんですね。

(中略)』

#### 4 民衆による「新しい科学」

『たちあがってきているのは、歴史学も含めて、これまでの科学とは異なる、民衆による「新しい科学」なのだと思います。』

すでにお話したように、計測運動は未踏の領域にさしかかっている、その根源には、自然の複雑さという問題があります。複雑系の研究者は、フクシマをふまえてこの間

題にあらためてとりくんでほしい。

(中略)

複雑系は、これまで、一部の学者がとりくむ科学の最先端のテーマでした。しかしそれがいまや、みんなの問題になっているのです。

(中略)

複雑系は、ゼロベクレル派として生きるうえでもはや死活的なテーマとなっている。しかし同時に、「放射能の複雑系」にたいして、民衆科学の野性的で凶暴な探究心が生起している。

(中略)

放射能汚染に直面した民衆が、みずから「新しい科学」をたちあげ、その科学的探究心があふれるように、次から次へと湧きだしている。みんな「古い科学」にあきたらず、自分で勉強して、計測の実践をつうじて複雑系に対峙しようとしています。これまで科学の対象だった民衆が、科学の主体となったのです。

(中略)

いま、レベル7における放射能物質の大規模拡散を前にして、線量計と人間とスマートフォン(インターネット)のハイブリッドが生まれているのです。線量計とインターネットを装備した主婦という、新しいサイバー・オーグ(サイボーグ)です。アメリカのフェミニズム理論家であるダナ・ハラウェイは、1985年にすでに「サイボーグ宣言」という論文を発表していますが、(『猿とオンナとサイボーグ』高橋さきの訳、青土社、『サイボーグ・フェミニズム』巽孝之編、巽・小谷真理訳、水声社、など参照)、そこで描かれていたサイボーグのイメージが、いま現実のものになっているんです。

(中略)

放射能物質の拡散という状況は、「新しい科学」だけでなく、「新しいサイボーグ」を要請したということです。それはけっして美しいものではありません。福島県の中通りでは、こどもたちが累積線量を測るガラスバッジを装着して生活させられている。そういうグロテスクなサイボーグでもある。しかし、そのようなグロテスクな支配に対抗しようとするときに、われわれ生活者の側でも「新しいサイボーグ」が生み出されている。

(中略)

放射線防護というのは、ある意味で戦争なのです。だから人々は、インターネットをはじめ、もともと軍事技術として開発されたサイバーテクノロジーを、徹底的に身につけざるをえなかった。それはフクシマ後に生まれた新しい生活者のモデルであり、新しい科学者のモデルでもあるのです。

この「新しいサイボーグ」の登場は、重大な社会的変化をもたらすでしょう。「線量計とインターネットと主婦」のハイブリッドは、この後でお話することになるテイラー主義、あるいはフォーディズムが前提していた人間観に対する挑戦です。そこで発見されているのは、技術と人間を分離することなどけっしてできないし、透明で無拓な人間など存在し



ないということです。

(中略)』

## 5 「古い科学」にツケをはらわせる——テイラー主義の無能

『私は、フクシマの、さらにいえば現在の世界の問題の底部には、「古い科学」の弊害があらわれていると考えています。だから「新しい科学」を育てると同時に、「古い科学」を総括しておかなければなりません。この総括は、いわゆる自然科学だけでなく、「科学」と名のつくあらゆる学問領域におよびます。

たとえば先にふれた「がまん量」の背景には、経済学が多用する「トレードオフ」の考え方があります。メリットとデメリットをはかりにかけて、一方を追求すれば他方は犠牲にせざるをえないとする考え方です。いったいなぜ、人間の生命や生存を脅かす放射能にかんして、「犠牲はやむをえない」などという方針がまかりとおってきたのでしょうか。

さらに問いを敷衍して、膨大な数の人間の被曝によってなりたつ原子力産業の非人間性と非合理性が、どこからきたのかと問うてみることもできます。このことを歴史的に総括するために、まずはテイラー主義にさかのぼって考えてみたいと思います。テイラー主義は、「マネジメント」の観点によって科学を矮小化し、「古い科学」のもっとも悪質で害のある部分をつくりだしているのです。

(中略)

頭脳と肉体を切りわけて分業させる「古い科学」は、権力が生産を囲いこむことの正当性を主張するために機能してきたのではないのでしょうか。

管理側は、すべての肉体には頭脳があるという事実を、率直に認めるわけにはいかなかった。だから、複雑な思考をあやつってモノをつくっているのは、ほかならぬ労働者でありその特異性であるということを、篡奪したのです。

つまりテイラー主義の問題は、それが生産の一様式であるということを超えて、生産(の科学)をめぐるひとつの政治様式であったことだといえるでしょう。

(中略)

原子力産業は、テイラー主義的な「管理」がどこに向かうのか、その究極的な姿を現していると思います。それは、寄生的で非生産的な「頭脳」が肥大した、いびつな生産管理の方法なのです。

(中略)

これまで私たちが科学だと思ってきたものは、結局、テイラー主義に象徴される非合理的な「古い科学」にすぎませんでした。複雑なものを乱暴にセグメント化することで、科学を装っていただけなのです。

(中略)

そして、すでにある「古い科学」の膨大なツケだけでも、事後処理が大変です。いま

や、原発労働者たちだけでなく、東北・関東圏の住民すべてが、レベル7の状況下で「古い科学」のツケをはらわされているといえるでしょう。

(中略)

くりかえしますが、計測運動の根幹には「楽しくてしょうがない」という知的興奮があります。みんな、本当に科学的な思考、本当に科学的な実践ができることに興奮している。

(中略)

みえないものをみるために計測する。みえないものを計測によってここにあるよ、と指し示して、問題をみんなで共有する。そこでは肉体と頭脳の分離はありあえない。テイラー主義は、肉体に関心をもつ必要などないという立場です。それがいかに「非科学的」であるかは明白です。社会科学は、そのような「古い科学」のあり方が社会を編成してきたこと、そしてその中で人間活動の繊細さがどれほど無視されてきたかを、研究しなければならないと思います。

(中略)

まさしくそういう生への執着、自己保存の力が、学習に、デモに、退避に、250万件もの計測データに着々と結実しているんだと思います。東電や国家や原子カムラに殺されるのはいやだ、殺されないために絶対放射能をとらえてやる。けっして「防護なんて無理だ」などとニヒらない。それが「ゼロベクレル派」の思想です。

## 6 「ゼロの日」以後の原子力都市

(前略)

そこにはいつも、陰に陽に原子力開発があった。いま喧伝されている「復興」もまったく同じですが、公共事業利権、とにかく道路をつくれればカネが落ちるという構造は、この全総で確立した。土木国家の誕生ですね。

そして、それは土木国家であると同時に原子力国家でもあった。「さらなる発展」のための都市開発のベクトルとして、原発が象徴する「未来のエネルギー」のイメージや言説が、綱領として必要だったのです。「豊かな未来はこっちだよ」と示すための指標であり、都市発展の精神的支柱、つまり純粋な上部構造です。

(中略)

避難した人たち、放射能難民は、想定する時間の射程が長い。こども、孫の世代まで考えて、さらには 50 年、100 年という時間の射程をもって移住してきているわけですから。

そこでどのような変化が起きているか。

ひとつは、「健康」の概念の範囲が問いなおされているということがあると思います。これまで、個人の単位で、できるだけ長く健康でいて、体が動くかぎり働ければいいだ

ろうというのが、想定される「健康」の範囲でした。しかし避難民の健康概念はまったくちがいます。もっと長くて大きな健康、人類規模のリブログクティブ・ヘルスの持続性を考えている。

(中略)

既存の時間の尺度がとりはらわれて、「人類」を考える難民の群れが大規模に発生し、各地に移住して生活再建をしていく。これが私の思いえがく「原子力都市崩壊後の未来」のヴィジョンです。そうしたヴィジョンが、フォールアウトを受けなかった非汚染地域でも、徐々に共通認識になっていくのではないかと。

「がれき問題」にしても、「数年内に何とか片づけて復興する」といったように、ごく短い時間の尺度でしか未来を描けていないわけです。しかし、「がれき問題」というのはもっともっと長いスパンでとらえなければならない。

震災がれきの広域処理が既成事実化することで、今後さまざまな低レベル汚染物質が拡散されていくでしょう。

(中略)

現在、大飯原発の再稼働がさかんにとりざたされていますが、再稼働なんて絶対にできないと思います。フクシマをへて、距離の尺度が決定的に変わったなかで、「東京と福島は 230 キロも離れているからだいじょうぶ」なんてことは、もうだれも思わなくなっている。大飯にしても、事故を起こせば関西全域が汚染されるのは自明だし、それどころかふたたび日本中に放射性物質がまきちらされる、それはかんべんしてくれ、とみんな思っていますから。

かならずくると思います、「ゼロの日」は。この 1 年、徹底的に勉強した結果、原子力発電が経済的にみあわないということはもはやだれもが知るところとなりました。だから原子力産業じたいが不可能なことはわかりきっているので、むしろ、「そのあとしまつをどうするか」に問題はシフトしていくはずで。

そして「ゼロの日」を境に、日本の発展の綱領としての「原子力都市」は、いったん終わるのだと思います。そもそも今回の事故を機に、その綱領がすでに破綻していることがあきらかになっているのですから。

綱領をうしなった社会が、成長や発展といった理念を根本的に問いなおし、何をめざして働き、生きていくのかを考えようとしている。それがポスト原子力都市のヴィジョンであり、それはむしろ望ましい状態なのではないでしょうか。

(中略)

いま非常に大規模な放射能公害事件を受けて、歴史学とか経済学とか社会学といった社会科学の方法や視点というものが、民衆レベルで共有されて、大きくせりあがってきているわけです。こうした民衆運動は、従来のような個別的な政策批判ではなくて、より一般的で普遍的な批判を提起することになる。もう、すべてが許せない、という状態です。全部ひっくり返してやる、と。そういう転覆的な感情がひろがっている。

(中略)

お母さんや主婦たちがふつうに、経団連を批判するようになっていきますからね。「革命」はこれまで左翼の言葉だったけれど、いまや転覆的な感情、革命への志向が日常の状態になっている。

革命 revolution の動詞 revolt (反抗する、反逆する、叛乱・暴動を起こす)の語源は、「ぐるりとまわすこと」です。弾装がぐるりと回転する構造をもつ「リボルバー拳銃」の revolve も、語義は「回転する／させる」です。

つまり、「レボルト」というのは、社会をぐるりと回転させる、時間をぐるりとまきもどす行為なんですね。ぐるりとまわすことから、「転覆」とか「復古」とか、「一からやりなおし」というニュアンスをふくむわけです。

だから、あれ以来起きていることは、まさに「回心」といってもいいかもしれないですね。戦後の左派がリニアな発展観・進歩主義にもとづいていたとすれば、フクシマ後のわれわれのヴィジョンは、「ぐるりとまわす／まわること」であり、もういちど時間をまきもどすことなのだと思います。

(中略)

フクシマ後は、そういった原子力都市の「尺度がないという特徴」が、全面開花している状態だといえます。

たとえば福島の人が九州、沖縄、北海道に、あるいは海外に避難したとき、距離の尺度がいきよに消失しているわけです。そうやってものすごい距離の移動が活性化しつつ、歴史を濃密に学ぶことで、時間の尺度も消えていつている。

「チェルノブイリとフクシマはちがう」とか、「昔の資料だから参考にならない」なんて、だれもいわなくなっている。残ったのが、というか新たに生成したのが、人類という尺度です。そしてこれは、「国民」概念の崩壊のきざしでもあります。

(中略)

つまり、逆説的ですが、原子力都市がわれわれに強いた「環境喪失」「尺度の消失」を、フクシマ放射能公害事件を境に、われわれは主体的に生きはじめた。そしてこの状態こそが、原子力都市を崩壊に導いている。だれもが人類の尺度で考え、土地にも国にも縛られずどこへでも行き、過去の人々の言葉を真剣に受けとめるようになったら、原子力産業は不可能になるからです。

ですから私はこのような「フクシマ後の世界」を、非常に肯定的にとらえています。

(中略)

核兵器は、戦争概念を根底から変えてしまう、きわめて特異なものです。何十万人もの人間をいっぺんに殺す最強のテロリズムを実現するのですから。これは国民国家にとっても異物です。国民国家や帝国主義などむしろかわいらしくみえるほど、その暴力の集約性は突出しています。

(中略)

つまり核兵器というのは、存在したいがデモクラシーの敵であるわけですから、デモクラシーを要求するかぎり、われわれは最終的には核兵器と対決しなければならない。

(中略)

核兵器ということになると、資本主義だけでなく、国家権力の問題にふみこまざるをえなくなる。核をめぐる超国家体制というものを起点に、国家の定義を再検討することが必要になる。「核兵器をもっているのが国家」というような射程で考えていかなければならない。』

## 7 「拒否の思想」と運動未来

『 (前略)

「3・12」以前の構図というのは、われわれが原子力の人質にとられた状態です。われわれはだれも核兵器の使用を望んでいないし、いま存在するすべての原発の安全をだれもが願っているわけですから。

ところがこの構図がいま、反転しつつあるようにみえるのです。

原発ではストライキが不可能だといわれます。それは端的に言って、われわれが原子炉の暴走を怖れるからです。いま日本にある54基の原発のうち50基については、今後もそういう「スト不可能状態」がつづきます。しかし、福島第一の1～4号炉についてはどうか。これらはすでに、原子炉が暴走し、破局的な事故を継続している炉です。これら4基については、ストライキが有効といえるのではないか。もしいま、1～4号炉でたいへんな被曝をしいられながら作業についている労働者たちがストに入ったら、どうなるか。「収束作業の拒否」が、国家主権にとって看過できない現実的な脅威となる構図が生まれているのです。

そして、この「収束作業の拒否」を拡張するなら、東北・関東が経済圏として成立しなくなるほど大量の人間が退避し、産業と経済をマヒさせるという、いわば「東日本ゼネスト」と呼べる事態が想像できます。これは、被曝地帯で「日常生活」をおくことや、平静を装うことを、それじたい不払い労働であるとして全面的にしりぞけていくという、「収束の拒否」の態度と思想にほかならない。

このような国家と労働者・民衆の関係性は、「3・12」以前にはありえなかったことです。原子力国家はいま、フクシマ放射能公害事件の影響を、姑息な繕いによってできるかぎり小さくし、過小評価しようとしている。しかし、作業員のストライキや東日本ゼネストの可能性が浮上すれば、そのもくろみは崩壊する。われわれではなく、国家の側がリーチをかけられている状態なんです。

「3・12」後の世界において、いま、転覆的な労働者暴力・民衆暴力が、その暴力の条件が、準備されているのではないか。退避・移住という民衆の実力行使が、「核をもつ国家」と五角に対峙する状況が生まれているのではないか。

これはいま実践できる抵抗のひとつの可能性だと思います。

(中略)

現在の運動は、「マイナス 5」を「マイナス 4」にしよう、あるいは「マイナス 6」にしないようにしよう、というもの。でも悲しいことに、ほぼ確実に「マイナス 6」になる。「成果」の点では報われないといえる。けれども、人間は変わります。これまで眠らされていたポテンシャルが全面的に開花する。

だから私は、未来の若者たちに期待しています。第一世代のわれわれとちがって、これからの世代は生まれたときから戦争状態のリアリティのなかにある。東日本に残った同世代の人間が、つぎつぎに倒れていくのですから。

(中略)

そのなかで政府にとって致命的なのは、「復興」とか「地域をまもる」といったお題目でやるのが、ことごとく裏目に出ていることです。そういうイデオロギーが人を殺すということ、みんなが認識してしまった。

これは、パトリオティズムやナショナリズムにとって致命傷となる打撃だと思います。みんな、国だの郷土だのいってるやつは嘘つきだ、やつらのいうこときいてたら殺されちゃう、と思っている。そういう認識がひろく共有されている。

(中略)

負ける気がしないですね、今回は。

政府に何の説得力もないですからね。経産省のいうことなんか、だれも信じていない。しかもそれを、活動家とか運動家じゃない、ふつうの主婦たちがわかっていますから。

「枝野かよ！」ってね。

(中略)

自然災害と公害事件が入りくんだかたちで、国家暴力、あるいはもっとふみこんでいけば社会の暴力によって、人間が被曝させられている。この事態を受けて、社会の暴力というものの複雑さをみんな理解し、社会学的に分析しています。

結論は、「東電つぶせ」「米倉死ね」なんだけれども、複雑さも同時にとらえている。単純にただ祈ったり、怒ったりしているのではない。この 1 年、すさまじい知性と情動の大爆発が起きているんです。

(中略)

国家は、なぜ核をもちたがるのでしょうか。

その動機は戦争だけではなくて、もっと内発的な理由がある。つまるところ、核武装でも平和利用でもどっちでもいい。とにかく核をもちたい。原子力は、国の発展のフレームを決める行動綱領だったのです。

殺戮のパワーや外交的パワーとは別の次元に、原子力そのものがはらむ「夢」というものがあるのだと思います。原子力都市が崩壊しようとしているいま、その夢のありかた

を問題にしなければなりません。この 100 年、資本主義が奉じてきた科学観や経済発展のフレームは、いったいどういうものだったのか。それはほんとうに正しかったのか。それはだれのための夢だったのか。「原子力の夢」というものを切りだして、その夢のツケを、しかるべき人たちに払わせなくてはならない。

(中略)

この狭い地震列島に 54 基もの原発をつくつたわけです。その思想は何なのかということを開いていかないといけない。問題は、原子力技術だけではなくて、その技術を要請した思想なのです。

つまり近代・現代の人間は、生産をどのように考えてきたのか。人間のどのような働きと成果を、「生産」だと考えてきたのか、そのイデオロギーを検討しなければならない。

これは言いかえれば、資本主義的生産様式を批判するときの、批判の深度が試されるということです。

いま各地で放射線防護活動がおこなわれていて、民衆の「新しい科学」によって、こどもの疎開から計測運動まで、膨大な規模の情報収集や文献翻訳がすすめられています。みんな手弁当で、もちだしてやっている。こうした民衆による活動が社会に問うているのは、私たちの(あなたたちの)やっていることは生産ですか、「生産」を何だと考えているんですか、ということだと思います。

(中略)

放射線防護活動にみられる生産活動は、「サブシステム生産」(商品化がおよばない領域でおこなわれる生活経済活動)と呼ばれてきたものです。それはほとんど無賃労働で、シャドウワークです。本来、こうした働きにこそ報酬が支払われるべきだし、必要な資金が投入されなければならないはずですが。

しかし現実には、われわれにはカネがまったくまわってこなくて、原発を爆発させた無能集団がいまだに巨額の報酬を受けとっているわけです。「家事労働に貸金を」というマテリアル・フェミニズムの思想が、レベル 7 の日本であらためて提起される必要があると思います。

レベル 7 における放射線防護活動が暗示しているのは、こうしたラディカルな次元での分業批判であり、「生産」様式の批判であり、資本主義批判なのです。

(中略)

知性は大学や研究所ではなく、民衆のなかに潜在していた。「想定外」とよばれる事態であっても、いちはやくそれに対応していくタフな知性が民衆のなかにはあった。

だから、私がいいたいのは、「われわれにカネをよこせ」ということです。「家事労働に貸金を」、「ゼロベクレル派に貸金を」です。

大学の常勤教員のなかには、年収 1000 万にもおよぶ人がいます。かたや、全国各地で計測運動をやっている人たちは、みんなもちだしです。とんでもない規模のボランティアです。それによって 250 万件ものデータが記録されて、放射線防護の今後の研

究にそなえて着々と活動が展開している。いま私たちの行動の羅針盤としてもっとも頼りになる空間線量地図も、食品工場やゴミ焼却場の立地情報もすべて、民衆の活動によって生産されたものです。教育予算、研究予算、ぜんぶこっちによこせといたいですね。

(中略)

そして、計測の権限ですね。公園や校庭や給食など、こどもの生活圏全般にわたって計測する権限が欲しい。レベル 7 下の混沌とした状態を把握しうるのは、民衆による計測運動だけなので、おかしな管理権をふりかざしてじゃまをするな、と。われわれに管理権をよこせ、といたい。

(中略)

フクシマ後の日本で、民衆の社会的想像力がすごく活性化されていることは、本当に大きな希望です。

(中略)

実態がどうであれ、国民国家の形だけは残されているから、国家なんかもうないんだ、みんな勝手にやろう、というわけにもいかない。そんな宙づりの状態のなかで、鬱々と生きていかなければならない。そして、なんとかして生活できる環境にするための、めんどろな仕事を担わなければならない。原発のはてしないバックエンド事業、放射線防護、各種の評議会やネットワークをつうじたサブシステム経済の仕組みづくり……そういうものを構築して夜警国家と対峙する、あるいは調整・補完する仕事だけが残されるのです。

(中略)

レベル 7 の世界において、収束の拒否、退避・移住という民衆の実力行使は、「核をもつ国家」に真っ向から対峙する力となりつつあります。何よりも、この点に希望をみいだしていかなければなりません。

(中略)

たとえば、「うちの旦那がちっとも話をきかない」といったような、とてもマイクロな次元で深い考察がなされ、発見がある。非常に深い地層から、現在の状況をひきおこした制度や習慣やイデオロギーが対象化されている。私が一年前に、「私的なものの回復」がはじまると書いた(「東京を離れて」、『現代思想』22011年5月号)のは、こういうポテンシャルの解放をさしたものです。

(中略)

いったんみんな異端者、レネゲイド(背教者)、裏切り者になって、そこからあらためて仲間をみつけていっている。分子革命がすでにはじまっている。

(中略)

あらゆる領域が民衆科学の凶暴な主観性によって再編されていくことを期待します。

(中略)



こうした「新しい科学」によって、最終的に「社会」そのものの書きかえがはじまるはず  
です。昨日まで存在しなかった社会が生まれる。それは資本主義経済の補完物とされ  
てきたような、これまでの「社会」とはまったくちがうものです。したがって、従来の「社会  
変革」の議論では予測のつかないことが、どんどん生起していくでしょう。

現在、人々が過去の出来事に「回心」しているのも、そこに何かしら変化に向けた発  
明がみいだせたからです。昔の人が、当時の状況を変えようとして何らかの発明にとりく  
んだ、その方法を参照しているのではないのでしょうか。

(中略)

そうやって、実際にいくつかの国で「民族」が書きかえられていったのと同様に、われ  
われの「社会」も、書きかえることが可能なのです。それは古い「社会」の概念ではまった  
く認識できない、私たちがこれまで生きてきたのとは完全に異なる社会となるでしょう。

(中略)

レベル 7 の苛烈な状況のもとで、民衆は「人類」の視座をよみがえらせ、自分に健康  
被害が出ようが出まいが、いやなものはいやだと考えたのです。

統治や管理の思想が現実によく対処できないことは、テイラー主義の話であきらか  
になったと思います。じつは、みんながそれぞれの主観にもとづいて自律的に行動して  
いるほうがうまくいく。

これは司令塔のない行動の様式です。司令塔がなく、だれも統括していないからこそ  
秩序がつくられる。テイラー主義からすれば逆説的でしょうが、これが民衆運動のひとつ  
の真理でしょう。

ふだん意識しなかった「環境」、忘れていても何とかなっていた「環境」というものが、  
ある日、壊されてしまう。「保健所がやってくれるはず」といった社会的な期待が裏切られ  
る。「環境」をはぎとられ、複雑な世界に投げだされる。

そのとき私たちは、ただ放心したり嘆いたりするのではなくて、自分のなかに潜在する  
ある力を発見したのです。資本主義や、国家や、「日常生活」のスペクタクルによって、  
ふだん抑圧されていたものが、いっせいに開花し、爆発した。

構築された「環境」をはぎとられ、むきだしの「世界」に投げだされたとき、私たちのな  
かに還ってきたものは何でしょうか。自己保存の力と、それを肯定する意志です。

それは、ひとりの人間が自分の生命とありようを保存するという「小さな自己保存」のな  
かに、人類という巨大なスケールで命脈を維持しようとする「大きな自己保存」が包含さ  
れているということでもある。

もう、政府や広告代理店が何をいおうと、この力を鎮圧することはできない。

「レベル 7」が意識化されることで、自己保存の力が覚醒し、「反社会」が昂進してい  
る。多くの人々が、冷淡に「社会」を突きはなし、「社会」を裏切ろうとしているのです。

放射能を食えというならそんな社会はいらない、という意志が生まれている。

これはもうわれわれが知っていた人間ではない、何か別のものです。

私たちのなかに潜在していた存在と行動の様式——真の生産をなす者、裏切り者、発明家、魔女と海賊、つまり野生の生活者——が、レベル 7 において目をさましたのです。』

## 〈注・10〉 第1回 被曝社会研究会

『第1回被曝社会研究会・討議内容～その1～福島原発事故「収束労働」について

研究会第1回のテーマとして、かなりの時間を割いたのが福島第一原発の「収束労働」および「収束労働者」についての論議です。論点を分けると

- ①収束労働の「非有効性」と労働神話
- ②戦争と収束労働の同質性／異質性
- ③被曝労働と労働運動と反公害運動

### ①収束労働の「非有効性」と労働神話

チェルノブイリ事故収束作業指揮者の発言には、「ほとんどの作業が無駄であった」という旨のものがああります。それもそのはず、原発事故について全てを把握することは事実上不可能で(把握しようとするれば超高線量被曝で死んでしまう)、そうした状況下で場当たりの・手さぐりの作業を行わなければならないし、当然作業工程全体の組み立てもそうなりますから。

(中略)

原発や事故収束を管理・評価するシステムや思考の有用性は非常に疑わしく、またその下にある労働や労働者は自らを遠心的・離脱的に把握しているような状況があるのではないのでしょうか。当然、被曝のリスク管理は原発の全体状況がつかみきれない中では狭い範囲以外では本質的には不可能なので、労働者自身の把握とは別個に圧倒的危険に晒されていることは否定できませんが。

\*また、こうした有効性の疑わしい作業の中で出てくるだろう健康被害への対応については国民健康保険ではなく、東電が全てを負うのがスジであろうという意見も出ました。

### ②戦争と収束労働の同質性／異質性

(中略)

さて、そうした戦争・戦場と、原発事故・事故現場を比較して決定的に違う点があります。それは戦争では敵と交渉する可能性もあるのに対し、放射能とは絶対に「講和不能」だということです。放射能は意志を持たないので、放射線による攻撃をほぼ永久的にやめません。したがって、原発事故・現場は戦争・戦場どころではなく、「超戦争」・「超戦場」状態であると言えます。そうした現場において、果たして労働運動・労働組合の理論や実践を当てはめることがどれだけ有効なのでしょう？そして、むしろ①で述べたように個々の作業従事者のほうが、この「超戦場」・「超戦争」的状态について非常に「現実的」に把

握して「遠心的」・「離脱的」観点(つまりは「冷めた」感覚)を持っているとしたら、そのギャップは一体何を意味しているのでしょうか？

### ③被曝労働と労働運動と反公害運動

被曝労働に関して労働組合的アプローチも実際ありうるでしょう。しかし、「労働」の部分についてはある程度の対応ができて、肝心の「被曝」についてはどれだけのことができるのでしょうか？

例えば、労働問題に関して当該労働者が組合に接触する端緒として「労働相談」があります。しかし、「被曝」やそれによろと思われる症状について作業員が、「相談」という体制の下どれだけのことを語るのでしょうか。むしろ、語りたくない、隠し通したい、という意向が強く働くであろうと考えられるのが被曝問題です。こうした「被曝」労働者・作業員において把握できない状況がブラックボックス的に広がる中で「被曝労働」問題としてのアプローチで、果たして被曝防護対策をどれだけ考えることができるのか。個々の労働問題から始まり、それを組織で共有して闘っていくのが労働組合であるなら、個々人が個々人として「闘」を「闘」のまま抱えざるをえない(=共有できない)被曝に対して同様に組織としての取り組みが有効と言えるのでしょうか。

では、「被曝労働」を「労働被曝」としてとらえてみるならどうでしょうか。その際は、これは放射能公害事件として捉えられ、過去の反公害運動を参照すれば、もちろん労働運動のように金銭的補償を求める、求めなくてはならない部分ではありますが、水俣病での緒方正人が言うように「金では解決されない」部分が必ず出てきます。「被曝労働」を他の労働問題と同列ではなく、「被曝」の回復不可能性という事実と向き合いつつ「労働被曝」の問題としてとらえるなら、この「金では解決されない」という問題提起は非常な重みを投げかけてくるでしょう。

## 第1回研究会・討議内容～その2～脱「被曝」サブシステム

第1回研究会で、前回ご報告した福島原発事故「収束労働」と同じくらいの比重を占めて討議されたのが、「被曝」から逃れるためのサブシステムの実践についてです。

(中略)

今の日本における被曝を受忍・容認させるような経済体制は益々様々なレベルで「普遍性」の疑わしいものになっており、それに見切りをつけるような実践も急速に進行しているし、また求められてもいます。

こうしたますます重要になる「サブシステム」の意義を踏まえつつ以下のような論点が浮上します。

- ①従来の集団・(対抗)組織と放射線防護の対立
- ②「脱被曝」サブシステム実践と弾圧

## ①従来の集団・(対抗)組織と放射線防護の対立

ラルフ・ラッカスは、中国労働運動研究の中で、「代表」組織を作ってしまうことが闘争の弱体化につながり、そしてそうした「代表」自体が闘争によって乗り越えられてしまう現状を「階級組織なき階級闘争」と呼んでいます。

しかし、そのような傾向は中国だけでなく、むしろ日本の放射線防護運動において強く見られるのではないのでしょうか。「反原発」という政治的レベルにおいては、従来の組織(あるいは「従来のモデル」の組織)が一定程度以上力を発揮したことは否定できないと思いますが、放射線防護についてはそうした組織での取り組みよりも、個々人やそこから新たに立ち上がった人々のつながりによって担われてきた面が大きいのではないのでしょうか。地域に根ざした従来組織が、その地域の汚染から逃れることを集団的に決定したケースはほとんど聞きませんし、むしろそこに身を置く中で「食べて応援」的雰囲気のもと被曝拡大に巻き込まれかねない可能性さえあるでしょう。

新自由主義に対抗するような二重権力保持戦略における組織や集団が、被曝防護についてはむしろ妨げ・障害になってしまうこともあるなら、私たちは脱被曝に関する集団的実践をどのように考えたらよいのでしょうか？放射線から身を守るには完全に、個々人あるいは私的領域の問題として考えるしかないのでしょうか？

## ②「脱被曝」サブシステム実践と弾圧

(中略)

福島原発事故での凄まじい放射能物質放出は、人々に被曝圏内から脱するための実践をまさしく「強いて」います。そして、実際に遠隔地への一時保養や移住なども含め、私たちが到底全てを後追いしきれないくらいのとてつもない工夫や戦術・戦略の凝らされた実践がすでになされていると考えられます。海賊でも、レネゲイド・背教者の「手探りの知」としてのサイエンスにおいては、イスラム科学や航海術など様々な知識・文化の混交を見ました。

(中略)

まとめれば、「脱被曝」サブシステムを考えるには、すでに無数に実験・実践が為されているが故に追跡も困難であるし、弾圧を考慮せざるをえないために共有化も困難で、「離散」であるが故に過去への参照も困難、そして実践そのものも非常に困難であるという「4重の困難」を課題として見据えなければならないということです。これは、遊牧論、海賊論、ギャング論、第三世界革命論、遊撃論、実践論、来るべき蜂起論などが単なる「教養」的知識ではなく、まさに実践的「知」の問題として立ち上がってくる事態でもあると言えます。インタグレム内の「被曝」マルチチュードが、外部の海賊的实践を得るために手探りで「もがく」状態はどれほど続くのでしょうか……

## 第1回研究会・討議内容報告～その3～被曝社会をとらえる「思考の行方」

### ①被曝を受忍しないための哲学

矢部史郎氏が述べるような「ゼロベクレル派」における「主観の拡大」も、こうした「抱握」の過程に起こることでしょうし、新たな具体性を次々と発見してその都度あらたな「スケール」を生み出す「ゼロベクレル派」は、福島・東日本の子どもや女性、難民、ホームレス、障害者、外国人などの経験を後追いのまたは先取りの「追体験」して非常に「多感化」していくでしょう。

\*参考文献:森元斎「思考の行方 現実根付くこと」(「現代思想 特集＝現代思想の総展望 2013」所収)

### ②原子力産業の動向をどう見るか～被曝は今後どう受忍させられていくか

(中略)

今後、日本社会の被曝受忍はどのようにパッケージされ PR されていくのでしょうか。「食べて応援」への巻き込み、除染ボランティア、その大学単位化、瓦礫焼却等の核廃棄産業労働／雇用の拡大、その他今までに見たことがないようなマクロ・ミクロなあらゆる形も含め、原子力推進、被曝受忍的な力による巻き返しは急速に進んでいくでしょう。大小さまざまなパッケージが用意されて被曝社会が包括されようとする中で、私たちは、どうすれば放射能とともにそのパッケージの中に押し込められることなく生きていけるのでしょうか。』

## 〈注・11〉 2013年2月13日 「宣伝『被曝社会年報』」から

『 (前略)

『被曝社会』というタイトルを見て憂鬱な気分になる読者は少なくないだろう。それはそうだ。一国の人口の 3 分の1を呑み込んだ被曝社会とは、これはもう考えるだけでも大変なことだ。もう絶望的な言葉しか思い浮かばない。お先真っ暗だ。

そこで私たちが慎重に吟味しなくてはならないのは、私たちを包み込んでいるこの重苦しい気分というものが、正味のところどうなのかである。その気分のうちのどれだけが本場で、どれだけが嘘なのかだ。

客観的にみて危惧すべき状況はある。広域の放射能汚染であり、被曝である。しかしいま多くの人々が打ちのめされているのは、放射性物質による汚染でも被曝でもなく、汚染に伴ってあらわれた社会的抑圧ではないのか。実は自分には関係のない国民感情や国民的徳心の蔓延に、震え上がっているのではないのか。そうであるならば、私たちは被曝環境から物理的に遠ざかることと同時に、被曝のイデオロギーから距離をとることが必要ではないか。被曝受忍のイデオロギーを測定し、分析し、除染できるものは除染する、除染できないものは棄てるという作業だ。

ではいったい誰が、この国民道徳を対象化し排除することができるのか。その主体はす

で放射線防護活動のなかにある。私たちが自信を持つべき成果は、この二年間に日本各地に現れた放射線防護活動だ。

もうひとつ理解されていないようなのであえて書くが、放射線防護活動は、この日本社会が生み出した素晴らしい成果である。この活動は誰でも当たり前に見えることに見えて、実はそうではない。きわめて特異な現象である。みんなもっと驚くべきだ。防護活動は特異的で、大衆的で、前衛的だ。いま放射線防護派の人々が共有している科学主義、人権意識、階級意識は、まるで日本人にみえないほど洗練されていて、これはヨーロッパ啓蒙主義の時代と比べても良いくらいである。日本ではながく排斥されマイナーな位置におかれていた知性が、噴出してきているのである。

いま我々がうんざりしているあの「復興」キャンペーンというのは、その影であり、反動に過ぎない。「3・12」後に登場した新たな啓蒙主義に対するリアクションだ。小出裕章らがやっていた道徳的身振り(食べて応援)もそうだ。そういうリアクションにすぎない弱々しいものにかかずらわってはいけない。新しい力があらわれたのだから、その大きなうねりについていけばよい。』

## 〈注・12〉 2013年3月6日 「ノート被曝労働」(1～3)・「ノート被曝労働」(4, 5)

### 『ノート被曝労働(1～3)』

来週末、名古屋で被曝社会研究会合宿がおこなわれる。

その準備のために、被曝労働について考えを整理している。

以下はそのノートだが、順次公開して共有しておきたい。

最終的に研究会のレジュメとしてまとめたいと思う。

以下、本文。

被曝労働にどう対峙するか

- 1) 福島第一原発の収束作業
- 2) 汚染地域の除染作業
- 3) 汚染地域の土木・建築作業
- 4) 汚染地域のインフラ事業(ゴミ処理・下水処理・公園整備)
- 5) 汚染地域の一般的屋外作業

1 福島第一原発の収束作業の特徴は、作業の有効性が不明確であることである。事故後の施設の状態は把握し難く、対処の方法も明確になっていない。すべてが未知の領域である。

チェルノブイリ原発の収束作業では労働者と兵士あわせて 80 万人が動員されたが、当時の指揮官は、「ほとんどの作業が意味のないものだった」と述懐している。多くの労働者兵士は意味のない作業のために被曝させられた。これは労働というよりも戦争に近い事態である。人権の極端な制限、使い捨て、「兵士の命は馬より安い」という状態が復活している。戦争であれば停戦や講和が可能だが、ここではそれもない。戦争よりも絶望的な事態だ。

収束作業に対して労働運動が取るべき基本的態度は、作業の無人化の要求である。戦争を拒否するのと同じ理由で、「収束作業の拒否」を運動の軸にするべきである。

日本では、日露・日中・太平洋戦争で死んだ兵士を靖国神社に祀り「英霊」化している。今後は収束作業の死者を「英霊」化する策動にも強く警戒しなければならない。

## 2 汚染地域の除染作業は、「復興」政策の要である。

一部地域では住民の退避措置と同時に除染が試みられているが、ほとんどの地域では退避措置なき除染作業が行われている。多くの除染作業は、住民を退避させないために行われている。

「復興」政策は、長期的には破綻することがあきらかである。しかし政府と金融資本は急激なフクシマ危機を望んでいないから（フクシマの不良債権化はこれまで経験した債務危機を超えるだろう）、徐々にソフトランディングさせるために時間を稼いでいる。したがって現行の除染事業にもとめられる「実績」とは、汚染が低減できたか否かとは関係がない。「汚染の低減」は汚染評価を操作することによって可能だからである。では除染事業は何を「実績」とするかといえば、事業の「費用対効果」であり、「効果」があらかじめ決まっている場合、単純に費用の最小化をはかることになる。除染作業に十分な安全対策が施されないのは、そもそもこの事業が費用の最小化だけを求めているからである。

チェルノブイリで行われた「意味のない作業」は、多くの除染作業を含んでいる。安全対策が杜撰な状態で、大量の労働者が重汚染地域に動員される。この部門が今後の被曝被害を押し上げる最大のグループになるだろう。

## 3 汚染地域の土木・建築労働者は、被害の補償をもっとも取りにくいグループだ。

日本の土木建築業は重層的下請け構造によって、雇用を流動化させ使用者責任を曖昧にする、脱法的性格をもっている。また、汚染地域が広大で、岩手県から静岡県まで膨大な労働者が働いている。彼らの健康被害は十分に検証されることなく最後まで放置されるだろう。

現実には2つの争点がありうる。一つは、退避措置や注意喚起を怠った使用者元請けに対して、労働災害の補償を求めること。もう一つは、労働災害としてではなく一般的な公害訴訟に組み込むかたちで、国や自治体の責任を問うことである。

いずれにしる必要なのは、呼吸内部被曝の解明と、クリアランス制度によって流通した汚染建材の実態把握である。

## 補足1

### 権利意識の喪失について

被曝社会において、労働者がはっきりとした権利意識を持つことは必要なことである。しかし、労働者の権利意識の徹底は、これまで以上の困難さを伴う。

まず若年労働者においては、長く続いてきた慢性的失業状態によって、諦念の感情が支配的になっている。近年のユニオン運動や反貧困運動は、若年層の権利意識に働きかけるよう尽力してきたが、まだスタートラインにたったばかりである。自暴自棄になっている若者は多い。彼らは確実に被曝する。

つぎに、関東・東北では、汚染の強度が財産の存否に関わるほどになっているから、当該住民は、私有の不動産や債権、無形の社会資本(コネ)と経済的諸権利を、質に取られている状態である。福島県と隣接県では、「復興」政策にはっきりと異論を唱えることのできない労働者・農民が数多くいるだろう。彼らは、「復興」に翼賛してしまうために、労働者階級全体の利益と対立する役割を果たすことになる。

被曝による労災認定は、被曝線量 5mSV の水準を過去の判例で勝ち取っているが、汚染地域の労働者・農民はこの成果を覆し、被曝労災問題をなし崩しにしてしまうだろう。

最後に、非汚染地域の労働者は、「日本再生」の国民意識に呑み込まれ、階級意識を眠らせている。福島県での医療検査が事実上棚上げにされていることを知りつつも、労働組合やナショナルセンターが自ら野戦病院を建設することはない。なぜなら、被曝者の(被曝労働者の)健康調査は、金融資本と労働者階級の対立を鋭く表面化させるからである。またこのことは、構造的にルンペン化した汚染地域労働者との思想闘争を必然化させることになる。

日本の労働者にそこまでの根性はない。みんなにいい顔したいだけの善人たちだからだ。

## ノート被曝労働(4, 5)

### 4 汚染地域のインフラ事業(ゴミ処理・下水処理・公園整備)

この部門は放射性物質の蓄積・濃縮が明確に予測されるため、厳重な放射線防護対策が適用される。組合員であれば労災認定も比較的容易だろう。ここでは個別的な問題よりも、被曝社会全体の中ではたす役割が問題になる。

公共部門の組織労働者は、被曝労働の中でもっとも防護されるグループだ。外部被曝線量が比較的高いため、厳重な内部被曝対策(全面マスク等)が適用される。健康被害は比較的少なく抑えられるだろう。これは、内部被曝問題を無視して安全性を主張したい科学者(しきい値仮説の信奉者)にとって、絶好のモデルケースになる。このグループの健康調査からは、理想的な統計が得られる。被曝労働の中では特殊で理想的な環境から得られたデータが、被曝労災問題全体の議論に参照されることになる。実際には、下請けのト



ラック運転手やリサイクルプラントの派遣労働者が不十分な防護環境で働いていたとしても、それらは統計に反映しないように切り離すことができる。キレイな部分だけ書類にまとめ、裁判資料に提出することができるのである。

この部門の労働者は、被曝労働に動員されるだけでなく、被曝隠しのデータ作成に動員されることになる。問題は、具体的な労働条件である以上に、自らの人体情報が被曝を強要する社会の正当化に使われることをよしとするのか否かである。すぐれて思想的な態度決定を迫られる部門である。

## 5 汚染地域の一般的屋外作業

放射能拡散後、千葉県の上野毛の自動車のフィルターからアルファ線核種が検出されている。ウランかプルトニウムまたはその両方が、自動車に吸気されていることがわかっている。

汚染地域における運送業、宅配、行商、教育労働等は、被曝労働となっている。これらのグループは、放射性物質を労働の対象としていないから、ほとんど防護対策が為されない。農業者や土木労働者は土を意識して働くが、子供にサッカーを教える体育教員はグラウンドの土埃を意識しない。まったく無防備な状態で放射性物質に接している。

ここでは労働者だけが危険にさらされているのではなく、そのサービスの受け手も危険にさらされている。したがって、従来の安全衛生や労働災害の概念で権利を主張することは難しいと感じられている。

たとえばある学校で、汚染地域への修学旅行が実施されたとき、教員も児童もともに危険にさらされるわけである。このとき、児童が旅行に動員されるのを横目で見ながら、「私は日光には行きません」とはなかなか言いづらいものがある。仮に言ったとして、その論拠を「労働者の権利だ」と言うのはもつとむずかしい。そういう教員がいたら私は全面的に応援したいが、一般的には場違いで反社会的な主張として退けられてしまうだろう。

ここでは労働者の権利を主張し要求することが、労使間の個別的な交渉課題ではなくなっている。それは社会総体を問いただし、社会全体と敵対しかねない、一般的な課題として浮上する。教育労働者が職場で放射線防護措置を要求するということは、すなわち、「この学校はまるごと児童福祉法違反です」と言うのに等しい。ピザの宅配人が放射線防護対策を要求するということは、「実はお客さんが食べているのはピザじゃなくてピカです」と言うのに等しい。じゃあどうしろというのかと問われたとき、だしうる回答は、「学校を信用するな、子供を預けるな」とか、「無防備に外食していると被曝するぞ」とか、そういう次元の話に行き着いてしまう。教員が「学校なんか信じるな」と言う局面とは、これは、労働者の自己否定である。

かつて、大昔、労働運動は労働者の自己否定を追求するものとしてあったが、現在の労働運動はそうではない。労働組合は社会に埋め込まれ、支配の補完装置となっている。労働者の反被曝要求は孤立し、組合から排除されるだろう。

しかし、この権利意識が今後もずっと孤立したままであるかどうかは、わからない。可能性はある。』

## 〈注・13〉 第3回 被曝社会研究報告

『3月 16・17 日、名古屋市で「被曝社会研究会」の合宿をおこなった。参加者は 10 名。

今回は九州・関西の人が来られず、ほとんどが東京からの参加者で占められた。フリーター全般労働組合のメンバーや、洞爺湖サミットの抗議行動を準備したグループなど、これまで長く付き合いしてきた仲間と再会し、ひさびさに声がかかるほど話した。

一日目は、被曝労働についての討議。

二日目は、先月発売した『被曝社会年報1』に関する討議。

両日とも言いたい放題で、ともすれば奥歯にモノの挟まった状態に陥りがちな課題について、内容の濃い意見交換ができたと思う。

最近、年をとったせいかわ、遠慮がなくなった。

この二日間、ずいぶんなことを言ったと思う。労組の活動家に対しては「労働組合にはなにもできない」と言ったし、フェミニストに対しては「日本の女性学は原子物理学と同じ程度に御用学問」と言った。翌日に名古屋に駆けつけてくれた白石さん(フランス文学)に対しては、「いま主婦の存在を見据えない文学なんて文学じゃない」と言った。もう言いたい放題だ。

なぜこんなことになっているのか自分でもよくわからないが、たぶん私が興奮している原因のひとつは、もっとも古い同志であり先生でもある山の手緑氏が研究会に参加してくれたからだろう。

山の手緑は、『被曝社会年報』を酷評した。

「なんだこの惨状は」と言い、「ボロボロじゃないか」と言い、「けっきょく私が書かなきゃダメなのか」と言った。

彼女はこの二年間沈黙していたが、いまようやく腰をあげる気になったようだ。

これは大きな成果である。

ていうか、おせーよ。

はやくなんか書け。』

## Ⅱ－a 〈補註〉

### 1. 2011年6月 池上善彦「新たなる民衆運動」

『福島原子力発電所の事故から二ヶ月以上が経った。福島四基の事故を起こした原発は未だに不安定な状態にあり、大いに不安の源泉となっている。連日のテレビ及び新聞の報道は刻々と変化する四基の原発の状態にほぼ終始し、なにがしかのスペクタクルを構成するが、もはや我々にとって中心の関心事ではない。

現在の問題は、福島県及び首都圏を中心としてさらに広範囲に及ぶ放射性物質による汚染状況である。事故直後から一体どれだけの放射性物質が放出され、それらはどこに行ったのかが、徐々に明らかになっているのだ。空気中の放射線の量は今のところ増加の傾向にはなく、微減の傾向にある。しかし、放射性物質による土壌汚染の深刻さは我々が当初予感したものよりはるかに広く、深刻なものであったことが静かに衝撃を与えつつある。

福島県内における主に学校の校庭、公園の土壌汚染を中心とした放射能汚染の深刻さは内外を問わず今や広く知られるところとなっている。国家が設定した安全基準である20ミリシーベルトをめぐる攻防が現在の焦点を象徴している。

この福島県内の汚染を押し付けようとする国家の圧力を告発し、さらには次々に明らかになる周囲の汚染状況の発覚は、真実を知り、それへの対処を求める広範な民衆の願いと、それを裏付ける具体的な民衆の実践がその背後に存在しているのである。

実際我々はこの二ヶ月というもの、必死に学習した。原子炉の構造から始まり、次々に発表される放射能の数値、すなわちベクレルとかシーベルトといった測定単位を理解した。それは知識欲とか学習欲とは全く違う、まさに生存のための学習であった。この数値が理解できないと自らの生存が保障されないという危機感からであった。さらにそこに留まらず、原発が導入された歴史的経緯、さらにはウランそのものが採掘されているアフリカ、オーストラリアの採掘現場の醜悪さ、原発で働く労働者、作業員の過酷さをも理解するようになった。今までは一部で知られているのみであったこうした状況が今や広範囲に共有されることになったのである。

最初の間こそは未だ曖昧な言葉であった内部被曝とか低線量被曝といった用語は、広島、長崎で長年患者の治療に当たり研究してきた良心的な研究者のおかげで、我々は原発症で今も苦しむ患者の様子と共に、まさに現在の我々の状況を理解するために深く理解するまでに至っている。まさに民衆全体の水位が著しく高まっているのだ。当初は見分けがつかなかった、国家の都合のいい情報しか語らないいわゆる御用学者といわれるイデオログたちは、今では誰でも一瞬にして見抜くことが可能になっている。国家、及びマスメディアは決して真実を語ることはない故に、我々は自ら学習する他はなかったのだ。

る。そしてそれは現在留まることを知らず、前へと前進しようとしている。

そして、今すさまじい勢いで自ら放射線線量計を用いて自らの回りの放射線量を計測しようとする運動が広まっている。公的機関による放射線量の測定は定点では発表されているものの、近くの公園はどうなのか、自宅の周囲はどうなのか、あるいは子どもたちが通う学校はどうなのかは、多くの地域で不明である。それを自ら調査しようというのである。私はこの動きを、自ら学習してきた過程も含めて、新たな民衆運動と呼んでおく。

この動きを民衆運動と呼ぶことはあるいは違和感を覚えることなのかもしれない。従来多くの知識人が思い描いてきた民衆運動とは、民衆自身が政治的に覚醒することであった。しかし今回の過程はそれと似ているが少し違う様相を呈している。民衆は政治的にではなく、科学的に覚醒したのである。これは予想されていなかった過程である。それは原発事故というあまり例の少ない事故に大きく規定された運動であることは間違いない。

これはまず第一に、自らの物理的状态、つまり具体的な汚染状況を正確に知ることによって最大の意味がある。それを知ることによって自らの生活を考え、行動を決定するのである。第二に、今回の原発事故はこの数ヶ月で収束するものでは決していないという事実である。放射能の影響は直ちに出来るものではない。数年後に、5年後に、10年後に、20年後に、30年後にと想像も出来ないような長い年月にわたり徐々に症状が出るものなのである。そのことを我々はよく知っている。国家はその病状と今回の原発事故との因果関係を容易には認めないこともまた十分に知っている。それだからこそ、我々は現在を記録しておかなくてはならないのだ。古くからこのことに気づき、活動してきた反原発のグループ、あるいは自発的に本格的な調査を事故直後から開始してきた科学者のグループはこのことに十分自覚的である。水銀中毒で50年以上にわたり闘ってきた水俣病がそうであり、近くにはチェルノブイリがそうだったように、この闘いは長いものとなる。それに我々は十分自覚的なのである。そして第三に、あるいはこれがもっとも重要なことなのかもしれないが、自分を客観的に見る訓練としてこの運動はあるということだ。自分の周囲を知り、街を知り、やがては国家を具体的に知るというこの過程は、単なる学習と違い、様々な具体的な発見の契機に満ちている。ここから我々は過去を知り、社会の仕組みに気づき、外の世界との関係に気づくであろう。科学的覚醒から始まり、そこから遡及的に得られた知識と理解を総合し、社会的あるいは政治的覚醒へとこの運動は至るであろうか。

(後略)』

## 2. 2012年3月 池上善彦「その日を待ちながら」

『日本に54基ある原発は現在3基しか稼働していない。これが原発事故から11ヶ月がたった日本の現状である。直接事故を起こした原発以外はほとんどが定期点検のため

の停止である。次々に停止する原子力発電所は今のところただの一基も再稼働していない。この状態が続けば、4月末にはすべての原子力発電所が停止する。一年前、いや事故が起こった直後でさえ、このようなことは誰が想像できたであろうか。

原子力発電所が今後必要かどうかの議論の必要性はあらゆるメディアで語られている。もし原子力発電所をすべて廃止するならば、それに代わる代替エネルギーはどうするかとの議論の必要性もすべてのメディアで議論されている。もちろん電力不足は電力会社は言うに及ばず、経済界、産業界から常に警告されている。先日も東京電力から原子力発電所が一基しか動いていないため、化石燃料費用の購入費が上がったことを理由に値上げを宣言された。一見当然に見えるこういった議論は、実はまったく奇妙なことなのである。なぜならば、あらゆる議論とはまったく関係なく、原子力発電所は次々に停止しているからだ。議論を尽くした上で原発が止まっているのではない。現実には議論とは別世界のように、進行しているのである。多くの人はこのことに気づきながら、気づかないふりを続け、現実と議論を別物であるかのように振舞っている。

政府は脱原発の方向性を微弱ながらも打ち出している。しかしそのことを高らかに宣言し、明確な廃止プランを発表しているわけではない。経済界も脱原発は時代の流れだと観念したように思われる。だが誰一人現実にはほとんど動いていないことに言及しようとならない。悪い現実を誰もみようとしない、とは社会批評でしばしば使われる表現であるが、日本で進行している事態は、良き現実をみようとしないということなのだ。

もちろん政府および経済界、そして電力会社は多いにこの事態を危惧しているであろう。機会をうかがって、再稼働の時期を待っていることは明らかである。しかし多くの方は、口にするとは良きことが逃げてしまうと言わんばかりに、黙って残りすべてが停止する日を静かに待っているのである。その日はきっと来る、しかも直ぐに。誰もこのことを話題にしないのは、それが既定の事実であり、すでに私たちは原発の一基もない世界を生きているからである。私たちの生活にはすでに原発はもうない。それは決まったことなのであるが、その生活が、今まで予期しないことであったがために、今ひとつ信じられないのである。自信がないのではない。現実感が今ひとつ乏しいからなのだ。しかしそんな議論はもはや必要ではないことは皆が知っている。

では、誰が原発を止めているのか。それはもちろん私たち自身である。すでに街頭でのデモンストレーションは常態化している。数百人から数千人までの規模で毎週日本のどこかで、いたるところでデモンストレーションが行われるようになった。もちろん運動が常にそうであるように、デモンストレーションのやり方などをめぐって時には対立する様々な意見が噴出するがゆえに、論争は絶え間なくある。しかしそれが全体の勢いを削ぐことはなく、それまでの運動の関係性自体、人々の参加形態そのものを良い方向に変えていつている。現在象徴的意味を帯びているのは、東京の経済産業省の敷地をテントで占拠して抗議を続けている運動である。昨年9月に福島的女性たちと共に経済産業省を包囲する運動からこの占拠運動は開始され、数人の人間が常駐し、福島の母親たちの集団的アピー

ル、ティーチンなどが定期的に行われている。テントに三ヶ月以上住む 70 歳を越えた中心人物はこう言っている。「1960 年の日米安保条約反対運動は敗北した。70 年も同様であった。私は負け続けてきた。しかし、今回は勝てそうなんだ。だから頑張れる」。このテントはつい先日経産相大臣から撤去の要請があったが、全国から抗議のメッセージが届き、今も運動は継続中である。

ひと月ほど前、乳児用の粉ミルクからセシウムが検出され、交渉の末食品会社はその製品を撤収した。放射性物質を検出したのは公的機関ではない。福島県内にある市民の測定チームである。食品の放射性物質の検出には特殊な装置が必要とされる。彼らは非常に高価なその装置を共同で購入し測定を継続している。彼らのスローガンはこうである。「自分自身で考え、自分自身で勉強し、自分自身で測り、自分自身を守る」。そうした民衆の熱意に押されて二本松市も内部被曝の調査を始めた。これは民間では買うことのできないほどの高価な装置が必要とされる検査である。その結果、数週間前、市内の新築マンションが汚染されていることが発見された。汚染された建築材を使用したことが原因とされている。そこには子供達が多く住んでいる。民衆の科学は次々に成果をあげつつあるのだ。こういったことが背景にある。

放射性物質は自然界には存在しない物質であって、科学によって生み出されたものであるがゆえに、徹底的に科学的であることでしか対抗策はない。現在の現場の攻防の焦点は汚染地帯の除染である。除染とは家屋、道路の放射性物質を水で除去し、放射性物質の堆積した土壌の表土を削り取る作業である。これによって全体の放射線量が下がり、住むことが可能になることが期待されているのである。しかし、それで本当に期待された数値まで下がるのか。除去した土壌はどこに持って行くのか。また具体的作業は素人である住民に任されている。作業中に被曝は避けられない。この除染作業は共同体の崩壊を防ぐための現在の唯一の手段となっていて、あたかもこれですべてが解決するかのように政府及び自治体は宣伝している。

焦点は避難地域の住民、避難地域に指定されていない福島県および近隣の住民、東京を含む高線量地域の住民がどうするかにある。除染すれば元の地域に戻れるのか、あるいはそのままそこに暮らし続けることができるのか。その決断を長ければ一年以上はかかるであろう除染作業を見守りながら判断することになる。若い人ほど、また子供をもつ親ほど除染に対して懐疑的であり、避難を考える。しかし住み慣れた土地は離れ難く、生活手段の保障もあるわけではない。被曝の不安、生存の不安と生活の不安の間で揺れ動くのである。高線量地域に住むものはこの葛藤に投げ込まれることになる。そこでは線量は徹底的に計られなければならない。まず冷静な科学者になることが求められるのだ。そして、自分自身と、また家族と、友人と徹底して話し合いがもたれなければならない。人間関係の作り変え、あるいは再考が開始される。住むかあるいは避難するかは最終的には個人の判断に任せられる。その瞬間、国家に、そして資本に直接向き合わざるを得なくなるのだ。そこに住む住民、あるいは避難した住民の不安と葛藤はあらゆるメディアから伺うこ

とができる。生存の不安と生活の不安の矛盾から生じる葛藤こそが、ほとんどの原発を止めている運動と気持ちの原点に位置している。運動のみが原発を止めているのではない。放射線量を計測し、それを見守る日々の生活、昨日とは違うちょっとした思いのすべての総和が止めているのである。原子力災害とは、事故発生に続く長いこのような日常的葛藤の日々の戦いなのである。

事故直後の世論調査では、原発をすぐ廃止、あるいは将来的に廃止を望むものは 60 パーセントくらいであった。あれだけの事故があったにしては低い数字だと思われるかもしれないが、その直前のことを考えると高い数字である。そして昨年末に行われた同じ調査では 80 パーセント近くの者が原発の即時廃止ないしは将来的に廃止であった。事故後原発は必要ないと考える者は確実に増えているのである。これは意外なことであろうか、それとも当然のことであろうか。

理由ははっきりしている。原発が残り 3 基になっても、電力はまったく不足などしていないことが判明したからだ。そして、ただ足りているということだけでなく、より電気を節電しても生きて行くことができるという確信を得たからだ。先日会った友人は、この一年、その前の年に比べて 3 割から 4 割も電気の使用量を減らしたと、さりげなく私に告げた。これが原子力産業が最も恐れる事態なのだ。最もシンプルにして最上のやり方は、電気の使用を減らすことなのであった。線量を測り、土壌の放射性物質を測り、食品を測る行為は、個人であれグループであれ、もはや数が数えられないほどに増えている。かつては高価であったガイガーカウンターは、次々に安価な機種が市場に投入されている。自治体がガイガーカウンターの一一般への貸し出しを数ヶ月前から始めたが、それもすでに数ヶ月先まで予約でいっぱいになっている。我々の習慣は劇的に変わったのだ。原子力災害の特異性は、広範囲に渡る生活の、日常の改変を強いることにある。それは人間関係を組み替え、怒りの組織と表現そのものを変える。我々は変わったのだ。

もちろん、全原発の停止を資本と国家が黙って見逃すわけではない。この 5 月に全原発が停止することは明らかだとしても、その先がさらに長いであろうことは皆が知っていることである。現実はそのではやっていけないことを繰り返し言いたてて来るであろう。しかし、現実的には現在でさえ原発はほとんどが稼働していないのである。こちらが現実である。我々は長い間我々の希望を現実に合わせようとしてきた。今、現実が我々に合わせようとしている。

現実的に 5 月末に事態がどうなっているのか予断は許されない状況にある。人々の日々の生活の中で、また原発のある現地での不断の戦いは継続中である。しかしこの息の詰まるような状況にもかかわらず、実は我々は妙にうきうきしている。心は日々に軽くなっていく。その日が来るのが楽しみでしょうがないのだ。少し前までまったく想像すらしなかった日がやって来るのだ。その日を歓喜の思いで迎えるであろうことを我々は確信している。』

### 3. 2012年4月 池上善彦『『3・12の思想』—多くの人々が経験した「変化」を正確に言葉にした書』

『本書で言うところの「東京電力放射能公害事件」発生直後から、矢部史郎のブログで発信される意見に、私は常に注目してきた。いち早く住み慣れた東京を脱出し避難を呼びかける矢部の文章に、その内容のおもしろさとは別に、いつもと変わらぬ口調と同時にまったく別人へと変化した矢部を見ていたからだ。状況が一夜にして一変し、それに併せて自分自身も一変したのである。こういったことは人が生きていて、そうたびたびあるものでは決してない。これは心ならずも巡ってきた決定的な転換の瞬間なのである。途方もないことが起き、昨日の世界が一挙に崩壊したとき、矢部は瞬間的に事態に反応し、自分自身の変化と共に言葉にして発信していった。その瞬発力が素晴らしい。おそらく彼は一瞬にして変化の実体と未来を感じたのであろう。決定的な瞬間に、はっきりとした言葉が発せられるかどうかは、思想の問題である。そしてこの変化を一年たった現在、あらためて整理したのが本書である。

(中略)

矢部史郎の関心はそういうことにはなく、現在いたるところで生起しつつある変化、とりわけ普通の市民たちがいかに自分自身でさえ知らなかった潜在的力を具体的に発揮し、自らの力を自覚しつつあるかということにある。それは本書でかなりのページ数を使って書かれている放射能測定運動であり、放射能汚染からの避難民の様態であり、彼らがこれから引き起こすであろう社会および地域の変化についてである。まったく新しい事態に出来合いの図式は使えない。それよりも今現実で多くの人々が実際に何をやっているのかを注意深く観察し、それに未来の方向性を与えること、これが彼が本書で自らに果たしている課題である。

そして彼は「原子力発電をもつ国家は、社会をどのように管理するか」に関心をもつよう促す。これは前著『原子力都市』からの課題である。基本的認識の枠は今回の事態に合わせて深化しているものの、そこに変化の本質はない。彼の変化は原子力都市そのものの把握にあるというよりは、社会、政治を含む世界全体の認識にある。世界の認識方法がはるかに動的に、より正確に言えば力学的になっているのである。一例を挙げよう。多くの人の集団的主観性が劇的に変化したことを語りながら、「だからこそその変化に対する否認があり、力づくで統制しようとする反動が生まれる」と彼は状況を説明する。かつて、経験したことがほとんどないほどの大衆運動に突入した状況にふさわしい認識を彼は獲得したのだ。これはいかに些細なことに見えようとも、戦後日本の思想に希有な認識なのである。歴史は一人ひとりの思惑を超えて、力学的に進む瞬間がある。この認識こそが今の日本の状況を世界認識へと繋いでいくものに他ならない。そしてこの点こそが彼の前著と現



在とを分けているものである。

彼のこの変化はいかに似ていようと、決して転向ではない。それは回心と言うべきものである。変化が個人に起きればそれは転向であるが、集団に起きれば回心である。すでにお気づきであろうが、彼のような変化は実は多くの人々の上に起きた変化であるのだ。彼の言い分がいかにユニークに映ろうが、それは多くの人々の経験した変化を正確に代弁しているのである。』

#### 4.

なお、女性たちの「市民放射能観測運動」などについては、松本麻里「原発と再生産労働—フェミニズムの課題」(2011年6月)／村上潔「今あなたが『おんな』の『運動』について考える」(2012年7月)同「主婦は防衛する」(「被曝社会年報」2013年新評論)／など参照すべきものがある。これらについては、この『『拒否』の〈前〉線情報』の第3号でとりあげる予定。

## Ⅱ－b. 北島教行さん——その軌跡： 2011年3月～2013年4月

年	(フリーター全般労働組合ブログ <a href="http://d.hatena.ne.jp/spiders_nest/">http://d.hatena.ne.jp/spiders_nest/</a> などから)
2011	<p>3/17 フリーター全般労組:福島原発事故に関する声明「グスコーブドリのいないイーハトーヴはいらない」〈注・1〉</p> <p>3/20 さぶろう:『命の値段』に『祈る』前に行動しよう〈注・2〉</p> <p>3/24 「人民救援隊」(準)先遣隊に参加 福島へ「国家統制ではなく、民衆による被災地支援を」</p> <p>4/1 「自由と生存のメーデー 2011」実行委員会、東電へ申し入れ</p> <p>5/27 第5次トラック隊に参加</p> <p>6/4 「おたばっく救援便」に参加</p> <p>6/7,8 第6次トラック隊に参加</p> <p>6/29 フリーター全般労組:「被曝労働の廃絶へ『電力総連を動かそう! 6・29 行動』」</p> <p>9/ 福島第二原発被災復旧作業に従事(11月まで)</p> <p>12/ 福島第一次原発事故収束事業に従事(2013年4月まで)</p> <p>12/25 フリーター全般労組:「リアリティツアー 2011 東電解散」</p>
2012	<p>3/1 「原発収束作業の現場から—ある運動家の報告」〈注・3〉</p> <p>3/5 「命の叫び～福島の今を伝える」(於ニューヨーク)に参加—「原発収束作業現場から:ある労働者の報告」</p> <p>9/ さんいちブックレット「原発事故と被曝労働」分担執筆〈注・4〉</p> <p>9/5 「原発作業員さぶちゃんの話」を聞く会</p> <p>10/4 フリーター全般労組:記者会見予定:会見者 北島教行</p> <p>11/7 フリーター全般労組:「原発収束作業員の闘いがはじまった」—「原子力企業アトックスは指揮命令をしていた作業員への雇用責任を果たせ!」〈注・5〉</p> <p>11/16 フリーター全般労組:「福島第一原発で作業員は何を考えたか?—いち収束下請作業員(ごぼうさん)の話」を聞き知り開くこの社会」〈注・6〉</p>
2013	<p>1/2 「福島第一原発収束作業員Kさんの訴え」〈注・7〉</p> <p>1/15 フリーター全般労組:東京電力への公開「相談」</p> <p>1/17 北島教行講演会:「作業員が語る被曝労働の現実 福島原発でなにが起きているのか」(於大阪)〈注・8〉</p> <p>3/4 ごぼうさん支援協議会の呼びかけ〈注・15〉</p> <p>4/6 フリーター全般労組:反原発企画「3.11 北へ西へ。語るべきだが語られてこなかったこと」へ参加</p>

## II - b. の〈注〉

### 〈注・1〉 福島原発事故に関する声明

#### 「グスコブドリのいないイーハトーヴはいらない」

『「想定外の事態」。このひとことで、数万におよぶ人々の死が合理化されている。数十万の人々を放射能被害にさらし、なお数百万の人の暮らしを破壊し続けている人災、そう、繰り返し言うが最悪の人災が僅かこのひとことで合理化されている。

(中略)

被害は折り込まれていたのである。

東京をはじめとする大都市のエネルギー消費を支えるために、地方に住む数百万の人々は放射性物質の前に曝し出されている。地方の人々の暮らしを壊すことで、沖縄電力をのぞくすべての電力会社は安定した利益を確保し続けてきた。このビジネスを成立させるために、地域独占を許し原発建設に有利な法制度をつくりあげ、各電力会社を支援してきた日本政府も当然の責を問われる。電力各社と日本政府はいまそのつけを支払わなければならない。

日本政府と東京電力は、まず何よりもいま、福島原発で取り込まれつつ隠されている労働のすべてを子細に公開すべきだ。たとえば冷却水注入作業のために、誰がどこをどのように走り、管をつなぎ、バルブを開けたのか。放射能に汚染された飛沫を誰がふき取り、ふき取ることを誰が命じているのか。これは英雄譚を作り出すためではなく、そこで働く人々をグスコブドリにして褒め称える醜悪さを私たちが克服するための要求だ。「数千万の命を救う」ために自らは決してしない仕事を、原発労働者に求めるおぞましいまでの冷酷さから私たちは遠ざからなければならない。死を強制される労働の拒否こそ私たちは支えるべきである。

(中略)

直接の被害を受けずにいるすべての人々に私たちは呼びかける。圧倒的な津波や火災のスペクタクル、圧力容器内の水位を伝える字幕の数々、御用学者の言う「直ちに健康被害はないレベルです」というコメント、これらの無限ループ映像に曝される日々から抜け出そう。この「情報被曝」は私たちに「祈るしかない」という無力感を作り出し、今回の事態に責任を負うべき者や制度をあいまいにする政府・電力会社の言いわけへの同意を作り出している。いつときも早く、この「情報被曝」による被災から回復し、責任者を名指し追及することが必要であると私たちは考える。』

(他に、山口素明「だれも殺すな」(「現代思想」特集東日本大震災 2011年5月参照)

## 〈注・2〉 「命の値段」に「祈る」前に行動しよう

『さぶろうです。

こちらのメーリングリストで原発の状況について一喜一憂しているみなさんへ。  
原発労働者、特に危険な作業に従事させられる労働者がどのような人々であるのかに思いを馳せたことはありますか？

首都圏内で恐怖に怯えつつ室内に留まることは自衛として当然至極なことでありましょう。

しかし、少なくともわたしたちは今いる場所から逃げることができます。

正確に言えば「逃げる」という選択肢を享受できる立場にあります。

まどろっこしいので端的に述べます。

現在原発の災害復帰に従事している作業員は「逃げる」という選択肢すら奪われていません。

少なくとも現段階で現場作業に従事するということは、爆発による即死というリスクがかなり高いのはいうまでもなく、高濃度の放射線に曝された故に発症するであろう被曝症状は、「高みの見物」で今日明日の被曝を論じ合っているわたしたちよりも確実に早回しのごとき速度で現れます。たとえ復帰作業に成功したとしても、原子炉の傍で「決死」の作業をしている労働者は、「それ」に比べれば「はるかに安全圏内」にいるわたしたちよりも確実にその身体は放射能によってボロボロに蝕まれているのです。誤解して欲しくないのは、今や「安全圏」に居住しているとされたわたしたち首都圏住民の居住地が「実は安全ではなかった」という事態について無化せよ、ということなのではありません。被曝者、または限りなく被曝予定者となった今現在のわたしたちだからこそ実感を以て想像力が喚起されることが可能になったのだ、ということをお述べたいのです。

(中略)

高濃度の放射能が飛び交う中で労働を強制される「決死隊」とはこのような賃金で働いている人々です。寒村の農業従事者、漁師、土木作業員、建築作業員、そしてそれだけでは到底賄えませんが求人場所は必然的にアンダーグラウンドの求人組織を通じて確保されることとなります。そのアンダーグラウンドの「場所」とはまさに「寄せ場」のことです。

その日の職にアブレたら食べる＝生きていくことができない下層労働者に職業選択の自由などありません。野宿している駅や路上から、スポーツ新聞の求人欄から、はたまた東京の山谷、大阪の釜ヶ崎、横浜の寿、名古屋の笹島、福岡の築港で、現場手配師によってかき集められた下層労働者が文字通り「寿命を物理的に縮める」ことをひきかえとして、それにひきかえするならばあまりにも安すぎる賃金で働いているのです。

震災と事故の前、仮に反原発運動に関わってきたという免罪符をもっていたとしても、身体と生命と賃金を搾取されまくっている原発労働者に「決死」の作業を「強要」するのであ

れば、誤ったエネルギー政策を領導した政府役人や電気産業はいうに及ばず、ネット右翼やプロ奴隷の連中が利己主義的に叫ぶ「決死隊よ頑張ってくれ」などというおためごかしと何ら変わる事などない。

「臨界が起きないように何とか頑張ってもらいたい」と反原発運動陣営が叫ぶとき、わたしたちは文字通りの「いけにえ」として原発労働者の命が消滅することを意味しているのだ。なんという茶番だろう。電気消費者として政府や東電に事態の收拾を求めているわたしたちは、「今後何不自由なく生きていくことができる」というささやかな望みさえ奪われ、逃げ場を絶たれた絶望の労働＝死を約束された労働を彼らに強制しているのだ。

(中略)

「特に原子力発電所の設置を反対していた人達も、ここぞとばかりに前に出てきていますが、今のあなたがたにそんな批判をされている人達こそが、放射線の恐怖と闘い、被害をこれ以上大きくないように頑張っている人達なのです。」

この能書きを翻訳しましょう。

「私は反原発運動が政策提言することに反対します。なぜなら原発労働者が彼らの命と引き換えに献身的な活躍をしてくれているからです。こんなことをいうわたしだが、もちろん原発労働者じゃないですよ。原発労働者に較べればはるかに安全圏な居住地から物言っていますよ。私は確かに彼ら原発労働者に対し「死んで来い」と命令する政府と東電に間接的な加担をしているが、直接「死んで来い」と命令しているわけじゃないので心など痛くも痒くもありません。政府が「死んで来い」と命令するんだから、彼らの約束された死に対してわたしは責任などとりませんよ。挙国一致だから、右から左までまったく同じことを口にしないでくださいな。その言葉とは「命を捧げてくれる原発労働者に感謝しましょう」というスローガンです。みんなが同じこと言っているので原発労働者に死を強制したことに良心の呵責などあるわけがないじゃん。原発事故が起こったという存亡の危機にあるので、政府の命令には従いましょう。政府を批判しちゃいけないですよ。政府や東電を批判する人間はファシズム体制建設の邪魔になるので、黙っている」

(中略)

「祈り」や「誇るべきニホンジンの精神」などという薬どころか毒にしかならない醜悪な「呪文」を唱え、まき散らすことではない。

わたしたちがやらなければならないことは「決死隊」に対して「死を強制する命令発動」を中止させ、原発労働者に一方的に与えた苦痛を詫びなければならないのだ。それは私自身も当然断罪されるに値する者でもあるのだ。第二次大戦中、「特攻隊としてお国のために立派に散華してくれ」と前線に送り出した「民衆」と何ら変わりはないではないか。わたしは批判を承知で発言する。「原発労働者よ、自らの死を強制される労働から逃亡せよ」と。わたしは政府、電気会社、国粹主義者、ファシスト、利己主義者どもと一緒に「決死隊よ死に行け」と叫びながら「有事局面を乗り切るための一致協力体制＝大政翼賛会」に糾合されていく自称『市民』活動家どもと一緒に線を描くことを宣します。実際に街頭に出

て抗議の声、批判の声をあげなければ、このクニのエネルギー政策を変換させることなどできないじゃないですか。「祈り」や「呪文」などアヘンのような害悪でしかない。敵はだれなのか、責任を誰に取らせなければならないのか、その能動的実権を持っているのは民衆の側です。「祈り」や「呪文」でごまかしを図ろうとする背後襲撃者はしっかりと民衆の戦線から放逐しましょう。戦時中の転向者のように、戦後の労働運動での第二組合のように、「味方の振りをして背後から襲撃を行う」者たちほどタチの悪い者はいなかったではないですか。

放射能降り注ぐこの東京にて、これまでの政府が行ってきた過ぎたるエネルギー政策に抗議するデモや集会を開催しよう。

「祈り」などという「無力なあきらめ」を捨てよう。

排外主義とコインの裏表である「自民族無条件賛美」という毒薬に酔いしれることを放棄しよう。

東京電力に対し、生命の浪費とリスクを担保に金儲けに邁進してきた悪業を糾弾しよう。政府と東電にすべての経済的損失を補償させよう。

2011年3・11を転換点として、原子力に依存しないエネルギー政策を確定させよう。

原発労働者に「死んで来い」と発令することを直ちに止め、特攻の如く死への片道切符を強要することに反対しよう。

すべての原発労働者に命を削ったことへの正当なる対価を支払いましょう(能動)／支払わせましょう(他動)。

(中略)

※それでも「メルトダウンが怖い、なんとかしてくれ」とおっしゃるあなたへ。

「あなたにもできる一つのこと」があります。

あなたが原発労働者となってベントを開放し、炉心への注水作業をおこなってください。

自分以外の誰かが何とかしてくれるだろう、という他力本願はよくないことです。見て見ない振りは通用しません。

自分だけ助かりたいので他人の命を強制的に差し出す、なんていうことで救済されようとするのは利己主義です。

原発労働者になれば確実に寿命は縮むか失いますが、それで数千万人の命が救われます。散華するのはどうですか？

さらに言えば、かなり高い割合で命を失いますが、日当として9千円以上お支払いすることはいたしかねます。

「死んで来い」と命令する側になって良心の呵責に苛まされるよりも、喜んでその命令を受け入れることができる方は是非志願してください。

そうです。

「自分がやりたくないことを他人に押し付けるな」ということです。』

## 〈注・3〉 「福島 フクシマ FUKUSHIMA」

( <http://fukushima20110311.blog.fc2.com/blog-entry-54.html> から。なお、収録したものには、「掲載にあたって特定を避けるための配慮をした」と特記されていることに注意したうえで貴重な「証言」として採録する。——以下は、4部構成になっている。〔Ⅰ〕被曝することが仕事 〔Ⅱ〕中抜きとピンハネ 〔Ⅲ〕地元労働者と新たな貧困層 〔Ⅳ〕原発労働の現場と反原発運動とのかい離)

### 『Ⅰ』 被ばくすることが仕事

大西: 社会運動をずっとやってきたのですが、3・11と原発事故という事態に衝撃を受けたということです。

もともと、反原発・脱原発の運動には、チェルノブイリ事故(1986年)あたりまでしか関わっていませんでした。3・11が起こって、「反対運動を継続してこなかった」という自己批判ですね。そして、「自分が関わるとしたら、中途半端には関われないな」という気持ちからです。

また、反原発運動をやる場合、やっぱり原発労働の実態を知らないのはおかしいのではないかと。現場に実際に入らないとわからないことがたくさんあるだろう。隠されていることがいっぱいあるだろう。これはもう、働くしかないな。働いている中で調べるしかないな——ということから、原発労働に従事することを決意しました。

さらに言えば、1F[福島第一原発]の事故収束から廃炉作業には、これから、数十万人、百万人単位の人が必要になる。そのとき確実に言えるのは、新たな原発労働者の層は、プレカリアート[※]といわれている人びと、貧困に陥った若年労働者になります。この人たちが危険な現場に入ったらどうなるのか。僕は、労働運動をやっているのだから、その観点で、少しでも現場を見ておかなければならないと思って入りました。

(中略)

大西: 放管(ほうかん)です。放射線管理員。

現場から戻ってきた作業員や車両のサーベイと除染、それから作業現場のサーベイ。大体、こういう仕事です。

簡単にいうと、そこら中が汚染状態なので、免震重要棟[対策本部がある]とかJヴィレッジ[20キロ圏の境にある出撃拠点]に、汚染物質をいれないために配置されています。

今は逆です。全てが放射線管理区域の状態、この建物の中に、汚染物質を入れないために配置されているんですね。もちろん免震棟も線量は高いんですけど、外は全て危険だから、建物の中だけでもなんとか守り切る。最後の砦を守る仕事です。

(中略)

現場に着いたら、サッと持ち場に着いて、ビュッと仕事をまとめて、サッと現場を出るという形です。

(中略)

—— 放管は、「線量が高そうだ」というところに、最初に行くということですね？

大西： そうです。「ここはこれだけの線量がある」ということを、事前に把握して、「今日は向こうの方はだめだから」とか、「今日はここだけだったらいいですよ」ということを作業者に伝えます。

(中略)

大西： 原発労働に入って一番最初に何を言われたかという、「原発労働は服を着ること自体が仕事だよ」と。服を着替えること自体が、もうすでに仕事の一環に組み入れられているという特殊な仕事という意味です。

(中略)

装備を最高レベルにするために1時間近くかかります。だから「服を着ること自体が労働」というのです。手袋をはめるのも労働です。手袋だって、綿手袋をして、その上にゴム手袋を2枚します。

(中略)

大西： 管理することを、東電が投げていると思います。

これだけ膨大な人が、炉心での作業と同じような状態で、働いているわけです。

今までなら、一人を炉心に送り出すのに、宇宙飛行士を送り出すようにやっていたけど、今、その基準でやったら、どれだけの人がいるのか、という問題になって、「もう無理、管理しきれない」と、完全に感覚が麻痺してしまっているように思います。

(中略)

原発の正常運転時でも24時間ですけど、今は、悪化させないために、とにかく人が入り続けられない構造になっています。

生産性のない労働なんですけど、それがないと収束もしないという状況なのです。

(中略)

要するに、原発労働では、いくつものグループがあって、それが順番に同じ作業をやっていきます。交代制をとるのは、被ばく量を平準化するためです。そのために、たくさんのスペアを用意しながら、人を回転させていくのです。

(中略)

大西： 流します、結局。世間では除染と言っていますが、僕らは、笑って「移染だよね」といっています。

(中略)

最終的には海に行くのです。

(中略)

1日、2～3時間の作業で、0.5から1ミリシーベルトです。これが1日の積算の被ばく量



です。

さらに、水漏れなどが起こると、その修繕作業で、汚染者が続出します。

タービン建屋なんかに入ったら、1日20分ぐらいで、5ミリシーベルトも浴びてしまいます。

平常時だったら、20ミリシーベルトを浴びたら、東電管内では、仕事はできなくなります。1日で1ミリシーベルトだったら、20日も働いたらおしまい。1日で5ミリシーベルトなら、4日で終わりです。

(中略)

原発労働は、「線量を浴びることが仕事」ということなのです。

(中略)

現場では、「ご安全に」とあいさつします。「いってらっしゃい」という意味で使うのですが、実は、この言葉は、炭坑労働者が使っていた言葉です。危険な現場に行くという意味で、それが引き継がれているのですね。

(中略)

大西： 放管ですから、全ての人の顔を見ます。そうすると、結構、「放射能焼け」で、顔が真っ赤な人いっぱいいます。

(中略)

最初は偽名で入る。次に本名で。また偽名で。同じ人が別名で、2回、3回と働いているということです。別人になると、放射線被ばく量がゼロから始まりますからね。

それで、行方不明ということになるわけです。地元にはないとこの感覚が分からないでしょう。原子力村の末端では、こういうことになっているわけです。

## 【Ⅱ】 中抜きとピンハネ

(中略)

## 【Ⅲ】 地元労働者と新たな貧困層

(中略)

大西： 原発労働者の出身は、ほとんどが原発立地周辺の市町村です。いまでも収束作業をやっているのは、泊、福島、柏崎、福井、浜岡などの人たちです。

僕の今の実感としては、8～9割ぐらいかなと思うくらい。

なぜそうなっているかという、自分の地元だから何とかしないと、という気持ちがあります。それから、それで食ってきたから、それ以外の仕事ができない、ということもあります。二重の意味で、閉鎖的な環境で作業が行われているのです。

東京・首都圏という電力の消費地が、福島や新潟のような地方を、ある種の植民地にしたような状況にあると言えると思います。経済的に見ても、歴史的に見ても、東北というのは、低開発になるようにずっと強いられてきた。そういうところに、「雇用を生み出しますよ」

という形で提示されたのが原発ということなのでしょう。

(中略)

#### 【IV】 原発労働の現場と反原発運動とのかい離

—— 原発の現場に入って、労働者の命と権利を守るための方向は見えませんか？

大西： むしろ簡単ではないことが分かりました。

東電から元請けに発注し、その元請の労働者クラスが、自分の同級生だったりするというムラ社会です。そのようなムラ社会の中に、労働運動をもちこむことの難しさがあります。

危険な状況にあるのは確かだけれど、声を挙げたら一生食えなくなる、もしくはムラ社会から外されてしまうという道を選べないと思います。

—— 原発事故という形でこの社会の根幹は揺らいでいます。そういう事態の中で、住民運動・市民運動・農民運動などが大きく動き始めています。その全体の前進の力で、原発労働の厳しい現実をも跳ね返す空間を作っていくということではないかと考えますが？

大西： 僕も、いまそういうことも考えています。

ただ、現状だと、それを一緒に作っていくという方向に、反原発運動の側が向いていない。逆に原発労働者を孤立化させるように、運動の側が、世論を形成しているように感じられます。

——それはどういうことでしょうか？

大西： 「東電社員の賃金なんかカットしろ」といったことを運動の側がいますよね。もちろん東電は悪いですよ。

だけど、そうすると何がカットされるかといったら、東電社員の賃金もカットされますが、作業員の賃金もカットされるのです。

本当にひどい構造なんですよ。運動とか世論がそういう風に利用されてしまっているのです。

例えば、「東電を解体しろ」と言う。そこら辺までは分かります。

でも、東電や協力企業を全て潰してしまったら、実は、原発が動かないという次元の問題ではなくて、収束や廃炉の作業ができなくなってしまうんですよ。

(中略)

—— 作業ができなくなるとは？

大西： 実は、原発労働者が足りなくなっています。

放射線管理手帳をもっている労働者は約8万人。意外と少ないんです。しかも、その内の3万5千人が、もういっぱいまで浴びています。9カ月で半分に減っちゃったんです。たぶん今のペースで行くと(2012年)夏ぐらいには、原発労働者の人数が枯渇するんです。

そうすると1Fの収束作業ももちろん、他の原発の冷温停止を維持することさえもできなくなる危険があるんですよ。

まして廃炉というのは、1Fの作業で分かる通り、人数がものすごくいる。54機全部を廃

炉にするというなら、数百万の労働者が必要です。

——そういう問題として受けとめていませんでした。

大西： 収束とか廃炉とかの作業を、原発労働者がやっているという感覚を運動の側が持っていない、身近なものとして感じていないという気がします。

「廃炉にしろ」と、東京の運動が盛り上がっているんですけど、語弊を恐れずいえば、特定の原発労働者、8万人弱の原発労働者に、「死ね、死ね」って言っているのと同じなんですよね。「高線量浴びて死ね」と。自分たちは安全な場所で「廃炉にしろ」と言っているわけですから。

原発労働者を犠牲に差し出すみたいな構造が、反原発運動に見られると思います。

そういう乖離した状況があるので、福島現地や原発労働者の人と、東京の人が同じ意識に立って反原発・脱原発の方向になることが簡単ではないと感じています。

—— 廃炉というテーマに、自らの問題として向き合う必要があると。

大西： そうですね。廃炉という問題にたいして、みんなが少しずつ浴びてでも作業をするのか、「いや、原発反対なんだから作業もしないよ」というのか。「被ばく労働なんてごめんだ」といってしまうと、では廃炉の作業はどうするのか。東北の人に押しつけるという意味でしかないですね。

希望的理想的に言えば、1人が100ミリシーベルトを浴びるんじゃなくて、100人で1ミリシーベルトを浴びようよと。

しかし、現実的には、みんなが、そういう気持ちになるというわけにはいかないと思います。とすると、2つ道があります。

1つは、原発労働に従事するからには、被ばくするわけだから、「健康の問題について、一生、みます。もし何かあったときは補償もします。賃金も厚遇します」という風にするべきです。もちろん中抜きはありませんよ。準国家公務員みたいな形で雇ってね。

もしくは、2つ目は、徴兵制みたいに、「何月何日生まれの何歳以上の人は、ここで1週間、被ばく作業をして下さい」みたいに強制的にやるか。

後者は、すごくいやなんですけど、でも僕が、実際に原発労働をして思ったのは、これは、反原発運動をやっている人は、全員やったほうがいいんじゃないかなということです。

反原発だけではなくても、もしそこで原発の電気で恩恵をこうむっているんだったら、やるべきなのでないかという気持ちになっています。

(中略)

大西： そうですね。東京の人びとは、一方的に電力を享受してきた立場で、福島・新潟というのは一方的に作って送り続けていく側。福島の方は、一切、東電の電気を使っていません。

そこで問題なのが、圧倒的多数者の東京・首都圏の人たちが、少数の福島・新潟などの原発立地周辺の人びとにたいして、ある種の帝国主義による植民地支配のような眼差しをもっていることです。それは、権力を持っている者、為政者と全く変わらない眼差し・同じ

ような意識です。

それは、運動の側でもそういう眼差し・意識に立っています。それがものすごくこわい。このことに思いが至らなかったら、たぶん反原発運動はおしまいじゃないか。

—— これは、沖縄の側から米軍基地問題で提起されていることと通底しているのでは？

大西： 全くその通りです。僕も、そこにつなげようと思っています。

琉球民族の土地に基地を押し付けるというのはまさに植民地問題なんです。

(中略)

そういう意味では、為政者・体制と同じ眼差しで琉球民族を支配してます。

それと同じ構造が、今度は、首都圏が福島や新潟にたいして行っています。

(中略)

大西： そうですね。沖縄と東北地方に矛盾を押し付けることで、帝国日本が成り立ってきたわけです。その問題が、こんな形でだけれども、ようやく見え始めてきました。

この切り口をどうやって、本当にこれまでの運動の反省と転換ということに持っていけるのだろうか。それができなかつたら、本当にもう大変なことになるなという気持ちです。

(中略)

—— 全国で、「ガレキ受け入れ反対」が運動化していますが。

—— たしかに、ガレキ問題は、放射能問題を考え始める契機としてあると思いますが、なぜ東京に電力を供給する原発が福島にあったのかとか、汚染と被ばくに苦しむ福島の住民や被ばく労働を担う原発労働者の存在といったことに思いをはせるということがないと、先ほど言われていた「為政者と同じ眼差し」になって行きますね。

大西： そうです。

福島の方に、クソをずーっと貯め続けていて、そのクソが飛び散ってしまった。

東京の人は、「クソが飛んできたじゃないか！」って文句を言っているけど、

「それ、あんたが流したクソでしょ」って。

自分のクソの処理ぐらい自分でやらないと。せめて「いっしょに掃除しましょうよ」というふうになりたいんですけどね。反原発であろうと推進派であろうとね。

ところが、反原発運動をやっている人は、自分たちは被害者で、まったく罪はないという風に思っていますね。

—— たしかに、反原発の人でも、加害の問題を提起すると反発しますね。

大西： そうですね。そこにどうアプローチするか。

原発を、消極的であれ、積極的であれ、「推進してきた側と同じ歩調でいたんだよ」ということを、分かってもらうためにはどうしたらいいのか。

難しいと思うけど。

ところで、『月刊 政経東北』という月刊誌が、福島にあります。その昨年 11 月号の「巻頭言」で、次のように呼びかけています。

「・・・霞が関の関心は、大震災・原発事故から年金制度改革やTPPなどに移りつつある。補償も除染も震災復興も不十分な中、抗議の意味を込めて、汚染土を国と東電に返す運動を進めたい。送り先は次の通り。・・・」

—— 被害意識から運動が始まるとしても、その意識をどう発展させられるかですね。

大西： そうですね。最初の意識は、被害者であっても構わないと思います。

被害者の自覚も大事です。ただ、そこから、自分は加害者でもあったんだということへの気づきが大事です。

被害者意識に留まったら限界になります。

被害者意識から始まって、加害性に気づいていくのですけれども、実は、さらに、そのあとが重要ではないかと思っています。

昔あったような総ざんげに陥ったら、今度は、責任を不在にしてしまうんですね。

本当の次の段階というのは、「自分たちにも加害責任があるんだ」と気づいたら、「では何をしたらいいのか」というときに、本当に戦争犯罪人を自らの手で裁くことだったはずで

大西： そうなんです。人民裁判なんです。

一人ひとりと対話して問いかけていけば、「自分たちも共犯者だったんだ」という意識にはなると思います。

だけど、「では誰が悪いんだろう？」ということで、本当の原発推進派が、結局、曖昧にされてしまうということになりかねない。

そこで、第3段階目。被害者意識が第1段階、加害者性の自覚が第2段階だとすれば、そこから国民総懺悔ではなくて、「本当の犯罪者をきっちり人民の手で裁きましょうよ」という動きにもってかなくちゃいけないと思います。

今は、まだ、第1段階の「自分達は被害者だ。ああ、東電ひどい」という形で進んでいる状況です。

大西： そうですね。

福島のひとつたちの顔や、原発労働者の顔を思い浮かべて運動をしたら、東京の運動は、被害意識に留まっていることはできないはずで

同じことですが、廃炉というスローガンが、観念・抽象の世界にどんどん進んでいくなあという感じがしますね。

—— 東京の現場の人たちと、この問題での討論は？

大西： 僕と意識を共有している人もいます。

その人は頭を抱えていますね。運動が、「ガレキ受け入れ反対、受け入れ反対」と、だんだん感情的になっていることに、「ちょっと違うんだけど」と言っています。

—— そこで運動にかかわっている中心的人たちの意識や大衆的な論議が重要では？

大西： そうですね。

可能性はあると思っています。

そもそもこれまでの労働運動のあり方自身が壁があったわけで。そういう壁を突破していく意味でも、この議論は必要ですね。』(なお、以上で採録したものと同一内容のものが「情況」2012年7・8月合併号に「原発収束作業の現場—ある運動家の報告「聞き手奥村岳志」として掲載されていることをことわっておきたい。)

## 〈注・4〉 「第4章 原発事故収束作業の実態」の部分

### 『原発事故収束作業の実態を記録するために

私は、福島第一原発で事故収束作業員として働いています。2011年9月から福島第二原発で、後に福島第一原発で、作業員や車輛、環境などの放射線測定などを行っていました。

私たち下請労働者の中には、日給6,000円とか8,000円という、被ばく労働に従事するにはあまりにも不当な賃金しかもらっていない人々が多数います。

(中略)

このように過酷でありながらも、なぜここで働かなければならないのか。たとえ薄給であっても生活するためには、将来に健康リスクが生じるかもしれないと思われる収束作業という仕事を選択せざるを得ない人々が収束作業労働者として働いているのです。

これからの収束作業は、福島第一原発、第二原発立地周辺市町村からなる福島県浜通りの人々と、貧困にあえぐ人々(私のような)によって担われることになるでしょう。先日は、1稼働で160 $\mu$ Sv以上の被ばくを強いられました。「生活のためならば健康を犠牲にしても危険な労働に従事する、するしか選択肢がない」という現実的な生存の問題としても、辞めたくても辞めることができないのです。

私は後世に、この悲惨な現実を伝えるために、現場で生活し記録する作業を、使命感を保持して実行しています。未来、近未来のプレカリアート(不安定な労働や生を強いられている人々のこと)の仲間に向けてのメッセージを作成するために。

以下は、その記録の一部です。

(後略)』

## 〈注・5〉 フリーター全般労組：原発収束作業員の闘いが始まった(Spider's Nestから)

『原子力企業〇〇は指揮命令をしていた作業員への雇用責任を果たせ！

当組合の組合員は、今年1月から〇〇県に本社がある有限会社××を通じて、福島第一原発の収束作業に従事してきました。ところが、実際に現場で日常的に指揮命令していたのは、東京に本社がある原子力発電所保守管理の大手企業である〇〇の社員でした。

組合員を指揮命令して働かせてきた〇〇社は、××社に仕事を発注している元請け会社ですから、本来的には指揮命令してはならない立場です。もし指揮命令下に置いて使用するなら、〇〇は組合員を直接雇用する責任があります。ところが〇〇社は、××社を間に通すことでその責任を逃れてきたわけです。

そして今月5日、××社は組合員に電話で解雇通告をしてきました。××側の説明によれば、〇〇社と××社との契約が10月末で切れるので、福島営業所を閉鎖することでした。会社の寮に住んでいた組合員は、11月5日付で解雇されると同時に住居を失う危機に直面しました。

このような状況を踏まえて組合は、××社には、解雇撤回と交渉期間中の住居確保を求めて、〇〇社には、ごぼうさんの直接雇用を求めて、団体交渉を申し入れました。うち××社とは、10月26日にいわき市内で交渉を持ちました。その場で住居の確保は11月末まで約束させたものの、解雇の撤回には至っていません。

一方、〇〇社は交渉による問題解決を拒否しています。福島原発で当該作業員を使用していた事実があるにもかかわらず、雇用関係がない、などと開き直り、労働組合の交渉権限すら否定してきたのです。作業員を使えるだけ使い、使用者としての責任を果たそうとすらしらないでいるのが〇〇の現状です。組合は〇〇のこの不当労働行為について、11月5日付で東京都労働委員会に救済を申し立てました。

#### ◆何が問題なのか

私たちの社会の労働環境は、重層の下請構造の下で株主や経営者、政府がとるべき責任を免れることが常態となっています。とりわけ原発は、幾次にもわたる下請け会社(協力企業!)を通して、作業員を柔軟に雇用し解雇できる仕組みを維持することで、都市貧困層と原発立地地域住民など特定少数者に被ばくを強制して動いてきました。事故後の収束作業や将来の「廃炉」作業でもこの仕組みはまったく変わっていません。

今回の解雇問題によって、当組合の組合員をはじめとして××社を通じて働いていた作業員は、これからどうやって生活を維持するのか、別の仕事を探すのか、知り合いに頼みこむのか、など日々を問われることになってしまいました。

しかし本当に問われるべきは現場の作業員ではないはずです。雇用していた××社、××社を切った〇〇社、〇〇社を締めつけている東京電力、それを支えて原発を推進してきた経済産業省・文部科学省、そこから配当を受け取ってきた株主たちです。

彼らこそ被ばくを強いられながら働いてきた作業員の雇用や生活に責任を持つべきです。私たちは真に問われるべき者たちを問いましょ。原発収束作業員が開始したこの闘いに支援をお願いします。』

## 〈注・6〉 同上

『いち収束作業員の話を書く。

「福島第一原発で作業員は何を考えたか？—いち収束下請作業員の話を書き知り開くこの社会」

日時: 11月17日(土) 15時から

場所: フリーター労組会議室(渋谷区代々木 4-29-4 西新宿ミノシマビル2F)

主催: フリーター全般労働組合

事故後1年8ヶ月を経過しましたが、今も廃炉への見通しの立たない収束作業が続けられており、福島第一原発では毎日約3000人が稼働し被ばく労働をしています。不足する労働者は全国各地から集められていますが、非正規・下請け労働者の権利は守られているとは言いがたく、雇用関係や安全管理の曖昧な重層的下請け構造は放置されたままです。

原発事故で飛散した放射能により、除染、下水処理場、清掃工場、港湾、運送、鉄道などの様々な労働現場で労働者の被ばくが深刻な問題となっている中、十分な対策をしている企業はどれくらいあるのでしょうか。

新聞・テレビで作業員の労働環境の問題が報道されるようになり、ようやく私たちにも収束作業員が、どのような環境で労働をしているのか？ どのような待遇で雇用されているのか？ 作業員は足りているのか？などが少しずつわかるようになってきました。

今回の集会では実際に福島第一原発で収束作業に従事していた”ごぼう”さんをお招きし、いち作業員の立場から収束作業の実態と原発下請け労働の問題を掘り起こしたいと思えます。

また福島第一の作業員はどんな人たちなのか？ なんで危険なところで働いてるのか？

日々どんな思いで、どんな仕事をしてるのか？ 仕事中以外は何をして過ごしてるのか？ など作業員が実際に見て聞いて感じた日々の出来事にもフォーカスしたいと思います。』

## 〈注・7〉 年越しも休めなかった、福島第一原発収束作業員のKさんの文章です

<https://www.facebook.com/npokakehashi/posts/455668991149151>

『総選挙の総括と分析で、まだしばらくは討論が続いていくものと思われれます。その中でみなさんに少しだけでも考えていただきたいな、と思えますことを綴ります。



私たち収束作業員で県外から来ている収束作業員のほとんどは、人事院通達で「支払うべきこと」と規定されている出張旅費を支給されておられません。また、作業のシフトの関係で、たとえ帰省旅費が人事院通達通り正當に支給されたとしても選挙権を行使することなどできません。私達がシフトを抜けるということは、事故の再発を意味するからです。

帰省旅費を通達通りに支給する会社は御用組合電力総連や電機連合に「加入できる」ほんの一握りの元請企業だけで、ほとんどの作業員は帰省するお金などないのが現状です。2012年12月8日朝日新聞夕刊に報道されている通り、「投票」という権利が実質上奪われているのです。

そもそもが「選挙権を行使する」という社会参加の枠組みから排除されている人々が収束作業に従事しているのです。「日本人」ではないが故に「選挙権」から排除されていたり、下層労働者故に選挙権が実質的に剥奪されている人も周囲にたくさんおります。

収束作業は、世の中が選挙であろうとなかろうと地道に、「市民」が知らないような場面で展開されています。私は2011年から2012年の年明けはJビレッジで完全装備を着用後、「復興」されることなく放置されたままガタガタの悪路と化した国道六号線の大熊町内で、域外持ち出し不可=汚染車輛であるイチエフ往復専用通勤車両の中にて迎えました。

私たちはお互いに「あけおめー」と言い合いました。しかし全面マスクを着用しているので相互の声は「モゴモゴ」としか聴きとることはできません。全面マスクで発する自分の声は減衰しますし、暴露防止のためタイベックに密着するよう全面マスクをテーピングしているので周囲の音も遮断されているのです。悠長に「あけましておめでとうございます」などという「おしとやかなご挨拶」はお互いに聴き取ることはできません。

「あけおめー」というお互いの存在を伝え合うべく短い造語、それは年末年始のシフトでも働かなくてはならない自分たちの不安をかき消すために発した言葉でもあります。収束作業に従事する人員が通常よりも少なくなる年末年始のシフトにて、「何かあった時」はイチエフの現場に踏みとどまらなくてはならない「人柱」としての役割が課せられていることを意味していることを自覚しているからなのです。越年をイチエフで迎えるにしても特段の配慮など一切ありませんでした。賃金も特別な手当などで一切支給されておられません。

私たちは通常、往復の通勤で15 $\mu$ Svの被曝に晒されます。Jビレからの「通勤」自体が「市民的日常」とは別世界のものなのです。

「原発作業員の母」である木田さんの息子さんはつい最近まで「東京電力逆出向社員」でした。一般社会の「出向」は親会社から子会社・関係会社へのものが通常なのですが、東電逆出向のシステムは全然別物です。下請け会社から元請会社を一足飛びで抜いて「東電社員」として扱われる「制度」です。下請会社無保証・低賃金の体系のまま、身分上だけ「東京電力社員」となります。端的に言えば「制服だけは東電社員」という身分です。なぜこのようなシステムになるのか。端的に言えば、市民社会が「東京電力社員の犠牲者」を要求しているからです。東京電力社員は収束作業のなかでも危険なところに従事しろ、という要求は、「東電社員ならば死んでもよし」という社会的な懲罰を欲しています。

その要求への対策として「危険被曝労働専門作業員」としての逆出向制度が存在するのです。

わたしたち市民社会は、「自分ではない誰か」を犠牲者として差し出すシステムをこそ問わねばなりません。そしてその犠牲として供される者とは「市民社会」から排除された人々です。「日本人」や「市民」、そして「選挙権」から排除されている人々がイチエフの事故収束作業に多数従事していることを知っていただきたいのです。年末年始を故郷で過ごすための旅費を支給されないために帰ることもできず、また、シフトから抜けることを「市民社会の要求」の帰結として許されざることであることをも認識していただきたい、と切に願うものです。今回の越年は、イチエフで迎えるシフトでは「たまたま」ありません。極端に人員が減るこの一夜、無事に仲間たちが過ごしてくれますよう「存在するはずのない神」に祈るものです。「緊急事態」が発生しませんように。私は「何事かある場合」に備え、待機いたします。』

## 〈注・8〉 ノーニュークス・アジアフォーラム・ジャパン主催 （「アジェンダ」No.40(2013年春号)から）

『福島第一原発（以下、「イチエフ」と略）で収束作業をしております北島と申します。私はチェルノブイリ以降、反原発運動に携わってきた中で3・11を迎えました。被災地支援で真っ先に女川原発のある女川町、そして南柏馬、いわき市に行き、そこから双葉郡民が避難している会津地方、東京、埼玉に行き、双葉郡民の人たちと話しているうちに、都市に住んでいる者の「犯罪者性」、「共犯性」のようなものから、「自分は収束作業に行かなくてはならない」という想いを強くして、まず福島第二原発に入り、それから福島第一原発の収束作業に入りました。

（中略）

### ●収束作業員が足りない！

今、公益財団法人放射線影響協会が発行している「放射線管理手帳」の登録者数は約8万人です。今までイチエフの収束作業にかかわったのはおよそ3万人。つまり残りは4万数千しかいません。しかもその中にはリタイアした方や、検査のために一回だけ入ったような人も含まれますから、実数は本当に残り少ない数しかいません。

現在イチエフで収束作業従事している作業員は毎日およそ3千人です。そこで今差し迫っているのは現場の放射線の線量があまりに高すぎるために、労働者のサイクルがものすごく短くなっていることです。3・11以前なら信じられないことですが、イチエフでガレキの撤去作業をすれば一カ月や二カ月で50mSv浴びてしまうのです。そうすると、法律上、次の4月までは原発での仕事できません。そのようなことがくり返されると、まずベテラン

の作業員が線量がいっぱいになってしまい、イチエフの収束作業に従事できなくなります。そのために、放射線下でどのように作業をしなければならないかを伝承する時間がなくなります。原発労働における注意事項のようなものが伝わらなくなって、放射線災害が起こりやすい本当に危険な現場になっていきます。

## ●収束作業員の日常

私は放射線取扱主任者なので放射線管理という部署で働いています。壊れていない原発だったら本来は線量計画を作ることからきちんとやっていく仕事なのですが、今は特に危険な状況が万が一にでも起こらないように、人体や環境、物体の放射線量の測定をしています。また、イチエフサイト内を監視・測定し、労働者の被曝量を測定したり、一番危険な前線に行ってきた労働者の衣服の脱着の手伝いをしながら、放射線障害防止法はじめさまざまな法律に則ってやっているのか、常に見守り管理するのが私の職務です。

私たちの日常生活ですが、例えば私は 8 間労働ですが、朝 6 時に宿舎を出発して作業をして戻ってくると大体七時です。1 日 12 時間～13 時間拘束されます。13 時間労働で 1 万円では最低賃金を割っていて法律違反なのですが、このようなことがまかり通っています。宿舎からJビレッジに向かう間にも通勤被ばくします。被曝労働の対価は通勤の段階から支払ってもらってしかるべきです。私の部署が一番安全なところですが、それでも大体 1 日に 0.14 ～ 0.16mSv くらい被曝しています。これは3・11以前には全く考えられない数値です。放射線管理をしている作業員は 2 ～ 3 年働いて 2mSv 、 3mSv いくらかないかだったのです。しかし私は今 1 カ月に 3mSv 被曝します。

労働者の日給は私もそうですが大体 1 万円です。8 千円、6 千円という労働者もたくさんいます。中には高給を取る労働者もいます。がれき撤去の労働者で、日給の他に危険手当が大体 1 万 5 千円くらいもらえます。でもその労働者たちは 1 カ月で 20 ないしは 50mSv 浴びてしまっていて残りの 11 カ月は仕事できません。その間、会社が生活を保障してくれるような制度はありません。収束作業はたくさんの被曝労働者の犠牲の上に成り立っているのです。

それからよく 7 次下請、8 次下請というような話がありますが、今はそのような状況ではありません。事故から最初の 2 カ月くらいは確かにそのような状況がありました。発注者の東京電力や国が相当なお金をつぎ込んで収束作業員を確保しようとしたから高額な賃金が提示され、中抜きする会社がいくつも入ることができたわけです。今は、イチエフの収束作業は 2 次、せいぜい 3 次下請までです。ブラック・マーケットも撤退するほどまみがない仕事なのです。

それはなぜか？ 東京の脱原発運動が「コストカットを要求する」という形で東京電力に圧力をかけたときに、真っ先に削られたのが下請労働者の賃金や安全対策の費用でした。例えばマスクは去年の 2 月くらいまではヨウ素を吸着できる高性能のチャコール・フィルターがすべての収束作業員には必須でした。ワンセットで 2 千円くらいです。それがダスト・フィルターというワンセット 800 円くらいのものに替わりました。これではヨウ素は全く吸

着できません。防護服もどんどんコストカットされて、防護の性能が格段に落ちています。「東電が電気料金を値上げしないためにはコストカットは当然だ」という考え方はおかしいと思います。電気料金が上がったとしても、私たちの賃金は被曝線量に見合ったものにしてほしい。安全対策もきちんとしてほしい。でも都市部の人にはなかなかわかってもらえません。

「収束作業は東電社員がやればよい」という意見があります。東電社員が一番被曝しています。安定化センターにいる、原発立地地域地元採用の社員、福島や柏崎で採用された社員です。もちろん東京の本店採用の社員は誰一人こんな危険な作業はしません。それから下請労働者が労賃は下請のまま元請けを飛び越して東電の社員に名目上なる「逆出向社員」です。逆出向社員とは、「制服だけの東電社員」です。被曝要員として逆出向して、ものすごい危険な労働をして高線量の被曝作業をしています。反対運動が「東電の社員が収束作業をしろ」と言ったときに、そのような形でたくさんの犠牲者が出ていますが、市民運動はこのことを全く知りません。

原発作業員でデモをやるか、というような話が一瞬だけ出ます。でも数秒後に無理だとなります。原発労働者、特に収束作業員は労働者のサイクルが非常に短いのです。一カ月、二カ月、半年で人がどんどん入れ替わるので、労働組合を作りたい、みんなで賃金交渉をしたいと準備しているうちに線量がいっぱいになって、職場を離れなくては行けない。私たちは団結したくても団結できません。そのような中で推進派からも反対派からもいろんな形で私たちの健康が蝕まれ、賃金的にも搾取されています。

## ●原発を廃炉にするとはどういうことか

反原発運動のスローガンで「廃炉」というのは私も究極的には正しいと思います。しかしすべての原発を今すぐ廃炉にするとなれば人が全く足りません。8万人の10倍以上の原発労働者が必要になります。原発の廃炉作業で労働者にどのくらいの被曝量が発生するのか、本来ならそれを算定してから順次廃炉にできるものは廃炉にすることを推進派も考えていたはずですが、しかし今、イチエフの収束作業で労働者が予想外の被曝をしてしまって、もう枯渇してしまっている。今、廃炉作業をするとなったら、線量をオーバーしている人ももう一度働いて、私たち原発労働者は全員死ななくてはなりません。廃炉と言うときに、そこでどのように人が働いているのか、もっと真剣に考えてほしいです。

収束作業員は推進派にはもちろんものすごく怒ってます。こんな事故を起こして、自分たちはこんなに被曝をしながら低賃金で働かなくては行けない。自然は消費される、命は消費される状況の中で、さらに再稼働や新設までしようとしている。推進派の政策にはみんな「ふざけるな」と言ってます。

同時に反原発運動にもとても冷たい視線を向けています。「廃炉、廃炉」と聞かされる度に、「俺もう線量いっぱいだし、これ以上やったら死んじゃうよ。やだよ」と思っています。

被曝労働、収束作業は「私ではない誰かがやってくれるから、私以外の誰かにやらせて

おけばいい」と考えているから、「廃炉、廃炉」と平気で言えたりやったりできるのです。ある特定の少数の人に死ぬ事を強制することで、実は原発は 40 年間稼働し続けてきたのです。私たち原発労働者は一方的に生命を貧られています。

3 千人の労働者で、もう原発なんかどうでもいいや、賃金も安いし、拘束時間も長いし、被曝するし、補償もないし、一斉にみんなでストライキでもやろうか、爆発させちゃおうか、というような話を、よくします。でも実際にそれはできません。私たちは今、目の前にある戦場でそれを放棄することはできないという倫理感で作業をしているからです。日本と世界の安全を守っているのは俺たちだという誇りと責任感をもって働いています。しかし、この倫理感を政府や推進派の人々だけでなく、反対派の人々も悪用しています。本来であれば反原発運動が収束作業をやっている私たちに向けて、収束作業員の待遇向上であるとか、健康診断等の補償制度について、いろんな形で連携したりサポートしてくれるのが筋ではないかと思っています。でも東京でそのような発言をしようとすると、「それは再稼働反対に関係ないことなので喋らないでください」ということで私は排除されました。果たして再稼働反対というシングルイシューで反原発運動が完結するのでしょうか？ 都市部の反対運動はちょっとおかしいなという想いは収束作業に従事すればするほど増してきています。都市部の反原発運動がどのような眼差しを福島に向けているのか、それを反原発運動自身で変えていかない限り、福島の人々、収束作業員、原発立地の人々と一緒に、廃炉に向けて共に手を携えることは不可能です。

### ●廃炉作業は誰が行うのか？

もし今廃炉作業をするのであれば、非常に多くの作業員が必要となります。どうやって増やすのでしょうか？ 今、職がない非正規雇用の若者にやらせればいいのでしょうか？

外国人を移入するのでしょうか？ 原発労働はあらゆる差別構造を基盤に動いてきました。在日朝鮮人、被差別部落の人々、在日外国人、アイヌ人、琉球人、そのような日本国内本土においてあらゆる意味で下層の人々が原発労働の一番危険なところに従事してきました。廃炉作業をするのは私たち貧乏人です。お金持ちは作業しません。そこに階級があって、本当に市民として扱われない人々、日雇い労働者も含めてそういう人々の命を消費して大都市の今の繁栄があります。都市住民は加害者でもあるのだということを認識しながらいろんな発言をしていかないといけないと思います。

(中略)

私はもっと廃炉に向けた道筋をみんなで共有したい。数百年先の世代に向けて私たちが何を残していけるのか。核のゴミの処理作業ではなくて、より新しい関係、より抑圧の無い、お互いがやさしい社会を次の世代に伝えていきたい。あらゆる差別のもとで苦しんでいる人々しか収束作業に行っていないという状況について、反原発運動はもっと言及していかないといけない。私は差別を容認する社会こそが原発を支え動かし続けて来たと考えています。反原発運動はその社会構造を打ち壊して新たな関係を取り結ぶものであるべきです。

## ●原発労働者のギルド(リクビダートル)を

(中略)

原発も、職人たちが自分たちで賃金を国家と直接交渉したり、安全対策について労働者に有利なようにしたり、技術を年長者から継承できるようにして、危険ではない状況になるまで労働者を教育してから実践に入るような、相互扶助組織を作っていくべきだと思っています。もしくは準国家公務員のような形式でないと、危険な核のゴミをどうしていくのか、廃炉をどうするのかということについて民間企業に押し付けても対処できないと思います。

(後略)』

## 〈注・15〉 ごぼうさんの支援協議会の呼びかけ

**『福島第一原発収束作業員の、人間の尊厳をかけた闘いに広範な支援を！**

▼支援をよびかけます！

福島第一原子力発電所の収束作業、そして今や多くの人々が望むところである「廃炉」を遂行するには、これまで以上の膨大な被曝労働が必要となるのは、いうまでもありません。「いま、この瞬間にも」作業員は劣悪な環境で働いています。「廃炉」や「事故収束作業」は、当然にも作業員の生活と生命をまもったうえで行われなければなりません。

私たちは、作業員が直面する労働問題を自分の社会に直結する問題と捉え、支援していきます。ごぼうさんがはじめた闘いを支援し、勝利しましょう。

▼これが被曝労働の実態！

ごぼうさんは、福島第一原子力発電所の重要免震棟内で、放射線管理業務に従事していました。宿舎のあるいわき湯本からJビレッジまでは片道1時間から1時間半かかります。Jビレッジでイチエフ入域のために防護服に着替え、打ち合わせを行い、待機。イチエフでの作業時間は8時間ですが、通勤と待機に4～5時間を要し、実質の拘束時間は12～13時間。1日12時間以上働いて日給1万円、月給は手取り16万強。残業代はまともに支給されず、「危険手当(特別手当)」や「帰省交通費」などは一切支払われていません。ひと月の被曝は2～3ミリシーベルト。通勤時には往復で毎日15マイクロシーベルトの通勤被曝を強いられます。

▼収束作業員は「使い捨て」されている！

2012年10月5日、ごぼうさんは電話で解雇通告を受けました。会社側の説明によれば、「元請け会社との契約が10月末で切れるので、福島営業所を閉鎖し、福島にいる従業員全員を解雇する」とのことでした。会社の寮に住んでいたごぼうさんは、11月5日付で解雇されると同時に住居を失う危機に直面しました。ごぼうさんの加入するフリーター全般労働組合(以下、組合)は、サンシードに対してごぼうさんの解雇撤回、未払賃金の支払いと住居確保等を求めて団体交渉を申し入れ、2012年10月26日にいわき市内で交渉を持ち

ました。交渉の場で11月末までの住居確保は約束させたものの、会社の解雇の意思は頑強で、「元請け会社との契約解除に伴うイチエフ撤退」を理由に「解雇は正当なものである」と主張し続けています。組合は、会社が約束した「解雇を避ける努力をする」という団交での約束を履行しないため、東京都労働委員会に不当労働行為救済の申し立てを行いました。

#### ▼消えた「危険手当」

イチエフでの収束作業は外部被曝・内部被曝を伴う危険な作業です。東京電力は通常の労務単価に危険手当の上乗せをして発注していることが昨年11月にメディアで報じられています。ごぼうさんは作業員の労賃を管轄する東京電力資材部に相談したところ、担当者は割増の契約を元請会社と結んでいることを認めました。

組合との団体交渉で会社側は「イチエフの収束作業にあたり危険手当は元請け会社より支払われていない」と回答。一方、東電は「上乗せして元請け会社と契約している」と答えました。ごぼうさんを直接雇用している会社の「危険手当を元請け会社より受け取っていない」、そして東電の「元請け会社には支払っている」との主張がともに真実であるとするならば、本来作業員に直接渡さなければならない危険手当を不当に詐取しているのは元請け会社、ということになります。ごぼうさんの闘いは労働者に対し、被曝労働に見合った対価をキッチリと支払わせる闘いでもあります。

#### ▼原子力企業「XX社」は、イチエフ収束作業員を「偽装請負」させている！

東京・中央区に本社がある大手原子力発電所保守管理のXX社の社員は、下請けの会社に仕事を発注している元請け会社であり、ごぼうさんを指揮命令してはならない立場です。もし指揮命令下に置いて使用するなら、XX社はごぼうさんを直接雇用する責任があります。XX社は、多くの「下請会社」を間に挟み、作業員を雇用の調節弁として使いたい時だけこき使い、まるで取替え可能な部品であるかのように「使い棄て」にし、これまでも雇用責任を逃れてきたのです。

#### ▼XX社は開き直りを続けている

組合は、元請け会社のXX社に対して、ごぼうさんの直接雇用を求めて団体交渉を申し入れました。ごぼうさんに対して日常的に直接の業務指示を出していたXX社は偽装請負という違法行為をはたらいていたのです。XX社にはごぼうさんを雇用する責任があります。

しかしながらXX社は、「ごぼうさんとの直接の雇用契約がない」ことを理由に、組合との団体交渉に応じることを頑なに拒否し続けています。やむなく組合は東京本社へ団体交渉の申し入れ書を直接持参しました。しかしXX社に指示された警備員は「例の組合がきました」「早急に手順の実施をお願いします」などと団体交渉申し入れ書を届けることさえ妨害し拒否したのです。組合は、このようなXX社の団体交渉拒否の姿勢を不当なものであるとして、東京都労働委員会に不当労働行為救済の申し立てを行い現在係争中です。

#### ▼XX社現場責任者による日常的な暴力的支配が蔓延している。

自分が働いている会社ごと切り捨てられることに脅える下請け作業員たちは、XX社の現場責任者にモノをいうことができません。それをいいことにXX社の現場責任者は、下請け企業の人事や契約内容に差配を下すことができるという優越的な立場を悪用し、労働者にクビをちらつかせながら暴力的な言辞による恫喝を日常的に行なっています。下請け作業員の中には、このXX社現場責任者の「天の声」によってクビにされたり、パワーハラスメントに耐え切れなくなり「自発的に退職」させられたり、より危険な作業部署への懲罰的配置をされた人もいます。重要免震棟で大声を張り上げて下請け作業員たちを罵倒するXX社現場責任者の振る舞いは、他社を含む全イチエフ収束作業員にとって、良く知られている風物となっています。パワーハラスメントと下請け企業の従業員への業務指揮・命令、下請け企業への人事介入という違法行為を行なっているXX社の責任を徹底的に追求するものです。

▼責任を負うべきは誰なのか？

私たちの社会の労働環境は、重層的下請構造のもとで株主や経営者、政府がとるべき責任を免れることが常態となっています。とりわけ原発は、幾次にもわたる下請会社(協力企業!)を通して、作業員を柔軟に雇用し解雇できる仕組みを維持することで、都市貧困層と原発立地地域住民など特定少数者に被ばくを強制して動いてきました。事故後の収束作業でもこの仕組みはまったく変わっていません。今回の解雇問題によって、ごぼうさんと同じ下請け会社を通じて働いていた作業員は、日々の糧を突如として失ってしまいました。雇用していた下請け会社、下請けを切った元請けのXX社、XX社を締め付けている東京電力、それを支えて原発を推進してきた経済産業省・文部科学省、そこから配当を受け取ってきた株主たちに責任を取らせなければなりません。彼らこそ被ばくを強いられながら働いてきたごぼうさんたちの雇用や生活に責任を持つべきです。私たちは本当に問われるべき者たちを問いましょう。』



## Ⅱ－b. 北島教行さん＋フリーター全般労組〈補註〉(1)

### 被曝労働問題

年	Ⅲ. 〈補註〉(1) 被曝労働／原発作業員／収束労働
2011	<p>4/6 「よこはまシティユニオン」:この間の東京電力への要求と回答から</p> <p>8/8 日弁連シンポ:「人間の復興をめざして」—第1回『原発労働問題』シンポ(日弁連編「検証原発労働」岩波ブックレット 827 2012/8)</p> <p>9/20 「原子力災害対応労働者の産業保健」に関する国際シンポ</p>
2012	<p>3/10 「原発いらない地球(いのち)のつどい」 斉藤征二さん講演</p> <p>6/30 ～ 7/1 第1回 ふくしまフォーラム分科会「廃炉除染作業と労働者被曝」(「かけはし」 2012/7/23号参照)</p> <p>8/24 「派遣ユニオン」東電本社へ申し入れ 「原発作業員を『嘘の履歴書』で現場に一下請け構造不正の実態」</p> <p>9/21 日本労働弁護団:元作業員の体験を聞く懇談会 下請け労働者は訴える「原発労働者の準公務員化を」</p> <p>11/5 「作業員が去って行く—NHKクローズアップ現代」</p> <p>11/26 「週刊プレイボーイ」:「作業員が実名で告発」</p>
2013	<p>3/1 原子力資料情報室 渡辺美紀子:「福島第一原発事故収束作業の矛盾が噴出」〈注・9〉</p> <p>3/6 社会政策学会第2分科会:「東京電力福島第一原発事故収束作業と労働者」</p> <p>3/12 朝日新聞デジタル:「原発要員計画が破綻 福島第一、半数が偽装請負の疑い」</p> <p>3/20 日本労働弁護団:「福島第一での下請け労働者問題 厚労省へ要請」</p> <p>4/23 日刊SPA:「原発事故収束を担う被曝労働者の『劣悪な環境』」</p> <p>4/26 東電前アクション！声明:「『収束』労働者を使い捨てにするな」〈注・10〉</p> <p>4/28 田淵弘子(「ニューヨークタイムズ」):「東電に収束作業を完璧に行う能力がないことはもはや明白」</p> <p>5/5 元原発作業員 石澤治彦:実名証言</p>

## 〈注・9〉 渡辺美紀子:「福島第一原発事故収束作業の矛盾が噴出」(「原子力資料情報室通信」465号 2013年3月1日)

『東京電力が1月31日に公表した、2012年12月末日までの作業員の被曝線量の評価状況についてのデータをもとに、2011年3月11日から12年12月末日までの作業員の外部被曝と内部被曝の累積線量を表1にまとめた。

累積総被曝線量を計算してみると、約30万人・ミリシーベルト(=300人・シーベルト)と膨大なものとなった。うち約70%は下請け労働者の被曝である。2011年3月、事故直後から対応にあたった東京電力社員が圧倒的に大きな被曝をしたが、翌4月以降は下請け労働者の被曝が大きくなっている。

表1 福島第一原発で放射線業務に従事した作業員の外部・内部被曝の累積線量  
11月末(2011.3.11~12.11.30)と12月末(2011.3.11~12.12.31)の累積線量分布の比較

区分(mSv)	2011.3~12.11月			2011.3~12.12月			増減	
	東電社員	下請け	計	東電社員	下請け	計	東電社員	下請け
250超	6	0	6	6	0	6	0	0
200超~250以下	1	2	3	1	2	3	0	0
150超~200以下	22	2	24	22	2	24	0	0
100超~150以下	117	17	134	117	17	134	0	0
75超~100以下	217	65	282	224	66	290	7	1
50超~75以下	303	414	717	303	437	740	0	23
20超~50以下	599	2,973	3,572	599	3,032	3,631	0	59
10超~20以下	705	3,263	3,968	708	3,316	4,024	3	53
5超~10以下	162	2,836	2,998	165	2,912	3,077	3	76
1超~5以下	817	5,710	6,527	822	5,823	6,645	5	113
1以下	667	6,042	6,709	661	6,163	6,824	-6	121
計	3,616	21,324	24,940	3,628	21,770	25,398	12	446
最大(mSv)	678.80	238.42	678.80	678.80	238.42	678.80	-	-
平均(mSv)	24.73	9.71	11.88	24.79	9.74	11.89	-	-

注1) 外部被曝の数値は入城ごとのAPD値の積算値を用いているが、積算型線量計による月間線量値へ置き換えることなどにより変動することがある。注2) 2011年10月以降、有意な内部取り込みは認められていない。

本表は、東京電力が公表したデータをもとに総被曝線量を加算作成した。(原子力資料情報室)

2012年12月3日、東京電力が公表した「福島第一原子力発電所従事者の被ばく線量の全体概況について」によれば、「全体的な状況から発電所の線量は改善してきている。大半の作業員の被ばく線量は線量限度に対し大きく余裕のある状態で解除されており、その後も放射線作業に従事可能なレベル」と、きわめて楽観的に捉えている。

1ヵ月の被曝線量が10ミリシーベルトを超えた作業員数は12年10月で20人(最大16.94ミリシーベルト)、11月は15人(最大19.28ミリシーベルト)、12月は8人(最大15.85ミリシーベルト)となっている。2009年度のデータでは、作業員の年間被曝線量は94%が5ミリシーベルト以下、被曝の最大値が19.5ミリシーベルト、平均線量1.1ミリシーベルトであったことを考えると、現在の福島第一原発がいかにかびしい現場であるかが改めてわかる。東京電力は、労働者が桁違いの被曝をしていることをきちんと認識するべきである。

### 若年労働者の大量被曝

東京電力は、福島第一原発事故の復旧作業に携わった作業員の被曝に関するデータを世界保健機構(WHO)の要求に応じて、作業員の年代別線量、内部被曝線量分布、

甲状腺等価線量の分布などを2012年3月に提出した。12月6日に公表された資料をもとに年代別の被曝分布を表2にまとめた。

\*世界保健機構(WHO)へ提供した福島第一原発事故の復旧に携わった作業員の被ばく線量に関するデータについて(2012年12月6日東電公表)  
[http://www.tepco.co.jp/m/fukushima-np/images/handouts\\_121206\\_01-j.pdf](http://www.tepco.co.jp/m/fukushima-np/images/handouts_121206_01-j.pdf)  
**表2 年代別の被曝線量(内部・外部合算)分析** (2012年1月31日時点の線量)

区分(mSv)	10代		20代		30代		40代		50代		60代		70代~80代	
	東電社員	下請け	東電社員	下請け	東電社員	下請け	東電社員	下請け	東電社員	下請け	東電社員	下請け	東電社員	下請け
250超	0	0	3	0	1	0	1	0	1	0	0	0	0	0
200超~250以下	0	0	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0
150超~200以下	0	0	2	0	2	1	11	0	7	0	0	1	0	0
100超~150以下	0	0	19	0	32	2	32	5	32	6	2	2	0	0
50超~100以下	1	0	116	33	106	76	103	102	86	104	3	20	0	1
20超~50以下	0	7	108	183	175	437	208	598	145	613	5	195	0	0
10超~20以下	2	7	92	288	157	563	163	727	76	739	2	264	0	6
10以下	0	47	171	1,041	451	2,174	655	3,288	346	3,254	15	1,349	1	18
計	3	61	511	1,546	925	3,254	1,173	4,720	693	4,716	27	1,831	1	25
最大(mSv)	56.89	44.34	477.01	230.90	678.80	238.42	645.54	139.60	352.08	137.00	124.63	169.60	0.11	59.67

(東電がWHOへ提供したデータをもとに原子力資料情報室作成)

若い労働者が大量の被曝をしている。事故後、中央操作室で作業を続けた方々にヒアリングをしたとき、「最初は若い人の被曝はできるだけ避けようと、現場に向かう輪番を工夫したが、一巡したら人員が足りなくなって、若い人もローテーションに加えざるを得なくなった」という話を聞いた。平常時には中央操作室は放射線管理区域ではなかったため、線量計やチャコールフィルター付きマスクなど被曝に対する備えはほとんどなかった。また長時間、緊張を強いられる中での作業で、飲食さえも汚染した場所でせざるを得なかったことが大量の内部被曝をもたらした。

内部被曝について、東京電力は「2012年1月20日以降、内部被曝をした者はおりません」としているが、疑問である。また、東京電力は2ミリシーベルトを記録レベルとし、「記録レベル未満の線量は放射線管理手帳に記入しない」としているが、どんなに低い線量であっても記録はしなければならない。

### 原子力事業者の責任を明確に

2012年7月に発覚した鉛板で線量計をカバーするという被曝隠しは、被曝線量の測定、記録等を義務づけた電離放射線障害防止規則(電離則)の第8条、9条などに違反し、労働安全衛生法第22条で事業者が義務づけた「放射線による健康障害を防止するための措置」に違反する。

問題となった作業は、原子炉を設置している事業者としての東京電力が、関連会社である東京エネシスに発注したものである。東京エネシスは、仕事をさらに下請会社に発注し、その一部をビルドアップ社(以下、ビルド社)に請け負わせた。

労働安全衛生法第2条第3号では、事業者を「事業を行う者で、労働者を使用するもの」と規定している。この場合の事業者とは労働者を雇用しているビルド社となる。鉛カバーを思いつき実行した役員と、法人としてのビルド社が処罰の対象となった。では、原子力事業者である東京電力と元方事業者である東京エネシスの責任はどうなるのか。

厚生労働省は2012年8月10日、新たな行政通達「原子力施設における放射線業務及び緊急作業に係る安全衛生管理対策の強化について」(基発0810第1号)を発出した。この行政通達は、緊急作業を含めた安全衛生管理全般にわたるものであり、法律では義務づけられていない原子力事業者や元方事業者によるさまざまな管理的な実務を具体的に示し、行政指導の枠組みで事実上の義務付けを図るとしている。

しかし、行政指導では明らかに限界がある。原子力施設において安全衛生対策、被曝管理をきちんと行うためには、労働安全衛生法上での義務主体を原子炉等規制法とあわせて、原子力事業者が全体を把握し責任を担う体制が不可欠である。そのための新たな法律的な枠組みが必要だ。

### 下請け構造での労働者の賃金、線量を超えた労働者の補償問題

厚生労働省が 2012 年 10 月 30 日に公表した「東京電力福島第一原発における線量管理の実態調査取りまとめ」では、「線量限度に達した労働者に対する措置」の項で「1次以下の請負業者では、元方事業者の定める線量限度が近づくと、今後について労働者と話し合いを行い、おおむね以下の対応をとっている。総合建設業者では、元方事業者の線量限度に近づくと、発電所構内の低線量作業に配置換えし、それでも超えた場合は一般建設作業や除染作業等へ配置転換する(転職の場合もある)。(中略)原発専門業者では、原発以外の仕事につくことが難しいことから、被曝が均一になるよう全国の支店で作業員のローテーションを行っている。それでも元方事業者の定める被曝線量に近づいた際は、構内の線量の低い作業や除染作業に配置換えを行う予定である」という対策を示している。

このような対策がとれるのは、第1次、2次下請けなど労働者の身分保障がある程度できているところに限られるだろう。大多数のそれ以下の下請け構造にいる労働者は、賃金も中間搾取されていて、被曝線量が限度を超えると失職してしまう。

一連の調査のなかで、偽装請負が多数存在することも明らかになった。多重下請け構造を撤廃し、労働者の賃金を補償しなければならない。また、線量限度を超えた労働者に仕事や生活保障をする体制も必要だ。この先数十年と続く廃炉までの期間、さらにきびしい作業が継続される中で、国の施策が急務である。原発が稼働して以来ずっと課題であったこの大きな問題に社会全体で向き合い、取り組まなければならない。

### 被曝労働者の健康管理と被害補償

福島事故以前から労災補償問題などに取り組んでいる枠組みの交渉では、私たちは以下の事項を国に求め続けている。

- ①国の責任で、すべての緊急作業従事者に長期健康管理のための「手帳」を交付し、在職中、離職後を通じて無償の健康管理を行うこと
- ②すべての被曝労働者に「健康管理手帳」を交付すること
- ③食道がん、胃がん、結腸がんを労働衛生安全法施行規則第 35 条別表の認定対象疾病の例示リストに追加すること
- ④労災補償の認定基準や労災認定の考え方を、死亡者の遺族、離職者、現在被曝労働に従事している労働者、すべてに周知すること
- ⑤遺族補償の時効を取り払って、申請を受け付けること

厚生労働省は、福島原発の緊急作業に従事した約1万 9,000 人のうち 50 ミリシーベルトを超えて被曝した約 900 人に限定して長期健康管理の「手帳」を交付するとしている。

放射線影響研究所が 2012 年2月新たに公表した「原爆被曝者の寿命調査第 14 報」では全固形がん死亡について、被曝した放射線量がある値以下なら被曝影響はないという「しきい値」がないことがより明確に示された。

厚生労働省は、放射線業務従事者の年間被曝限度の 50 ミリシーベルトを超えていることだけを「交付」の理由にしているが、これは残りの約1万 8,000 人の中から生じる被害を切り捨てるものである。従事した全員に手帳を交付し、漏れなく健康管理をするべきである。』

## 〈注・10〉 2013年4月26日 チェルノブイリ・デーにおける 東電前アクション！ 声明：「チェルノブイリの経験を 福島に活かせ——『収束』労働者を使い捨てにする な」

『チェルノブイリ原発事故から 27 年めを迎えたこの日、あの事故についてあらためて様々な観点と角度から語られるものと思われます。そのなかで私たち東電前アクション！は、以下のことを訴えたいと思います。

今年に入り、電源停止などの事故が福島第一原発の収束現場で相次ぎました。しっかりと「収束」を望む声は、ますます大きくなっています。しかし、私たちは誰かの犠牲・大量被ばくを前提にして「収束作業をしっかりとやれ」などと主張するものではありません。

繰り返される作業トラブルと「早期収束」を望む声が強まるなか、私たちが危惧するのは、いま以上に多くの被ばくを現場の労働者に強いて、いま以上に労働者の使い捨てを強めながら、「収束」作業が進んでいくことです。

私たち「東電前アクション！」は福島事故が発生した一昨年来、行動とそれに伴う東京電力への申し入れなどで「東電は電力事業主として、下請けを含む全ての収束労働者に対し、労働被ばくを強いている責任を取れ。すでに強いた被ばく労働については、健康面でも、経済面でも、被ばく労働者へのケアを生涯にわたって行え」と訴えてきました。

そのような要求は、チェルノブイリ事故で収束作業を強いられた兵士・消防士・受刑者を含む多くの労働者たちが求めたことでもあります。いわゆる「チェルノブイリ法」(被害者支援法)の制定には収束労働者による要求運動も大きく寄与したという事実は、もっと広く知られる必要があるでしょう。

悲惨なチェルノブイリ事故も、「決死隊」の存在によってより最悪な事態から救われたとも言われます。

しかし私たちは、福島事故において「決死隊」によって救われることを望むものではありません！

私たちは東電に事故の「収束」は求めます。しかし同時に、あるいはそれに先立って、東電が収束現場の労働者の生命と尊厳を尊重し、決して使い捨てにしないことを強く要求します。

2013年4月26日 東電前アクション！』

## II-b. 北島教行さん＋フリーター全般労組〈補註〉(2) 「被ばく労働を考えるネットワーク」

年	Ⅲ. 〈補註〉(2) 福島原発事故緊急会議 被曝労働問題プロジェクト／被ばく労働を考えるネットワーク (被ばく労働を考えるネットワーク・原子力資料情報室 <a href="http://www.cnrc.jp/">http://www.cnrc.jp/</a> <a href="http://www.hibakurodo.net/">http://www.hibakurodo.net/</a> などから)
2011	7/2 福島原発事故緊急会議 被曝労働問題プロジェクト:連続講座「今こそ、被曝労働者問題を考えよう」第1回 渡辺美紀子 7/10 同上:「被曝労働自己防衛マニュアル」刊行 7/26 「福島第一原発の被曝労働問題に関する関係省庁交渉」 8/12 毎日放送:「原発作業員の実態」 9/24 連続講座「今こそ、被曝労働者問題を考えよう」第2回 樋口健二 10/28 「被ばく労働を考えるネットワーク(準)」立ち上げ〈注・11〉 12/17 連続講座「今こそ、被曝労働者問題を考えよう」第3回 川本浩之
2012	1/12 連続講座「今こそ、被曝労働者問題を考えよう」第4回 近藤昭二 3/10 「被曝労働者の実態一切り捨てられる下請け労働者」:映画と講演(@郡山)「原発いらない、地球(いのち)のつどい」の企画に参加 4/22 「被ばく労働を考えるネットワーク準備会」:「どう取り組むか、被曝労働問題交流討論集会」〈注・12〉 10/10 「被ばく労働を考えるネットワーク」:「原発事故と被曝労働」刊(さんいちブックレット007) 10/11 「福島原発事故に伴う被曝労働」に関する関係省庁交渉 10/12 「被ばく労働を考えるネットワーク」へ賛同の呼びかけ 11/1 「被ばく労働を考えるネットワーク通信」第1号発刊 11/9 「被ばく労働を考えるネットワーク」設立集会〈注・13, 14〉 11/24 連続講座「今こそ、被曝労働者問題を考えよう」第5回 池田浩士 11/25 「放射能汚染下で働き、暮らすこと」講演と相談会(@いわき市)
2013	2/18 「被ばく労働を考えるネットワーク通信」第2号発刊 2/28 「福島第一原発の被曝労働問題」に関する関係省庁交渉



## 〈注・11〉 「被ばく労働を考えるネットワーク準備会」のご紹介

『福島第一原発の事故はこれまでにない労働者被曝を生み出しており、今後、多くの労働災害が明らかになると想像されます。そもそも原発労働は、被曝を前提とした劣悪な環境で行われるだけでなく、重層的下請構造という問題の多い雇用関係にあります。そして今や、原発事故で飛散した放射能により、下水処理場、清掃工場、港湾、運送、鉄道などの様々な労働現場で、労働者の被曝が深刻な問題になっています。

今こそ、労働者の命と安全を守るための労働運動が社会的に求められています。被曝労働に関する労働相談の実施と運動化・組織化、政府・自治体・事業者に対する取り組みは、喫緊の課題です。一方で、日本の労働組合・労働団体は、被曝労働問題に対して十分な取り組みを行ってきたとは言えません。これまで、被曝労働に関する労災認定や賠償請求に丹念に取り組んできた方々から学びながら、それぞれの労働組合・労働団体が力量を付け、取り組みを開始する必要があります。

これらの事態の中で、2011年10月、被曝に関係する労働問題の情報を共有し、検討し、共同で取り組む連絡組織として「被ばく労働を考えるネットワーク(準)」が有志により立ち上げられました。これまでに下記のような取り組みを行ってきました。

- 『被ばく労働自己防衛マニュアル』(制作:福島原発事故緊急会議被曝労働問題プロジェクト)の配布・活用への協力(2011.10～)
- 内部学習会:清掃工場のしくみと高線量がれきの問題、など
- 記録映画『原発はいま』DVD版の制作(2012.3)
- 「原発いらぬ地球(いのち)のつどい」への参加:映画『原発はいま』上映と斉藤征二さん講演会(2012.3.10 @郡山)
- 「どう取り組むか被ばく労働問題 交流討論集会」(2012.4.22 @代々木、予定)

このネットワークは立ち上げられたばかりで、まだ助走の段階です。被曝労働問題に関心を寄せる方々の参加を広く呼びかけます。

### 【設立呼びかけ人】

中村光男(日雇全協山谷争議団)、山口素明(フリーター全般労働組合)、遠藤一郎(全労協脱原発プロジェクト)、須田光照(東京東部労組)、なすび(福島原発事故緊急会議被曝労働問題プロジェクト)、斉藤征二(原発下請労組「全日本運輸一般労働組合原子力発電所分会」元分会長)、藤田祐幸(長崎県立大学シーボルト校)』

## 〈注・12〉 「どう取り組むか 被ばく労働問題 交流討論 集会」案内

『【日時】2012年4月22日(日)13時開場

【場所】代々木八幡区民会館 集会場

(小田急線代々木八幡、地下鉄代々木公園 徒歩6分)

プログラム(予定)

・被ばく労働をめぐる政策・規制と福島のリハビリ作業

……報告:全国労働安全衛生センター連絡会議

・原発にとどまらない労働現場の被ばく問題

……清掃労働、港湾労働、日雇労働の各現場から

・福島現地での取り組みから

……労働者、家族、地域の声・訴え

・討論(コメント:鎌田慧さん)

- ◆東電福島第一原発事故から1年。先の見えない事故収束作業、そして、まき散らされた放射能によって、原発労働だけでなく、さまざまな労働現場、生活の現場に関わる労働が、いまや被ばくを伴う労働となっています。
- ◆これまで、それぞれの運動現場でさまざまな取り組みがありました。しかし、労働者の命と安全を守るための成果は勝ち取れていません。被災により、厳しい生活におかれた福島の人々が多く動員される除染作業の安全性についても疑問です。労働者のみならず、家族も含めた生活・労働の両面からの対応が必要です。
- ◆こうした状況にどう具体的に切り込んでいけるのか。被ばく労働問題に関わっていこうとするさまざまな労働団体・市民グループ・個人が集まり、福島現地や労働現場の声に耳を傾け、そことつながり情報を共有しながら、今後の共同の取り組みを展望していくために、交流討論集会をもちます。多くの方の参加を訴えます。』

## 〈注・13〉 「被ばく労働を考えるネットワーク」設立集会 案内

『福島第一原発ではこれまでにない高被曝環境で収束作業が行われており、労働者はわずか1年の間に、全国の原発での3年分に相当する被曝をしています。また、多量の放射性物質が広範囲に撒き散らされた地域での除染作業は、従来の原発労働とも異なる特



異なる被曝労働環境になっています。これまで被曝労働問題に取り組む労働団体は決して多くありませんでしたが、今こそ、原発労働者や除染労働者を始めとするさまざまな被曝環境にある労働者を支援し、その問題に取り組む主体が求められています。

そのような問題意識のもと、さまざまな労働団体や社会運動団体に関わる者たちが協力し、被曝労働に関する運動を協働して進める取り組みを昨年より開始し、この度「被ばく労働を考えるネットワーク」の設立に至りました。

下記の内容で設立集会を開催致しますので、ぜひご参加のほどをお願い致します。』

## 〈注・14〉 同上 報告

『11月9日、「被ばく労働を考えるネットワーク」設立集会が都内で開かれ、300人近い参加者が集まった。

「3・11」以降、福島第一原発では先の見えない収束作業が続いている。被ばく労働に従事する人々の安全と健康を守り、待遇改善をめざすべく全国各地で続けられてきたさまざまな取り組みが、約1年の準備期間を経てこの日、正式にネットワークで結ばれた。労組活動家や医師、弁護士らが呼びかけた。



会場となった東京・江東区の亀戸文化センターには、開会前から大勢の人々が詰めかけた。二部屋を統合した広い会議室。長机の席、椅子席はすでに埋まり、床に座る人、立ったままの人の間を、スタッフがあわただしく動き回る。

被ばく労働の実態を先駆的に暴いてきた報道写真家の樋口健二さんがあいさつ。昨年の事故以降、多忙を極める時の人だ。

「みなさんがこんなに集まってくれて本当にありがたい。闇の中から浮かび上がった被ばく労働は、差別の上に成り立っている。社会問題としてこの運動を盛りあげたい」。樋口さんはいつもの口調で檄を飛ばした。

斉藤征二さんは原発下請労組の元分会長。「原発への人集めは、戦争中の赤紙と同じだ」と憤る。「除染には果てしない人数が必要になるが、内部被ばくの怖さを知らない労働者たちは、防塵マスクも付けず黙々と働いている。被ばくの問題は、みんなで知恵を出し合って考えていくことが大切だ」と強調した。

「被ばく労働には、なぜ今まで関心が集まらなかったのか」と切り出したのは、神奈川労災職業病センターの川本浩之さん。日本初の原発被ばく裁判「岩佐訴訟」にもかかわってきた。

「しんどい状況にある人ほど、立ちあがることはない」——川本さんの指摘は、原発に限らず、厳しい条件下に置かれる労働者全般にあてはまる。

政府が税金から除染従事者に支払うべき「危険手当」が、実際には労働者の手に渡っていなかったことが、マスコミの報道で明らかになった。国から受注する大手ゼネコンは、「手当込み」の額で下請けに発注。上下に何層にも連なる業者の間で、どこかへ消えていたことになる。

環境省が管轄するこの「特殊勤務手当」。だがその存在すら知らない中間業者が少なくない。当事者や労組からの追求を受けると、基本給を法定の限界まで下げて総額を再計算。わずかな差額を支払うことでその場をしのごう。なかには、自社の社員にはきちんと加算するが、直下の業者には渡さない会社もある。まさにピンハネのスパイラルと言える。

「基本給より多額の『手当』など、そもそもおかしい。本来基本給が多くあるべきで、手当は少額のはず。手当が高額だから働く、あるいは手当だけを要求することにも違和感がある」。主従が逆転した賃金の内訳に、川本さんは原則を対置した。

人いきれのなか、さまざまな問題提起があった。

「被ばく覚悟で高給を求める労働者もいる。それは脱原発の方針と矛盾しないか」。「声をあげない、運動に参加できない労働者。原発と共に長年生きてきた労働者もいる。そういう人々の心情に配慮することも大切だ」。

世の中にはサラ金やギャンブルなどの業界で働く人々も少なくない。彼ら彼女らが職場の相談を持ちかけた時、私たちはそれを「反社会的な仕事であり、すぐ辞めるべきだ」と切り捨てるのか。

「そうではないだろう」と川本さん。「働いている以上は、その労働環境下での権利向上をめざすべき」と冷静だ。

息子が原発作業員として働く母親も駆けつけた。「F1では暴動が起きるのではないかという状態にあるが、自分もそれを半分望んでいる」という。「嶋橋伸之さんの母親をはじめ、大切な子供を原発で働かせている、同じ思いを抱える親とつながりたい」と胸の内を明かした。

「来年は再稼働の嵐がやってくる」。たんぽぽ舎の柳田真さんは危機感をあらわにし、「他の人間に死を強制する発電はいらぬ」と力を込めた。翌日には、再稼働を阻止する新たなネットワークの結成集会が予定されている。

「考えるネットワーク」との名称にあるように、結成宣言だけで終わる集会ではなかった。これまでと同様、各地で地道な相談活動や、行政・企業への交渉などに取り組む。そして、広く情報を共有し、意見交換や討論を尊重する姿勢が、満員の会場からひしひしと感じられた。

被ばくはしないに越したことはない。だが、福島事故以後のこの国は、多かれ少なかれ、誰もがそのリスクを負わざるを得ない、深刻な事態に突入している。

だとしたら、どれだけその被害を軽減させるのか。そこに私たちの未来がかかっている。複雑で重い課題に、正面から向き合う支援者らの、したたかで柔軟な底力を見た思いがした。

「本会は労組のネットワークではない。いわきに 50 坪の土地を確保した。ここを労働者の出会いの拠点にしたい」。中村光男さん(日雇全協)の締めくくりの言葉も、印象的だった。(Y)』

### Ⅲ. 矢部さんの動線〈と〉北島さんの動線 ——〈と〉:交錯/出会い/出会いそこね

#### 0. 〈と〉に先駆けて—平井玄:「4/10の微視的考察から」 —〈注・1〉

『あの 2011 年 4 月 10 日高円寺は、疑いようもなく break through の始まりです。

(中略)

・第 1 に「素人の乱」「フリーター全般労組」「ブラック・ブロック」等々、今回の動きをになつたといえる雑多な潮流が遂に「運動圏」「議会外左翼」の最前面に登場したこと。高円寺南の一带で、末期の諸派だけでなく、ノンセクト系やアナ系を含む 68 年残骸たちの存在感はゼロでした。これはまだ始まりです。反 G8 の3年前に始められなかったことが、今始まったといえる。

・それぞれのグループの中で、三年前とは違う新世代が成長しつつある。今まで牽引していた部分は「4・10」の時点で「西」にいた。「3・11」直後、若い世代のかなりの人数が名古屋、大阪、広島に飛び出す。その身軽さ、速度、行動力によって東京を捨て、原子力列島を掻き回そうとする「下民ノマディズム」は卓見に違いないでしょう。私が想起したのは、船本州治が日雇い運動の中で提起した「寄せ場—飯場」の往復運動でした。違うのは、矢部史郎『原子力都市』がより普遍的な「生の様式」の変容を不器用ながら描いたことです。

(中略)

・高円寺 demonstraton は期せずして、こうしたいくつかの異なる金属片が大量に高円寺南口公園という坩堝(実際にすり鉢の底)に放り込まれて化合し、生成変化する配合比率と触媒を探り当てる端緒を示した。デモ参加者たちをこの合金を核とする「潜在的被曝フリーター層」と捉えて、福島や各地の被曝農民や被曝労働者たちと連結することができるのか。

(中略)

さて1年間が過ぎた。「被曝フリーター」の存在はまったくと言えるほど顕在化していない。街頭でもネットでも今のところ噂話だけだ。徴候はまだ現れていない。

昨年 2011 年の秋頃までは、福島県内の空き旅館や避難所から通っていた原発労働者たちは、今では原発周辺の宿泊所に幽閉されて厳しい籍口令の下にある。それでも現地から伝えられるところによれば、原発周辺住民から調達されていた労働者たちは危険を身にしみ込ませているだけに急激に減った。しかし、県外からの非合法なリクルートはあくまで寄せ場周辺や多重債務者、行方不明者たちに限られているという。彼らは高線量の放射能を体内に溜め込みながら「飯場」に閉じ込められているのである。

しかし、これは極右ナショナリストたちだけに向けられた問題ではない。「全面廃炉と同時に被曝労働者との連帯」という極めて困難なスローガンが掲げられる時が、いずれ来る。なぜ「困難」なのか。少しでも命を長らえるために線量基準をぎりぎりまで下げれば、あるいは下げられたとしても、廃炉の過程で自分たち自身の中から大量の被曝者たちを生み出すことになるのを、どうしても避けられないからだ。科学技術のマイナーな進化が可能だとしても、どこまでこれを軽減できるのかはまったくの未知数である。

こういうおぞましい二律背反の中から一体どんな運動を生みだせるというのか。

(後略)』

## 1. 2012年7月5日 「九州帝国ブログ版—矢部史郎の野蛮なる収束拒否の思想」から

『私は原発事故後の矢部史郎氏の行動や発言には注目しつつも、そこに様々な疑問や違和感を持ってきたが、『3・12の思想』で展開された矢部氏の思想には大いに学ぶべきものがあると思った。放射性物質の大量拡散という事態とその「分からなさ」に直面した人々(特に主婦)が、政府や自治体の「分かったような」物言いを信じず、それらに依存せずに、自分たちで事態を意味付け、対策を行いはじめたこと、そうして自分たちの形作る価値秩序によって既存の秩序に対抗しようとする契機(新たな主体性＝誰もが「主婦」「外国人」になる可能性)が生じたことについて、そのもっともラディカルな可能性を最大化する論理を矢部氏が模索していたからである。

しかしその後、ますます露わになる反原発運動の「国民性」への苛立ちが、矢部氏がブログ上などでしばしば吐く暴言めいたもの言いへの違和感とも絡まって、私の矢部氏への評価は再び濁り始めた。現在の反原発の言説の中には、「九州(東京)は汚された」などと平然と言い放って自らの「清潔」(どういう清潔さなのか、なぜ自分たちは清潔でいられたのか)を疑わないような腐った心性が紛れもなく存在するし、運動の中からそれを批判する論理が提出されているようには見えない。

そんな中、私には放射性物質の危険性を思考の基準にすることが単なる最悪の国民の利己主義にしか思えなくなり、矢部氏を含むその種の発言への苛立ちも増した。自分たち

がノウノウと使っていた電気の根っこが吹っ飛んで放射能がまき散らされたら、慌てて顔色を変えて「原発反対」、「汚ない瓦礫は持ち込むな」というような物言いには今でも腐ったものがあると思う。いま反原発を唱えている連中の支配的な部分は、沖縄の基地が自分の住んでいる都市の中心部に移転することが決まっても「私たちの安全が損なわれる」としか言わず、自分のマイホームがブルドーザーでなぎ倒されることには怒って喚きちらしても、野宿者が公園から排除されることには無関心な、そういう酷薄な「国民」だと思えない。それが「ゼロベクレル派」ということか、私はそう思い苛立ってきた。そのような疑念と苛立ちが増幅する中で、私は矢部氏と彼の論調に追随するものを「プチブル・ベクレル唯物論者」と規定して、このような連中とは隔絶した論理でものを考えなければならない、とますます強く思い始めていた。

しかし、今回『放射能を食えというならそんな社会はいらない、ゼロベクレル派宣言』（新評論）を読んで、反原発運動が内包する「国民性」と矢部氏の提示する思想のポテンシャルは全く別物で、非和解的なほど異質なベクレル、じゃない、ベクトルを含んだものだというのを改めて得心した。社会主義者を自称する矢部氏なら「そんなことは当たり前だ」と怒るかもしれないが、福島に行くことを「人権意識の欠如」とか言ってのける（「被曝不平等論」）のは、彼の言わんとすることをどう肯定的に解釈しようとしても、言葉使いが杜撰すぎる（「社会主義者」がブルジョア国家で「人権」などというものを主張するときには、もっと慎重に、ややこしい言い方をしなければならぬ）し、あらゆる誤解の原因を自ら作っているようなものである。それはともかく、新著において矢部氏が提示する思想の可能性は否定できないし、矢部氏の思想の核心は、国民的なものに回収してしまうには余りにも「野蛮」、あるいは矢部氏の言い方によれば「野性的」すぎる。矢部氏の議論には、細かいところではいろいろと突っ込みどころもあるだろうが、その思想の野蛮さの核心だけを私は問題にしたい。

私は上にも述べたように、反原発運動内部に存在する利己主義は批判されるべきだと思う。原発労働者が差別され、その存在をしばしば忘却すらされていることは批判されるべきである。しかしその現状についての「反省」が、ある種のジレンマが絡まった反省のループをぐるぐる回っているだけになりがちだとしたら、現在の権力を破壊して新たな権力を構成する回路には結びつきにくい。「被曝労働のためには国民（中年以上の男性）を強制動員すべきだ」という意見も出たし、そこには考えるに値する問題提起が含まれていると思うが、やはり現在の権力の在り方をどう乗り越えるのか、その戦いに資する思考を経なければ、その発想は単に国家に利用されてしまいかねないのではないか。

矢部氏の主張は、現状への倫理的「反省」から一気に法制度的な解決策を導くというよりも、まずは現状に対する鋭い「認識」から抵抗の実践の可能性を導き出している。「反省」と「認識」の違いが重要なのだ。私たちがいる現実について反省するとき、そこにどのような「認識」があり、それがどのような実践を導き出すのかが。私は反原発運動内部に存在する自己本位な考え方はいまでも批判的であるが、では現状をどう変えてゆくのか、という点

においては、原発労働その他をめぐる自分自身の「反省」が抽象的で観念的でしかなかったと思う。矢部氏の議論の魅力は、まさに現在の権力秩序の認識から、その権力秩序を具体的に転覆する実践的可能性をきわめて具体的に導き出しているところにある。

誰かが「紫陽花革命において、原子炉の停止は国家停止のメタファーだ」というロマンチックなことを書いていたし、それは即座に運動内部の「国民」から「国民運動を不当に共産主義的に解釈したもの」として否定されてもいたようだが、矢部氏は決然と「放射能計測運動」が新たな共産主義革命となりうるための条件を提示していると思う。言い過ぎかもしれないが、それが言い過ぎだというなら矢部氏の本は私にとっては意味がない。

繰り返すが、私はたとえば被曝労働が危険なものならば、その危険をできるだけ平等に分配すべきだという主張には理があると思っている(われわれの「廃炉ソヴィエト」は国家亡き後においては、廃炉に際してどうしても必要な労働に伴うリスクは平等に分配することを決議するであろう)。そして、福島原発にしても、汚染瓦礫の問題にしても、それらの存在する地域が他の地域よりも高いリスクを未だに背負わされており、しかも地域内の全員を避難させてその生活を保障することが難しく、また、土地との結びつきや放射性物質に対する考え方も含めたさまざまな価値観ゆえに移住を強制することも難しい、という前提に立てば、現状において偏って存在しているリスクを平等化することも考えなければならないと私は思うし、そのようなことも考えずに、ただ自分たちの生活領域を汚したくないという考えには断固として反対である。しかし、仮に「日本国」内だけで「平等」の徹底を考えても、放射性物質を広域に流通・拡散させることは、排泄物や海洋への漏出などあらゆるルートを通じたさらなる拡散につながるという問題がある。[原子力都市の副産物としての時間的・空間的尺度の消失]しかも放射能は、どれだけ拡散しても決して「希釈」されない。このことが矢部氏の強調する「レベル7」の厄介な現実である。いずれにせよ、矢部氏は、撒き散らされた放射性物質に、再生産領域において対応することがどのようなことであるかを軸に考えているので、高線量地帯からは直ちに住民を避難させるということ以外の選択肢は問題にしない。そして何をもって「高線量」とするかは決定権は「主婦」が持つことになる。比較的风险が高いとされる地域の住民の避難を実現することには確かに多大な困難が伴い、「非現実的」ですらあるかもしれないが、矢部氏が主張するように、再生産領域で主婦を中心とする人々が直面させられている事態、そこにある差別を放任することがあってはならないのだし、少なくとも、すでにわれわれが生きているのが「非現実的」な状況である限り、何の「現実主義」に依拠すべきなのか、という認識自体が係争の的なのである。

矢部氏は、われわれをこれまで支配してきたものの力の源泉を把握しなおすかたちで、改めて現在の資本制国家の秩序を「原子力国家」と規定した。「原子力国家」との文字通りの「戦争」を意識する矢部氏において、原子力国家が撒き散らした放射性物質への怒りは、テイラー主義(フォーディズム)型の社会の在り方への怒り、あるいは携帯電話の画面で釣りをさせる社会の意味不明さへの怒りと直結している。主婦たちが撒き散らされた放射性物質への対応を迫られている領域(再生産領域)と、労働・生産の領域における抵抗

を連結させるビジョンが矢部氏の疾走する語りの中から仄見える。私も、私が信頼する友人たちも、みな原発労働者のことが気になっている。しかし、現在の資本制国家の秩序を転覆するビジョンを描く場合に、原発労働者のことを考えて、主婦の問題を(より少なくしか)考えないとすれば、それはかつての「本工主義」を別のかたちで再演することにもなりかねない。ここに、あらゆる不平等を乗り越えようとするものたちが模索すべき新たな共同性の手前にある肝心な問いがある。この問いの周りでこそ、お互いをよく批判しあえる関係を、百家争鳴を炸裂させようではないか。(ちょっと興奮しすぎた。)

矢部氏は第一に、原子力国家の支配の肝をにぎる再生産領域に着目し、その領域を身体ごと生きている被搾取・被差別階級としての主婦の行動にこそ、現在の資本制国家の在り方を乗り越えるポテンシャルを見出そうとしている。彼が注目している人々の中には、確かに中産階級的エゴといえるような要素も見られるかもしれない。しかし、矢部氏の認識は、われわれがある集団のエゴを、いわばイデオロギーの次元で批判しようとするときに、そのエゴがどのような社会領域でどのような行動、身体的実践を促しており、あるいは身体的感覚を養っており、それが既存の権力秩序にどのような亀裂をもたらすかを見ようとしている。だからこそ、田園調布からベンツをぶっ飛ばして逃げようとして広島で警察に捕まった金持ちの主婦のことすら、その「逃げ足の速さ」を面白がっている。仮にその金持ちの主婦がどんな自己本位で嫌な人間であるかもしれないにせよ、矢部氏はそんなことを問題にしていないのである。「金持ち」と「貧乏人」の違いについて考えることは重要だが、「金持ち」や「貧乏人」の貧しい表象だけでは到底掴みきれない人間の在り方というものがある。人間を構成している思想の断片から身体までの、あらゆる要素のうち、何が呻吟しており、何が秩序に亀裂をもたらすのか(そして社会に統合された個の「分子化」を促すのか)、そこを見る唯物論的な眼差しが必要なのだ。

放射能の実際の被害がどうであるかをわれわれが正確に知ろうとして、現状がどれほど危険か安全かを議論して決着をつけようとしても、まず無理があることはおおかたの人が同意するのではないだろうか。それよりも、まず多くの人にとって、放射性物質自体の「分からなさ」に加えて、大量の放射性物質が撒き散らされたという事態の「分からなさ」がある。そして矢部氏の注目する主婦たちは、子育てその他の再生産領域を担わされており、そこから逃げることは許されない(社会、家族がそれを許さない)がゆえに、最も危険である可能性を基準にしてその「分からなさ」に自分たちなりに対応しようとしている。原発において官僚や技術者や政治家が最も危険な可能性に備えなかったことの過ちは、多くの人が認めるだろう。では、最悪に備える思想をもって、再生産領域で放射性物質の拡散という事態に対応すべく行動しようとしたら、どうなるのか。ある種パニックながらも、科学なのか魔術なのかすら分からない領域に足をつっこみながらも、どうにか最悪の可能性を避けるために全力を尽くすことは当然とも言える。[だから、私は矢部氏の強調する主婦の実践がそれ自体「科学的」「新しい科学」であることを強調するというよりも、主婦的・民衆的感覚の実践からこそ、科学の専門家を、馬鹿にするのではなくて正しく批判し、問いただせる



ような、民衆と科学者との健全な関係も可能になる、と考えるべきだと思う。いくら「科学の魔術化」だとうだといっても、ガイガーカウンター壊れたら一発アウトでしょ……？]

ともかく、主婦の危機意識それ自体をすら批判するのならば、私たちは、撒き散らされた放射性物質の危険性が正確にはよく分からない状態であっても放射能を気にせずに子育てをしても構わないということを相当の覚悟をもって主張しなければならないだろうし、しかも、あらゆる生活上の配慮を主婦に押し付けるような現在の社会構造を直ちに変える具体的な提案と同時に、そういう主張をしなければならない。そうでなければ無責任である。言うまでもないかもしれないが、再生産領域の問題を社会的に考えるということは、私たち一人一人に家族や子供がいるかないか、ということとは関係がない。自分には子供がいなから関係ないというのでは、それこそがエゴだと言われても仕方ない。

重要なのは、この放射性物質の拡散という事態を、徹底して再生産領域に視軸を定めて見た場合に、はじめて資本制国家が維持しようとする秩序と、生活者の秩序との鋭い矛盾や対立が見えてくるといふ、矢部氏の認識である。矢部氏だって、子育てをする全ての主婦が放射性物質に対する危機感を持っていないことなど百も承知しているだろう。私自身も、夫が神奈川に転勤になった妹(幼い子供がいる)に、放射性物質に関する本を送り、ウェブサイトなどを紹介していたが、どうも彼女の心配は「収束」してしまった気配もあった。誰しも延々と続く異常事態を生きつづけることは難しい。しかし、しかし、である。歴史において、虐げられる人々こそが、自らの意に反しても延々と「異常事態」(例外状態)を生きてきたのではなかったか？延々と異常事態を生きずに済んでいるのは誰なのか？私は、それが虐げられた結果か、自ら意思したものかにかかわらず、放射性物質の拡散という「異常事態」からの「収束」を拒否し続けるということの、思想的かつ実践的な可能性の中心において矢部氏の議論から学びたいと思う。

矢部氏は主婦を中心としたいわゆる「生活保守主義」のようなものこそが「収束の拒否」ともなり、それが既成の権力秩序の全面的な拒否にも転化しうるような危うい地点を見定めようとしている。既存の権力秩序の全面的な拒否というのは、東電の責任を法的に追及するというような課題すら超える地点である。それが最も象徴的に表現されているのは、破壊された原発の収束作業において、稼働中の原発においては労働者から奪われていたストライキの可能性が考えられうるものになったのではないか、という矢部氏の主張である。「収束作業の拒否」？それは余りにも無責任だという声が聞こえてくるかもしれない。しかし誰がどのような資格で「無責任」を言えるというのか。「異常事態」の外、さしあたりの安全圏で生きている(つमりの)人間が？もし本当に原発労働者が政府や東電への不信極まって収束作業をサボタージュした場合、それこそ破局的な事態が起きるかもしれない。原発労働者が労働の現場で爆発させる不信は、ある社会的回路を通じて、主婦が再生産領域で蓄積した不満や怒りと直通したがゆえに爆発するのもかもしれない。収束作業の拒否は、それがもたらしかねない破局的な事態ゆえに、国家権力からは徹底弾圧され、あるいは徹底懐柔され、日本の国民のみならず、世界の諸政府と国民に糾弾されるだろう。収束作業のた



めに米軍が乗り込んできて非常事態宣言を発令するだろう。よく分からない。しかし、ひとつの、否定すべからざる究極の可能性が残る。日本列島に生きる生活者と労働者たちが、原子力資本制国家による搾取(その象徴として放射能の甘受を強要する政府や自治体の要求)に反撃するために、究極の手段として収束作業の拒否を選んだ場合、それは諸外国の政府や「国民」にではなくて、世界で同じく非道な資本制国家の支配にあえいでいる生活者と労働者に、最も強烈な社会変革のメッセージを発する可能性をも含みうるのではないか、ということである。

考えるべき論点はまだまだあるだろう。しかし、私は矢部氏の提示する野蛮なる「収束拒否の思想」の可能性の中心を掬い取ることは、原発や放射能をめぐる現在の「運動」にとって非常に重要だと思う。

※以上……矢部氏の「思想」に興奮しつつ書きなぐった後で、すぐに私の脳の温度を冷ますようによぎるのは、重度の障害者の介護をしている(いた?)杉田俊介の次の言葉である。「金銭的・仕事の・障害的に逃げられない仲間たちが傍らにいる限り、逃げない。そうしよう。逃げるなら、彼らと一緒に全力で逃げる。そうしよう。そういう努力をしよう。」(大澤信亮「出日本記」参照)この言葉と、「いますぐに逃げるべきだ」と言い続けることとの落差。ここにも、私たちがいままさに考えなければならない肝心なことがある。』

## 2. 「反原発 オーヒス・レディーのぼやき」〈注・2〉

『福島第一原発の収束作業は、なされるべき。っぼいよね。

まあそりゃねー、後片付けはしなきゃマズイっしょー。さすがに。

アタシ科学的なことは正直よく分かんないけど、やらないとドカンといっちゃうんでしょ?

でもさー、誰がその作業を行うべきかっつー話になると「東電の電力の恩恵にあずかっていたのであるから、都市に住む人間は加害者性を負っているのだから、都市住民こそが、後始末にいくべきだ」とか言い出す人がいたりするでしょ? ソレってなんつーか、ちょっと分からなくもないんだけど、でもでもでも、アタシ的には思うわけよ、「えー、そんなこといってもおお、そもそもアタシに東電以外の電気を選ぶ余地とかなかったしい……

原発を推進してきたわけじゃないしいい……」

でもおー、フクイチの収束作業に、東電の電気を使ってたわけでもない大勢の人々が、しかも低賃金で、なんの保障もないような状態で従事してる理不尽な現状を見聞きしたりしてしまうと、アタシのほんのりチキン味の正義感にも時にはドキュンと火がついちゃったりするの。

「こんなの非道い! やっぱアタシも作業員にならねばならんのじゃ!」

……でもお、……やっぱいい、放射能怖いモン。だってアタシ、

オンナのこだモン!!! (コドモ産む気も希薄なくせに、オンナノコ特権ウフフフフ!)

つか、コドモ産むオンナと、産みそうもないオンナじゃ、世の中の待遇が違うラシイネ。) だいたい、そもそも、なんで、東電とか原子カムラの金持ちのやつらが後始末しないで、アタシみたいなパンピーがわざわざ危険などに行かなきゃならないのよお！ てゆーかねえ、電気使ってたやつらみんな加害者だから原発いって収束作業してこいなんて、責・任・曖・昧・イチオクソウサンゲ！？

そんなコトいってるからねえ、東電の経営陣とか原子カムラとか、ホントにぶっ叩かなきゃいけない奴らがいつまでもものうのうとしてんのよお！ プリプリプリ！

・・・って自分を納得させてるけど、必要な収束作業員の数が近いうちに絶対足りなくなっちゃうってニュースで聞いたりした。

原子カムラビトが全員作業員になったって、廃炉はおろか、収束作業だって間に合いやしないんじゃないの？ てゆーかそもそも、収束出来るかどうか分からないし、誰かが犠牲になるくらいなら、いっそのこと放置しちまえばいいのよ！

って正直、思わなくもない。だってー、絶対誰かがヘビーな被曝するわけでしょ。

しかも、無駄死にとか犬死にって言ったらチョー怒られちゃうかもしれないつつつか、シツレーな話かもしれないけど、いっぱい被曝して作業したところで、こんな前代未聞のバクハツの後処理なんて、できるかどうか分からないわけでしょ。

でもって、アタシの代わりに誰かが毎日被曝しまくつとる。

嗚呼！！！！そんなの、虚しい。

使命感に燃えてやってる人には申し訳ないけど、

もうみんなぶん投げちゃえ！！！！って思っちゃったりするわけよ。

責任度合いに応じてビョードーに被曝を請け負うなんてのが、ありえそうもないんだったら、もう放置プレーしてバクハツするしかないってね。

・・・みたいなコト言ったら、「いい年こいて、何をそんなナイーブでムセキニンで非現実的なこと言ってんだよ」ってカレシに言われたけど、

じゃーセキニン感のあるアンタは、収束作業とか廃炉について、

どんなご立派なことしたの？ みたいな。現実的に考えろってのは、現状維持のこと？

それともなんか、もっといい方法があるなら、

その賢いオツムで教えてほしーの。 by ルウ子♥』

### Ⅲの〈注〉

〈注・1〉 平井玄「群衆科学へ——潜在被曝フリーターとして(後編)」(「インパクション」

## IV. そして……

『それにしても、と考える。互いにこの運動を引っ張ってきた二人は、なぜ180度違う方向に向かったのか？ 北にも西にも行かず、だらしなく働きながら東京に留まり、引き裂かれた思いの私／たちは思う。わりきれない言葉たちが体の中で疼く。だからフェイスブックから飛び出して、フェイス・トゥ・フェイスで語り合うのは、とにかくいいことじゃないか！ ちょうどイタリアからネグリが来ていた。そのシンポには足が向かず、雨の土曜日に私がこちらに引き寄せられた理由である。

二つの言葉はすれ違い、突っ張り合い、またくぐもる。それでも「語るべきだが語られてこなかったこと」が、ネット語ではなく俗語で語られるきっかけがやっと生まれた。そんな熱気が参加した人たちの問いかけには滲んでいた。

全面的な被害者も、全面的な加害者もない。すべてを倫理に還元することは危ういよ——と、60年代からの日々を経験した私は呟く。極限にまで純化された問いは肝心の中身を消去してしまう。チェルノブイリ後の時代を席卷した元祖テクノポップバンド「クラフトワーク」の衣装を真似た北島さんは、これは「サイボーグ」と「ロボット」の対話という。「残余の生」に賭けた矢部サイボーグと「完全汚染された」北島ロボットってことなのか。

でもね、私／たちはやはりどちらでもないよ。運動とは直線ではない。エナジーがそこを巡って動き出す回路を引くことである。かつて九州の炭坑労働者たちは「去るも地獄、残るも地獄」と、炭坑住宅の裸電球の下で一升瓶片手にうそぶいたという。「労働」の「汚染」と、「放射能汚染」とはどこかでつながっている。フリーターの女たちや男たちは初台事務所の明るい蛍光灯の下で、発泡酒のカン片手に深夜まで言葉を交わし合う。「回路はどうやらつながれた」と、彼らの表情は語っていた。』

(前掲:平井玄「討論集会『3・11 北へ西へ。語るべきだが語られてこなかったこと』をめぐる随想」)

## 終わりに

私・たちは、「北へ向かった」人／「西へ向かった」人の軌跡/動線に対して、したり顔の審判者のように、振る舞って来たのだろうか？

いやいや、私・たちは、自らの位置を、「3・11/12」以後のこの列島における「拒否」の〈前〉線のありようを見定めたいというやみくもな思いにかられて、それ・ぞれの軌跡/動線を愚直にたどろうとしてきたにすぎない。その愚直さの故に、私・たちは、それ・ぞれの人の前では、恥じ入るしかない。

いずれ刊行されるこのたびのフリーター全般労組の企画の「報告集」を、私・たちは、半ば期待しつつ、半ば恐れながら待っているのだが、その企画のアクチュアリティに、私・たちは、いかに愚直さをさらけだそうと、向き合いたかった。

ふたりの人の軌跡/動線をたどるなかで、もう茫々として時のかなたに沈んでいる遙かな記憶が、私・たちの胸中に、蘇って来るのを感じた。60年代という時間が凝集していく中で、私たちの間で交わされた、例えば「生産点か？街頭か？」といった論議に関わる記憶である。そういった論議がもつれ、もつれてどこへ至ったか・・・先で触れた平井玄さんのこの企画についての発言は、そうしたいくつかの論議のからみあいの道行きと帰結をめぐる経験を踏まえたものなのだろう。

私・たちに、平井さんの発言を補うに足るものが、あるわけもない。ただ、この列島の運動経験は、私・たちの場合も含めて、すべて散逸してしまったわけではない。このたびのフリーター全般労組の企画は、まさに、そうした経験を踏まえた深い配慮にもとづくものだろうし、力量を別にすれば、私・たちの愚直さもまた、その経験を手ばなすまいという思いに、もとづいている。

それ・ぞれの軌跡/動線は、なお〈前〉線への転成へ向かう途上にあり、その過程での相互の「交錯」には、この列島上の全ての反原発運動当事者が参入し、それ・ぞれの間の〈と〉をゆたかに運動させることが、求められているのではないだろうか。

なお、以上で取り上げたそれ・ぞれの軌跡/動線にかかわる資料は、ネットを通じて、あるいは、刊行された著作からのものであることを、ことわっておきたい。

私・たちの愚直な試みがフリーター全般労組の企画を損なうことにならないようにという思いを、繰り返し述べておきたい。

最後に、このたびの企画にあたったフリーター全般労組のみなさんに、改めて敬意を表す。

---

# 遠方からの風信

*I WOULD NOT PREFER TO LIVE IN  
SUCH A CRUEL WORLD, BUT TO  
BECOME TO <THE NOT-YET-BEING>*

---

## ある青年からの風信

——以下に掲載するのは、ある知り合いの青年の「Facebook」というかたちで送られてきた「風信」である。一部は、編集上の都合で、「省略」している。この「省略」ということを含めて、「Facebook」というメディアにふさわしくない扱いをしている恐れがある。

次回以後、「風信」については、このような問題を発信者とのやりとりを通して、必要なら、その扱いを修正することにもなるかと、思う。

●、○は、ある青年のメッセージ      ★は、応答者(複数の場合あり)のメッセージ

### Profile

東耕大(Kota Higashi)

「僕はあなたが好きだ！一緒に生きよう！」

Facebookアカウント <https://www.facebook.com/kota.higashi>

※最近イベントなどやっています。

Facebookでお知らせしていますので、もし万一よろしければ「友達リクエスト」を送ってください^^！

2012年11月20日放送 NHK「青春リアル」

<http://www.youtube.com/watch?v=yC1TiJH185k&feature=youtu.be>

120928 原発行動 渋谷 1人デモ

<http://www.youtube.com/watch?v=vm1ZPOtGA0g>

ただいま「裸ラジオ(仮)」企画進行中！！いや～いいね！！



● 2013・4・8 若い人が動かないと

『今は若い人が動かなければどうしようもないのだと思う。誰かやってくれないかなではなく、自分が動く。』

放射能にちゃんと反応できた人間は僕と同世代、それかもっと若い人たちだった。その直感が僕は気になっている。それが鍵なんじゃないかと思う。何の思想も語らなくていい。ただ危ないものは危ないと思うことができ、人に危ないと伝えることができ、手を差し伸べること。

とにかく若い人が動かないとどうしようもない。

『独立国家のつくりかた』坂口恭平』

● 4・21「もやい」を訪ねて

『昨日、特定非営利活動法人もやいのサロン・ド・カフェ「こもれび」に行ってきました。』

「もやい」は路上生活者やいろいろな人の相談支援を行っている団体です。

サロン・ド・カフェ「こもれび」はほぼ満員でした。

来られているみなさんはご飯を食べたりコーヒーを飲んだり、周りの人と話したり、とても楽しそうでくつろいだ様子でした。

あたたかい雰囲気がとても居心地よかったです。

煮込みハンバーグのついたランチは、なんと 350 円！でおいしい食後のコーヒーまでついてきました。

来た人が思い思いにくつろげて、居場所や、人とのつながりをみつけられる場所。

「コミュニティカフェ」とでも言うのでしょうか。

こんな場所が今とても求められていると思います。

僕も人と出会うことができました。そして他にも楽しい場所をいろいろ教えて頂きました。

よかったらぜひ行ってみてください。いやーいいですよ♪

ところで、「こもれび」の中には何人かの方の遺影の写真がありました。「もやい」に来られた方や支援者の方だそうです。

なかには40代の方の遺影もありました。

路上生活は肉体的にも精神的にもしんどいことが多いので、ダメージがたまりやすいそうです。

路上生活者の6割がなんらかの精神疾患をかかえておられるという調査結果もあります。

いやーゆるせん！！！！こんな状況絶対おかしいだろ！！

「こもれび」みたいな場所をもっと増やしたい。

やるぞー！！！！

0円スペース提供希望！

もしよかったら僕らに無料で場所を提供してください。

東京都下 月1時間～ 2畳～』

### ● RIOTの企画

『【RIOT】企画！！

第1回 RIOT！！

2013年4月28日(日) 18:00～

地下鉄東西線早稲田駅 3a 出口集合！

内容:とりあえずたまってみる。個人的・社会的な話などトーク。突き抜ける企画を企画。

孤立、自殺、退屈、貧困、規制、差別、戦争、原発、カネカネカネ！ふざけんな！

閉鎖的で狭苦しい秩序。これが安寧か？

「苦しい」と叫ぶ場所もなければ、続々と手が差し伸べられるわけでもないこの社会。絶対おかしいだろ！

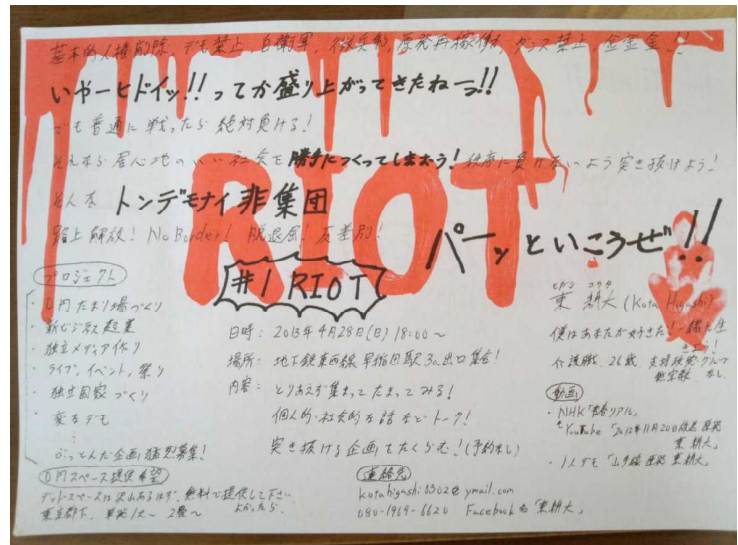
それなら新しくつくろう！管理社会に呑まれる前に斬新にとにかく突き抜けよう！

路上解放！脱退屈！No Border！つながり！

パーッといこう！

〈プロジェクト〉

- ・0円たまり場づくり
- ・新ビジネス起業
- ・独立メディア作り
- ・ライブ、イベント、祭り
- ・独立国家づくり
- ・デモ
- など！



0円スペース提供希望

無料で場所を提供してください。

東京都下 単発1時間～ 2畳～』

### ● 4・23 【RIOT】チラシまき

『原宿、渋谷で RIOT の Flier を撒いてみる。

うーん日本人はなかなか受けとってくれない！

外国人は7割くらいの確率で受けとってくれる！

その後携帯に知らない番号から「I will join!」という連絡が入る！いやー28日が楽しみ

だ！

ひどい世の中を既存の政治体制を使って変えようとするのではなく、自分たち自身で小さくても別の社会をつくりあげようという動きが、最近比較的活発です。でもまだまだその動きは十分とは言えません。

不特定多数の人が集まり、社会的・個人的な問題を話し合っ、気の合う人たちで自分たち自身でその状況を変えるべくイベントやデモ、小さな法人を起業したり、コミュニティ、小さな社会ができたりする場所、そんなことを企める場所、を 0 円で提供することは意義があるとは思いませんか。そんな場所は出来るだけ多く存在するべきだと考えています。今はあまりにもそのような空間が少なすぎると感じています。僕はそのような 0 円たまり場スペースづくりを、いろいろとやりたいことのベースに据えたいと考えています。

本当に苦しい人に寄り添って運動する、ともに歩もうとする姿勢が一番大事かと思えます。しかし、まず自分もこの日本の状況のなかで苦しいです。そして、寄り添って運動することが必ずしも、「穏やか」に従来のやりかたで運動するということではないように思っています。

Flier の雰囲気、やりかたには問題があるのかもしれない。

色々どしどしご意見をくださいますと大変助かります。

いろいろと考え、悩み苦しむ、どしどし修正していきたいです。

マイノリティへの視点を忘れずに行動したいです。またマイノリティ、マジョリティというものがあるのか、重層構造になっているものではないのか、そこに自分も含まれてはいないのか、も含めて、常にいろいろな人の意見を聞き、自省しつつ行動していきたいと思っています。

今の日本の状況では「これがいい！ やりたい！」と素直に思えたらすぐに実行に移す、主張してみるということが僕は結構大事だと考えています。

僕は今この社会で、「素直にものを言わせない。考えさせない。ありきたりな生き方を強制する。反抗はもちろん、『普通じゃないこと』を実行させない』ような無言の圧力というか、秩序というか、重苦しさを感ずるのです。

困った問題は、本当に山ほどあるのだと思います。

しかし、僕がその中で一番切実な問題として捉えているのは、この重苦しい身体化された秩序です。それをなんとかしたくて、RIOT と名づけました。』

## ● 4・28 【RIOT】開催

『#1 RIOT (ともに生きる心意気)がとうとう開催されました！

20 名くらいの方々が来て下さいました。10 代の若者もちらほら。

なんと！映画館に置いてもらったものや、あちらこちらで撒いたフライヤーを見て来てくださった方も！すごそうな人にも会えました！！



RIOT の企画説明後、自己紹介、0円たまり場のあり方、あと適当に話しました。メーデーに向けたグッズも少しつくりました。

いやー実は盛り上がりましたよ(笑)!! (写真はみんなに向こう向いてもらったのでしょぼいですが。来た人はわかる!!)いやーよかった!!

また次回!! 次は公園か? ちょっといろいろ考えています! 気が向いたらぜひお越しください!!

● 5・20 ピクニックちらし

『ピクニックのチラシです。2013年5月26日(日) 12:20~高円寺にて開催です。

紙がもったいないのであんまりまきたくない気持ちと葛藤

でもこのデザインは好きです^^

もし気が向きましたらお越しください。』



● 5・21 性暴力をめぐって

『27分ごとに発生する米兵の性暴力で女性兵士3割レイプ被害一軍隊は女性も住民も兵士自身も守らない』<http://ameblo.jp/kokkoippan/entry-11533602627.html>

「イラク帰還の自衛隊員の自殺率は日本平均の14倍」「米兵の性暴力は1日平均52件 米軍基地の外の一般住民に及び、沖縄は世界最悪」(← 2013年、1日平均70件に

急増しています。<http://democracynow.jp/dailynews/13/05/08/1> )

国防総省の調査報告 昨年度の米軍内での性的暴行 2 万 6000 件 1 日 70 件見当  
米国防総省から、米軍内では毎日 70 件ほどの性的暴行事件が起きているという衝撃の  
調査結果が発表されました。この調査によれば、2012 年に起きた性的犯罪は推計 26000  
件で 2010 年から 37 %の増加となっています。しかしほとんどの犯罪は届け出られていな  
いのです。この調査結果が発表された 2 日前には、空軍の性的暴行予防対策部隊の隊  
長ジェフリー・クルシンスキ中佐が性的暴行容疑で逮捕されています。5月 7 日に行われ  
た軍内の性犯罪に関する上院軍事委員会公聴会から抜粋を放送し、「兵役女性のアクシ  
ョンネットワーク (Service Women ' s Action Network )」の代表で共同創設者のアヌ・バグ  
ワティに話を聞きます。「これはとんでもない数字です。私たちは転換点に来ていると思  
います」とバグワティは言います。「アメリカ社会は激怒しています」

「風俗で性暴力なくせない、性暴力被害者の7割が相談できずPTSDに長期間苦し  
む、性的支配の根絶を」

<http://ameblo.jp/kokkoippan/entry-11533602627.html> : 憲法9条・平和の問題

(後略)』

## ● 5・26 国連調査報告書

『福島第一原発事故:国連報告書「福島県健康調査は不十分」

毎日新聞 2013 年 05 月 24 日 15 時 00 分(最終更新 05 月 24 日 16 時 59 分)

東京電力福島第一原発事故による被ばく問題を調査していた国連人権理事会の特別  
報告者、アナンド・グローバー氏の報告書が24日明らかになった。福島県が実施する県  
民健康管理調査は不十分として、内部被ばく検査を拡大するよう勧告。被ばく線量が年間  
1ミリシーベルトを上回る地域は福島以外でも政府が主体になって健康調査をするよう求  
めるなど、政府や福島県に厳しい内容になっている。近く人権理事会に報告される。」

(後略)』

## ● 5・27 福島の子ども

『知ってください！福島集団疎開裁判ご存知でしょうか？

福島県郡山市の小中学生14人の子どもたちが、勇気を持って、「年1ミリシーベルト以  
下の放射能から安全な場所で教育を」という訴えの裁判を起こした事を。

10代の子どもたちがなぜ？このような裁判を起こさなければならないのでしょうか。

2012年6月24日に、申し立てをしてから、主要大手メディアは一切、この裁判の報道を  
しません。

2012年4月26日に発表された第2回の甲状腺の「福島県民健康管理調査」で、13市  
町村の3万8千人の子どもたちのうち35%に「のう胞」が発見されました。

そして同年9月11日の発表では、主に福島市の4万2千人の子どもたちのうち43%に「のう胞」が見つかったのです。

チェルノブイリでは4年後に甲状腺の異常が出てきました。

しかし、福島はたった1年後に出ているのです。

(中略)

想像してください。

ご自分の近い人が、赤ちゃんが、子どもたちが、治療に苦しむ姿を。

将来に不安を持って生きていく姿を。

「クオリティ・オブ・ライフ」

人生の質を考えていく時代になりました。

大事な事を見ない人生。一人ひとり責任を持って生きていく人生。

あなたなら……。丸子安子』



## ● 5・28

『僕は、その人が好きなことをやっていて、しかもその行動が他者に開かれたものだったら、技術的に「上手い」「下手」などをひとまず置いておいて、ほぼ無条件に「すげえいい!!」と思います。

他者に開かれているかどうかというのはきちんと説明するのはとっても難しいですが、究極的には人を喜ばせたい、楽しませたい、なかよく生きたい、居心地よく生きられる空間をつくりたいとか、他者と向かい合いたいとか、そんなあたたかい方向を向いているということです。(僕はほとんど全ての人の行動がそういうものだと思いますが)』

## ● 2012・7 10万人集会でのこと

『「反原発」ってなんなんだ! ?と思った出来事/悲しかったこと

2012年7月ごろに開催された「さようなら原発 10万人集会」での出来事です。

ここで、個人的にとっても悲しいことがありました。

集会では広瀬隆さん、大江健三郎さんなど有名な方々がステージ上で順番に、集会の意義や、原発のことを話していました。



そこに突然客席からステージに飛び入りして話しはじめた女性がいました。

「放射能で汚された土地がかわいそう」「原発いらなと思います」「私は枝野さんに会いましたが、実際はそんなに悪い人ではないような気がしました」というような彼女の思いを、彼女は話していました。



彼女が登壇した直後から、「帰れ」「ふざけるな」というブーイングがちらほらありました。そして彼女が「枝野さんは悪くない」という個人的見解を吐露した直後から、ブーイングが激しくなりました。「帰れ！帰れ！」のコールが、集会を前列で聞いている人たちを中心に起きました。僕にとってはものすごい排他的な、恐ろしい雰囲気は前列を中心に生まれました。そして彼女は、運営者の人たちに羽交い絞めにされ、ステージから降ろされました。

羽交い絞めにされながら彼女がマイク無しで全身全力で叫んだ言葉を、僕は今も忘れられません。

「私は今日死ぬ覚悟で来たんだよ！！私は薬(おそらく精神薬?)も飲んでる！

私も人前で話すのは苦しいんだよ！！でもこれは伝えたかったんだよ！！ふざけるな！！必死の思いで伝えたんだよ！！本気なんだ！！なんで排除するんだ！！排除するな！！私は必死にやってるんだよ！！」ということ「帰れ！帰れ！」というコールが満ち溢れるなか、羽交い絞めにされステージから降ろされながら、彼女は力の限り叫んでいました。

ステージから降ろされた彼女がその後どうなったのか、僕にはわかりません。

全力で死力を尽くして叫んでいたのも、彼女はその後倒れたりしたかもしれません。それはわかりませんが。

とにかく、僕がもうどうしようもなく悲しかったのは、その彼女の必死の訴えに対して、彼女に耳を傾けようともせず、ひたすら「帰れ！帰れ！」と排除をしようとした会場の前列を中心とした雰囲気です。

(しかも彼女は「反原発」、「もっとよい社会を」という点では、会場の人たちと意見をともにし、同じ方向を向いていたにもかかわらず、排除の対象になってしまっていました。)

そしてその後ステージ上では、有名な人の話が、彼女の存在に触れることなく、何ごともなかったかのように続いていきました。

同時に「帰れ！帰れ！」とコールをしていた人たちも、ほっと一安心したように有名な人の話に静かに耳を傾けました。「帰れ！ふざけるな！」と彼女に対しては叫んでいた人た

ちも、有名な人の話となると、まったく批判の声をあげようとしていませんでした。

「彼女が言っていることは賛成しかねるけど、ちょっとは彼女の気持ちに寄り添おうよ。ただ暴力的に排除するだけじゃだめだよ。一緒に話し合えばいいじゃないか。なかよくやろうよ！」という声はまったくあがりませんでした。これはとても悲しかったです。

もっと悲しかったのは、僕自身が「彼女を単純に排除するなよ！一緒に話して、つながって、なかよくやろうよ！」とちゃんとその場で言えなかったことです。

一応、僕は有名な人の話が全て終わり一段落したあと、ステージに上がりました。嫌われる覚悟で、「この排他的な雰囲気はおかしい」というようなことを言おうと思っていました。しかしマイクのスイッチが切ってありました。地声でそのことを叫ぶ勇氣はありませんでした。そしてすぐ運営の方に「何なの？あなた？」と話しかけられ、逃げるように一瞬でステージを降りました。

確かに、福島から避難してきた人や、原発に対して強く当事者意識をもっている人、現政府に強く怒っている人たちにとっては彼女の発言はゆるせないものだったのでしょう。また暑い中、みんないららしていたこともあったのかもしれませんが。他にもステージ上で話したい人はたくさんいたのでしょう。

しかしだからと言って、彼女の話をつよく聞かず、単純に暴力的に、集団の力で排除するというのは絶対におかしいと僕は思いました。

そして有名な人の話はひとまず傾聴するという、これこそが悪質な全体主義、権威主義、形式主義のちょっとした表れではないかとも思っていました。

以上が悲しかった出来事の説明です。

長々とすみません。

ところで、僕らはなんのために反原発と言ったり、いわゆる「運動」をしたりしているのでしょうか。

僕はいわゆる「運動」のちからとは、人のつながりの力だと思います。

血の通っていない権力や、金、システムに、人と人とのつながりで対抗するものだと思います。人を信頼して、人と人が少しずつつじわつじわとつながって行って、よりよい、より居心地のいい社会をつくろうとするのが、いわゆる「運動」だと思っています。

異質な考え（たとえその異質な考えの表現方法が「下手」だったとしても）を受け入れようとすること、話し合ったり、一緒に関係を少しずつでもつくりながら、ともに歩いていこうとすることがとても大切だと思っています。

この集會に集まっている人たちが一体何を目標しているのか僕にはわからなくなっていました。

原発反対の声を大きくして行って、それで原発がなくなったからといって、それだけで僕らの目的は達成されたとは、僕は言えないと思います。そして、「10万人集會」のあの場の排他的な雰囲気が反映された社会では、僕は絶対に生きてくはありません。もっと根本的に大切にしたらいいことがあるのではないかとエラソーにも思っていました。

(※もちろん「10万人集会」自体は、とても素晴らしいものでした。僕が問題にしているのは、あくまで彼女が排除された「あの場」「あの瞬間」での僕自身が感じた雰囲気のことです。)

(※ところで、僕自身は誰かとよく話してよく考えた上で、自分が「原発推進」になっても、それはそれでかまわないと思っています。原発はとんでもないものだとも以前も思っていますし、それはほとんどありえないとは思いますが、いつもオープンな心持ではいたいと思っています。)

価値観、意見、文化、身体的特徴、性別、人種、国籍などなど、そんなものが違って、みんなが、個人が居心地よく生きられる社会を目指したいです。小さくても身近にそのような空間をつくりたいです。

また、僕はいわゆる「運動」は苦しい人に寄り添う、ともに歩もうとする姿勢が大切だと思っています。また、他者に開かれた自分でいたいと思っています。

エラソーにすみません。

以上、『『反原発』ってなんなんだ！？と思った出来事／悲しかったこと』についての長々とした記述でした。

これを読んで誰かを傷つけてしまったら、本当にごめんなさい。傷つけようという意図はありません。僕はなかよくやりたいだけです。僕はほとんど何も知りません。教えてください。

もしよろしければ、ご意見、ご批判ございましたら、お待ちしております。  
エラソーにすみません。』

★：『自由に意見が言える雰囲気が大切ですね。今は、自由に意見が言える立場さえ保障されてない感じがします。自由に意見が言える場を考えていきたいですね。』

★：『右翼であろうと左翼であろうと、どんな集まりでも極端になっちまうとみんな同じになるんですね』

★：『シェアさせてもらいます。』

★：『とてもステキな感性じゃないですかあ！！どんな意見でも言えるということは、それが受け入れられているという雰囲気が作られてるってことですよ！

放射能の問題でも、まあ何でもそうなんだと思うんだけど、正論(まあそれ自体が果たして本当に正論なのかと言うこともあるんだろうけど)をかざすと、何だか上から物を言われているような、責められているような、そして言っている人は100%それが正しいんだという空気で言ってくることって、実は怖いことでもあるような気がします。

きっとみんなもっと話を聞いてほしいんだと思うし、なかなか言い出せない声を聞き出せるような人になりたいなあとは自分は思っています。』

★:『これですね。2:40～。』

<http://www.youtube.com/watch?v=nQdrFS9A9mk>

★:『僕は川崎で「原発ゼロへのカウントダウンinかわさき」という会をグループを作って活動しています。会の中身は東さんがおっしゃるような「様々な違いを乗り越えて原発の問題でいっしょにやろうよ」という会です。なので東さんの意見に賛成の立場からの意見です。ただ、僕も集会を運営する側なのですが、集会を行うのに何カ月も前から準備をして、



当日は分刻みのスケジュールで進めていきます。有名無名の問題でなく発言者は事前に決めて3分なら3分とかの範囲で話しています。飛び入り参加はかなり集会の運営に負荷がかかるのは事実です。だから暴力的に排除していいのかというのは違いますが、彼女がいろいろと話した後に(けっこう話してましたよね)「枝野さんは実はそんなに悪い人間じゃない」という中身だったので僕が運営側でもやっぱり引きづり下ろすと思います。(説得しておりてくれるなら別ですが彼女も死ぬ気できてますから止めるこっちも必死になるでしょう)。枝野さんの個人の問題がどうのこうのではなくて、彼が官房長官としてテレビで「ただちに健康に影響はありません」とずっと言っていた事で避難をせずに被ばくした子どももたくさんいます。「私は会った事あるけど以外と思っていたより良い人だったよ・・・」とかそういう問題ではないと思います。東さんの意見を読んで「飛び入り意見歓迎でやったらそれはおもしろいだろうな」と思いました。そういうのは大きい集会では無理っぽいから地域でいろんなところでできたらいいですね。長文失礼しました。』

★:『なんにもエラソーじゃないよ。すごくすごく大事なことだよ。ちょっとウルツと来たよ。あなたのようなハートが運動が多くの人に浸透するのに一番大事だと思う』

★:『私も★さんと同様におもいました』

★:『みなさんこんばんは。こうやって「自分の気持ちを表明する」「打ち明ける」ということは誰にでもできることではないと思います。「悲しかったこと」を誰にも話さずに自分の中で抱え続けるのは簡単だけど、とってもストレスになることです。自分にとって違和感のあることは誰かにとって大切な意味を持つことなのではないかと思います。もちろん理想(こうあればいいのに)と現実(実際はこんなふうだった)は個人個人の立場で違うので賛否両論だと思いますが、この記事はとても大切なものになりそうです。みなさんの意見もとても参考になります。これからも見続けて行きたいし、議論にも参加したい。記事もシェアさせてもらいたいです。長くなりそうなので今夜はそれだけにします。おやすみなさい。』

★:『絶対的な神と悪魔を欲する人たちの脱原発、誰かを罰したくて仕方のない人たちに

消費されているばかりで、これでは傷ついた人や本当に問題解決を望む数多くの人たちにはたまったものじゃありません。強く同感します。わたしもほぼ同じような違和感嫌悪感を抱いてこのような運動からは遠ざかりはしました、でも他のシーンでやれることはいくらでもあるんですよ。ライブであんな体験するとそりゃ凹むのも無理ないですが希望は捨てぬよう。』

- ★：『私もあの日あの場所にいました。どんなに崇高な思い切なる願いがあったとしても集団、組織となってしまうと異端を排除するという暴力的な全体主義になりがち。それが正義の名の下に集まっている場合はなお。私は後ろの方にいたのですが皆の薄ら笑いのような雰囲気は忘れられません。全員がちゃんと向き合わなければならない。目的はなんなのか？どんなことをしても原発を止めればユートピアがあるわけではなく、皆が安全に平和に尊厳を持ち皆を尊重し合って生きる世界が民主主義だと思ってます。暴力があってはどんな行動も意味がないと思う。』

#### ● 6月4日 読んでくださった方へ

『ご意見ありがとうございます。』

僕が問いとして抱えているのは、「“大きな利益”のためには、“小さな犠牲”は仕方ないのか？」というものです。（“大きな利益”が本当に大きな利益なのか、“小さな犠牲”が本当に小さな犠牲なのかという問題はありますが）

分刻みのスケジュールで動く、10万人、20万人の大きな集会では、飛び入りで話し出すような人（しかも集会参加者のほとんどが賛成しかねるようなことを話す人）は集会自体の影響力に関わる重大な邪魔者だと思います。

加えて、「さようなら原発 10万人集会」は、緊急の切実な必要性から行われたものでした。つまり今回の集会を大規模に、影響力のあるものにできるかどうか、多くの子どもをはじめ人間の命を救えるかどうかを左右する、真に切実なものでした。

問題の場面で、運営側や参加者が彼女を排除しようとしたこと、それ自体は僕にもよく理解できます。

あの瞬間は、あのようになかなかのなかつたものなのかもしれません。

※以降の文章は、コメントを頂いた方には「なんてあたりまえのことを言っているんだ！」と受け止められるかもしれませんが、書かせてください。それぞれの方のコメントに対しては、僕はすべて大賛成です。僕の理解では、僕はコメントを頂いた方とほとんどすべて同じような意見をもっています。同じ方向を向いていると勝手に思っています。



ところで、僕は、「“大きな利益”のためには、“小さな犠牲”は仕方がない」とは考えたくありません。たとえ、大きな集会であっても、あのような必死な叫びがあれば、それなりにほんの少しでもいいので立ち止まって、集会に集まった人も、運営側の人も、司会者も、講演者もほんの少しでも反応をするべきだったと思います。

反応が、「みなさま、ちょっとしたハプニングはございましたが、しかし、一生懸命な人はいるということです」という司会者のフォローだけだったというのは個人的には寂しかったです。

彼女の必死の叫びは、内容はともかく、「ちょっとしたハプニング」で済ませられるものだったのでしょうか？有名な人が彼女と同じ行為を行った場合、「ちょっとしたハプニング」と司会者は表現したのでしょうか？

とにかく、これはあくまで私の主観的な感覚です。僕は個人的には、彼女が排除されたあの瞬間、排他的な寒々しい、さびしい、恐ろしい雰囲気を感じました、そして悲しかったです。

時間もかけず、彼女の発言を受け止めることは出来たと僕は思っています。続く講演者の方々は、全く彼女の存在にふれませんでした。「いや～彼女の発言はところどころおかしいと思うけどね～。でもあの本気はすばらしいですね。いろいろみんなで話して、よりよい原発アクションにつなげていきたいですねー。」とか簡単にでも、彼女の存在にふれるだけでもよかったと思うのです。でも全くありませんでした。

○:僕は、デモや集会に来るような人は「“大きな利益”のためには、“小さな犠牲”は仕方がない」とは考えない人だと思っています。「犠牲の大小に関わらず、犠牲をなくしていこう」と戦う人たちだと思っています。「“大きな利益”のためには、“小さな犠牲”は仕方がない」という考えに反対するからこそ、原発に反対しているのだと思っています。中央への電力供給という“大きな利益”のために、地方に“小さな犠牲”として原発が建設され、稼働してきました。日本の核開発にしても、“大きな利益”のためには仕方がないということでしょう。

沖縄の米軍基地についても、TPP など多くのことについてもそうだと思います。僕はそれらが、“大きな利益”、“小さな犠牲”とは思いませんが。それらを決定し、支持していく流れにとっては大きな利益であり、小さな犠牲と捉えられていることなのでしょう。

「さようなら原発10万人集会」での彼女へのあの対応はある程度仕方がなかったのかもしれない。

しかし人数の問題や、集会が円滑に行われることを優先し、最も問題視している「“大きな利益”のためには、“小さな犠牲”は仕方がない」という考えを、まさに問題視している人々が体現してしまうことは、最悪な本末転倒だと僕は思います

「“大きな利益”のためには、“小さな犠牲”は仕方がない」というのは、資本、システムの考え方だと思います。人間の血が通っていないと思います。

あの集会での彼女への対応が仕方のないものであったとしても、僕はやはり、「そこで自分が時間もかけず、集会の邪魔もせずになにかやれたのではないか」「もしかしたら人数に頼るという集会のやりかた自体が間違っていたのではないか。大人数でやるにしても、もう少し違った空間の作り方があったのではないか(ただステージの人の話を皆が聞くというスタイルだけではなく)」というような問いにこだわり続けたいと思っています。

僕はやはり、飛び入りした彼女を犠牲にはしたくないのです。

理想と現実。理想をいますぐに、大きなかたちで実現することは難しいことでしょう。

しかしとても小さなかたちでなら、僕は今すぐにでも実現可能なものもたくさんあると思っています。それはとても小さいですがやるべきことだと思っています。

僕は「“大きな利益”のためには、“小さな犠牲”は仕方がない」という考えに疑問を持っています。持ち続けていきたいと思っています。

長々とすみません。出勤前の非常にばたばたとした時間に大急ぎで書いてしまいました。読み辛い点があると思います。すみません。』

## ● 5・29 同上 文章を読んで頂いた方へ

『本当にありがとうございます。17 時間夜勤介護労働明けの状態です。朦朧としておりますが、これは早くお伝えしなければいけないと思い、書いています。

僕は、飛び入りの彼女が映っているこの動画

<http://www.youtube.com/watch?v=nQdrFS9A9mk>

をある方のおかげで今日初めて見て、こんな僕にもこの動画の中で映っているその瞬間に本当にいろいろな人の思いが、とてつもなく錯綜している、無限に交差していることをようやく感...じました。

この動画を見て僕は、飛び入りした彼女の言葉にも暴力性を感じ、「帰れ！ふざけるな！」と叫んでいる人にもあたたかさを感じ、「排除しようとしている」とされている人の行動にもやさしさを感じました。それぞれの人の一生懸命さ、切実さを感じました。

本当に複雑だと思いました。

だから瞬間を一面的に切り取って、まるで高見から見下ろすような僕の文章(しかも最悪なことに記憶が不確かで事実ではないことが含まれているかもしれない)は、排他的で暴力性を帯びたものだと感じました。

僕が当時悲しかったのは本当ですし、仲良くやりたいのも本当です。しかしながら、こんな一方的な文章を書いてしまった自分がとても恥ずかしいです。穴があったら入りたいです。

P.S.大げさな主張をかざすのではなく、目の前の人にその場で向き合っ、いろいろなこと

を感じ、日々を歩んでいこうとおもいました。わけわからない文章ですみません。

(><)だめだめですみません。」

★：「これもシェアさせていただきます。」

★：「いや、良い文章でしたよ。間違えることは若いとき、最も良いことです。一番に恥ずかしい人ってのは、間違えたくないから挑戦すらしないくせに、裏でグダグダ正しいフリして言ってる人です。」「反原発とは」以外は、とても良い問題提起になってましたよ。めげずに書いてもらいたいです。これからも、やさしいところを、一番大切になさってくださいね。」

★：「反原発とは」は、この件についてだと、若干に論点ずれしただけですから、「反原発とは」を、考え続けたり人権とはを考え続けたり、とても良い事だと思います。

大雑把に、浅羽氏の「右翼と左翼」を読むと政治入門に良いかもしれません。両翼とも本来普通の人ですから、大切にすべき人と思うところが一番に必要です。どちらかを無条件に見下げる傾向が世にはありますから、東さんの優しい視点が一番重要です。大人になるにつれて忘れていきますから、お忘れなきよう☆ではまたどこかで^^』

#### ● 6・4 TICAD Vから

『特定非営利活動法人オックスファム・ジャパン アドボカシー・オフィサー森下麻衣子さんの最新投稿情報を受け取る。

TICAD V :モザンビークの人々から安倍首相に手渡された驚くべき公開書簡

投稿日: 2013年06月02日 18時06分

TICAD V (第5回「アフリカ開発会議」)に特段興味がなくとも、大豆食品を食べる全ての人に知ってほしい話がある。第5回を迎える「アフリカ開発会議」の開幕前夜の5月31日、安倍首相主催のレセプションにおいて、モザンビークから来日した一人の男性が同国の十数万の人々より託された公開書簡を首相に手渡すという任務を全うした。その内容は、日本に対して大きな問いを突きつけるものだった。

[http://www.huffingtonpost.jp/maiko-morishita/ticad-v\\_b\\_3373974.html](http://www.huffingtonpost.jp/maiko-morishita/ticad-v_b_3373974.html)

(後略)』

#### ● 6・4 労働に殺される

『僕は大学で英語と国際関係学を専攻した。

1年生の頃、同級生は僕と同様に「世界の飢餓、貧困、難民をなんとかしたい」と強く訴えていた。彼らが就職したのは、総合商社、重工業、大手メーカーなど。「開発」という名の荒唐を進め、原発を製造、設置し、武器もつくっているような所(?)でも働いている人がいる。

僕は極短期間 ODA 専門商社で働いた。ODA 案件を落札し、援助物資を調達、輸送

し、現地で設置、配送する。そこには金儲けと効率主義、システムだけがあった。「どんな人がどのような援助を必要としているのか。あるいは不要なのか」を考えることは全く必要とされていなかった。人間に触れられない仕事だった。国際貢献とは真逆の仕事だったと思う。僕はすぐ辞めた。

確かに、自分がその組織を内側から変えるという道はあるのかもしれない。

しかし権力を得れば、自分が変えることができるのだろうか。

その地位に立ってしまえば、やれること、選択肢なんて実はほとんどないのではないだろうか。

ところで、同級生の Facebook には、飢餓、貧困、難民など社会問題についての記事がほとんどない。原発について書いているのは僕だけだと言ってもいいくらいだ。

彼らも苦しいのだろう。一生懸命働いているのだろう。

そして働いて、「世界はこのままでいいんだ」と悟ったのだろうか。僕は、大学生の頃と今の彼らの違いに驚いている。

自分のやっていることが、最終的には人の幸福につながっていると考えることができたのだろうか。

きちんと苦しい人に寄り添えている実感があるのだろうか。素直に発言し、本当に自分として楽しく生きられているのだろうか。

僕は周りに苦しい人がたくさんいるこの現状が悲しくてたまらない。そしてまた楽しくもやりたい。でも僕はどうすればいいのか、あまりよくわからない。でも金儲けをする大きな組織では、本当に自分が「いい」と思えることはほとんどやれない気がしている。ウソはつきたくない。悩みながらそれでも色々と自分で何かつくろうとしている。

どうか僕にいろいろ教えてください。この状況がなんなのか。

(後略)』

## ● 6・5 労働の拒否

『めちゃくちゃわかりやすく、僕的にはかなりいいことが書かれています！

転載おっけーということで、以下全部コピーペーストです。

「労働の拒否から考える」渡邊太(国際脱落者組合組合員)

( <https://sites.google.com/site/datsuraku/home/vol1/refusal> )

いまや怠け者とほとんど同じ意味で使われるようになったニートという言葉であるが、ここでは 70 年代イタリアのアウトノミア運動において呈示された労働の拒否の系譜にニートを位置づけてみたい。

(後略)』

## ● 6・7 放射能現地調査

『双葉町には 160 年帰れない』

放射能現地調査から

木村真三

(後略)』

## ● 生活保護アクション

『6/14(金)12:00 ~ 13:00「骨太の方針」は弱いものイジメだ！「緊急・首相官邸前スタンディングアクション」のチラシです。こちらもシェアをお願いします』

(後略)』

## ● 6・9 「不審者」について

『都内某スーパーにて。ひどすぎて爆笑しました。

こんなポスターを貼ってどうなるのでしょうか。あくまで僕個人としてはこれを見たとき排他的で歩み寄りがなく、人間どうしを分断させる雰囲気を感じました。

「不審者」を増やすためにあるようなポスターだと感じました。

僕は悪い人はいないと思っています。

「悪い人」を生み出す環境を、システムを問いたいです。陳腐ですが。

★:「そもそも、「不審者」というものをどう分別するか、それが曖昧です。

勝手に決めている感じもするし。」

★:「僕もそう思います！」

○:「すみません、ここでいう「不審者」とは児童をさらおうとしたり、セクハラをしたりする人のことを言うようです。↓参考

<http://www.keishicho.metro.tokyo.jp/seian/fushin/04shinjuku.htm>

うーむ。僕もそんな「不審者」はいなくなっしてほしいです。でもやっぱりこのポスターは苦手です。児童をさらったり、セクハラをしたりする人は社会的に疎外されている人が多いとよく聞きます。苦しいからこそ、人との関係を築きにくくなっているからこそ、孤立しているからこそそのような行動に出るのでしょうか。だからこそ単純に「不審者は通報するぞ！」という苦しい人に歩み寄りのない、一方的に叱りつけるようなポスターは、僕は苦手です。その人の思いをよく聞いて、感じて、一緒によく考えること、聞き手自身が率直に自分を省みること、環境、システムを問い直すことなど、そのような歩み寄りからこそ根本的な解決が生まれると思います。

すみません、陳腐ですが。』



## ● 6・10 ドイツ放射能防護協会提言

『ドイツ放射線防護協会提言

子供4ベクレル推奨&1000キロ離れたウイーンですらこんなだった

<http://ameblo.jp/yuuna7777777/entry-11454302968.html>

(後略)』

## ● 6・11 福沢諭吉をかりて

『日本の政治学の祖とされる福沢諭吉が「無政府が理想」と語っている件について。

「福沢諭吉自身は理想としては無政府が好ましいと語っている」

(確か『アナーキズム』(浅羽通明, 2004, 筑摩書房)にそのような記述があったと思います)

「諭吉自身は息子の質問に答え理想の国家とは無政府主義だといっているのですが実際にそれは無理なので富国強兵、個人主義、市民社会を目指しました。」

[http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question\\_detail/q1112174106](http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1112174106)

『アナーキズム』が手元に無いので、Yahoo!JAPAN 知恵袋の投稿からの引用です。すみません。)

「天ハ人ノ上ニ人ヲ造ラズ人ノ下ニ人ヲ造ラズト云ヘリ」(『学問のすゝめ』,福沢諭吉)福沢諭吉の名前を、権威をかりたいわけではありません。

僕自身本当に勉強不足で申し訳ありません。なんにもよくわかりません。

でも僕は幼稚だと思われようとも、これだけはくどいようですが言い続けたいのです。力よりも人を信じたいのです。

血の通った、あたたかい人のつながりを信じたいです。」

○:「悪い人間はいないと思う。人間は、わがままなだけではないと思う」

★:「賛成です。人間を信じたいです。」

○:「ありがとうございます！うれしいです！

★:「私も同感。生まれつきの悪はいない。けど、成長段階のいろいろで悪色に染まってく人はいる。貧困と同じようなサイクルと思います。」

○:「コメントありがとうございます。昨日は無理でしたが、また機会がありましたら、一緒にお話をさせて頂けますとうれしいです^^」

○:「実際に被害にあったひとにしてみれば、僕の発言は逆に冷たく、その人の気持ちに寄り添わず、つきはなすような言葉なのかもしれません。僕はバカで、守られた空間にいて、エラソーで、鈍感です。ほとんどみんなわからないことばかりです。もしよろしければご批判もお待ちしております。」

★:「たとえば、被害を受けた直後に↑の言葉を聞いたら、「ひどい！」という意見もあるかもしれない。でも、中にはその苦しさの中でも、悪いのはその人じゃない、という因果関



係を見ようとする人もいますね。秋葉原無差別殺人事件がその例だと思います。あのとき自分も刺されたタクシー運転手の湯浅洋さんという方は、「なにがああの事件を引き起こしたのか」という根本的な問題を探っていました。でも悲しいのは、それと死刑という極刑を求めるのは別の話でした。昨日、こーたと「悪い人」などについて話そうと思ったら、先に帰っちゃったからね。今度の機会にでも。しかし、少なくとも誰の目にも「エラソー」には映らないと思いますぜ。』

● 6・13 放射能による健康被害

『「ツイッターに不適切書き込み、復興庁幹部を処分へ」 TBS News 公開日: 2013/03/07

【FoE Japan】』

● 6・17 Save Me Save Us デモ

『これはいい！！気が向いたら行きませんかー』



デモのあとアフター・パーティー開催します。

**"Save Me, Save Us" after party**  
 ★  
 ～かくめい喫茶の夕べ～  
 2013年6月30日 17:00～22:00  
 素人の乱12号店2号店  
 参加費(チケット購入)おとな500円、こども250円

**選曲**  
 野中モモ (Lilmag) 18:00～  
 ぽえむ (2MUCH CREW) 19:00～

**ギターとことば** 20:00～  
 ギター: 鈴木美紀子  
 朗読: 原田淳子 & 参加者歓迎  
 読んでほしい詩、文章がありましたらお読みいただけます。

**zine**  
 持込歓迎

**food**  
 ゲリラ・カフェ(ベジ・food)  
 いずりなおさん(ビール) など

**展示と販売**  
 タルミナエ(切り絵) YABASTA!  
 サバ子(ヤバスタグッズ) 持込歓迎

ゲリラカフェ図書館  
 金曜日官邸前に出役している  
 ゲリラカフェ図書館出張版

「かくめい喫茶」とは、  
 金曜日の官邸前抗議にあられる  
 通称「ゲリラ・カフェ」のこと  
 そこには手作りのおかしやサンドイッチ、飲みものほかに、  
 人に読んでほしい本やパンを届け、  
 抗議に集まる人たちのサロンの場所になっています

この「かくめい喫茶の夕べ」は、  
 たべものやつくったもの、うたやことばを持ち寄る夕べです  
 デモのあとに、デモに参加してなくても  
 どなたでも、ぜひあそびにきてください

EL CARACOL DE RESISTENCIA

"Save Me, Save Us" デモ  
 2013.6.30 新宿 13:45集合 14時出発  
<http://saveme630.tumblr.com/>  
[twitter @630SaveMeSaveUs](https://twitter.com/630SaveMeSaveUs)

素人の乱 12号店2号店 ローション  
 上島 橋  
 高円寺駅  
 東京都杉並区高円寺北3丁目18-12 フヂビル2F  
 JR高円寺駅より徒歩約7分くらい

“ SaveMe,Save Us ～かくめい喫茶の夕べ”

- ★ 6月30日 17:00～22:00くらい
- ★ 素人の乱 12号店2号店(高円寺)
- ★ 参加費:チケット購入 おとな 500円、こども 250円。

チケットで食べものや飲みもの、グッズと交換できます。

★選曲:野中モモ(Lilmag)ぽえむ(2MUCH CREW)

★ギターとことば

ギター:鈴木美紀子、ことば:原田淳子&参加者歓迎

飛び入り参加歓迎です。読んでほしいことばがありましたら [saveme6.30@outlook.jp](mailto:saveme6.30@outlook.jp) までお送りください。お読みいたします。

★ゲリラ・カフェ図書館

金曜日官邸前抗議にて出沒するゲリラ・カフェ併設図書館の出張版。

★ zine コーナー:持込歓迎

★展示販売:タルミナナエ(切り絵)、サパ子(ヤバスタ・グッズ)など

「かくめい喫茶の夕べ」は、  
食べものや作ったもの、うたや ことばを持ち寄る夕べです。  
デモのあとに、デモに参加してなくても、  
どなたでも ぜひあそびにきてくださいね。』

● 6・9

『〈6.30 Save Me, Save Us デモ 呼びかけ文〉

みんな、のびのびハッピーに生きてる？  
空気、読み過ぎで疲れてない？  
就活でこれまでの人生すべてを否定された気分になってない？  
サービス残業には NO ！って声出してる？  
過労死とか自死、餓死する前に「助けて！」って言える？  
っていうか、ちょっとツライことがあった時でも「助けて！」って言える？

そんなのあたり前の権利のはずなのに、  
実際は成功してお金を持った人しか生きていけないような社会だよな。  
絶えず競争とストレスにさらされて、人を思いやる余裕もない。  
孤独感や劣等感をこじらせて監視し合ったり、  
自己責任論に流されて生活保護受給者をバッシングしたり、  
在日外国人にヘイトスピーチ(ここでは根拠のない理由で非難すること)浴びせたり。  
政府はとえば、いまだに原発もなくせずにいるし、マイナンバー制度、  
生活保護引き下げ、国防軍設立、女性手帳の発行、ダンス規制、TPP …と、  
国民を納税ロボットとして管理することしか考えていない。  
企業のエライ人たちも、会社のお金を増やすことしか頭になくって、  
働いてる人の生活とか労働環境は悪くなるばかり。  
そして気付けば、  
「もっと大変な人がいるから」、自分の言いたいこと、やりたいことは心にしまい、  
「誰かのために」、頑張ることだけが美德と思いきまされている。  
世の中は、この悪循環で、キュークツに、つまらなくなる一方。  
もうこんなの、いちいち付き合ってられないよ！



・・・ということで、皆でのびのびハッピーな空間を、路上に出現させてしまおう！  
プラカードや楽器の演奏、ダンス、ジャグリング… etc.  
やりたい方法でアピールするのもよし、ただ歩くのもよし！  
拡声器も回していくので、言いたいこと、言っちゃってください。  
色々な人が色々なやりかたで参加して、  
コミュニケーションしたり、そこで新しい発見があれば、  
毎日の生活でも、お互い認め合ったり助け合ったりしやすい世の中につながるはず！

デモの後はアフター・パーティーもやります。  
もちろん、どちらか一方だけの参加も歓迎！！

(呼び掛け： 6.30 SaveMe,SaveUs デモ実行委員会

Twitter： @630SaveMeSaveUs

↑最新情報や変更点、書ききれなかった呼び掛け趣旨など、随時 up していきます♪

連絡： saveme6.30@outlook.jp)』

## ● 6・23 反貧困ネットワーク

『反貧困ネットワーク 参院選前集会「どうする日本の貧困問題」

日時：2013年6月30日(日) 14:00～16:00(13:45開場)

場所：築地本願寺 第二伝道会館蓮華殿(東京都中央区築地3-15-1)

<http://tsukijihongwanji.jp/map>

参加費：無料(カンパ大歓迎)

※申し込み不要です。直接会場へお越しください。

主催：反貧困ネットワーク

(後略)』

## ● 反W杯デモ 名古屋でも

『「W杯よりも、教育や福祉の充実を！」

反W杯デモは、23日東京・代々木公園でもあるみたいです！

反W杯デモ、名古屋にも飛び火 日系ブラジル人ら1千人



W杯開催などに抗議するデモに集まった日系ブラジル人たち＝22日午後2時28分、名古屋・栄、金子淳撮影



【寺西哲生】2014年のサッカーワールドカップ(W杯)ブラジル大会開催などに抗議するデモがブラジル国内で広がるなか、名古屋市内でも22日、日系ブラジル人ら1千人が参加するデモがあった。

栄の久屋大通公園内に集まったブラジル人らは「教育や福祉の充実を」などとポルトガル語で連呼。約2時間半にわたって訴えた。

法務省によると、愛知県内のブラジル人は昨年12月現在約5万人で、都道府県別で最も多い。今回は、本国でのデモを支援しようと、日系ブラジル人らがフェイスブックで参加を呼びかけた。同県豊田市のナカムラ・マルセルさん(29)は「ブラジルでのデモと一緒に応援したかった」と話した。

デモは23日にも、東京・代々木で行われる予定。』

- きっと身の程知らずのことをやろうとしているのだ、私・たちは。それでも、何とかこの機会の「前髪」をつかみたい。
- 熱にうかされたようなであれ、事態に突き動かされてであれ、3・11／12からの私たちの走り方は、異なった段階に入らなければならない。
- 繰り返しふれたが、私・たちの身の程知らずな振る舞いがフリーター全般労組の貴重な企画を損なうことにならないように、と思う。
- 病の治療のさなかの平井玄さんに、勝手なお願いをしたことをあらためておわびし、それに応じていただいたことを深く感謝する。くれぐれもご養生されますように。
- 矢部史郎さん／北島教行さんの軌跡を、愚直に「寄せ木細工」することについて、お二人の了解を得ているわけではないが、貴重な「表現」としてうけとめ、深く心を動かされている。遠くからではあるけれど、お礼を申し上げる。
- この「〈前〉線情報」を構成するにあたって、他にもいろいろな方々の営みを「我田引用」している。失礼をおわびするとともに、お礼を申し上げる。
- No. 2は、10月はじめの予定

## **生・労働・運動ネット富山**

**代表 埴野謙二**

2013年7月

〒 930-0009 富山市神通町3-5-3

TEL : 076-441-7843 FAX : 076-444-6093

URL : <http://net-jammers.net> E-mail:[jammers@net-jammers.net](mailto:jammers@net-jammers.net)